

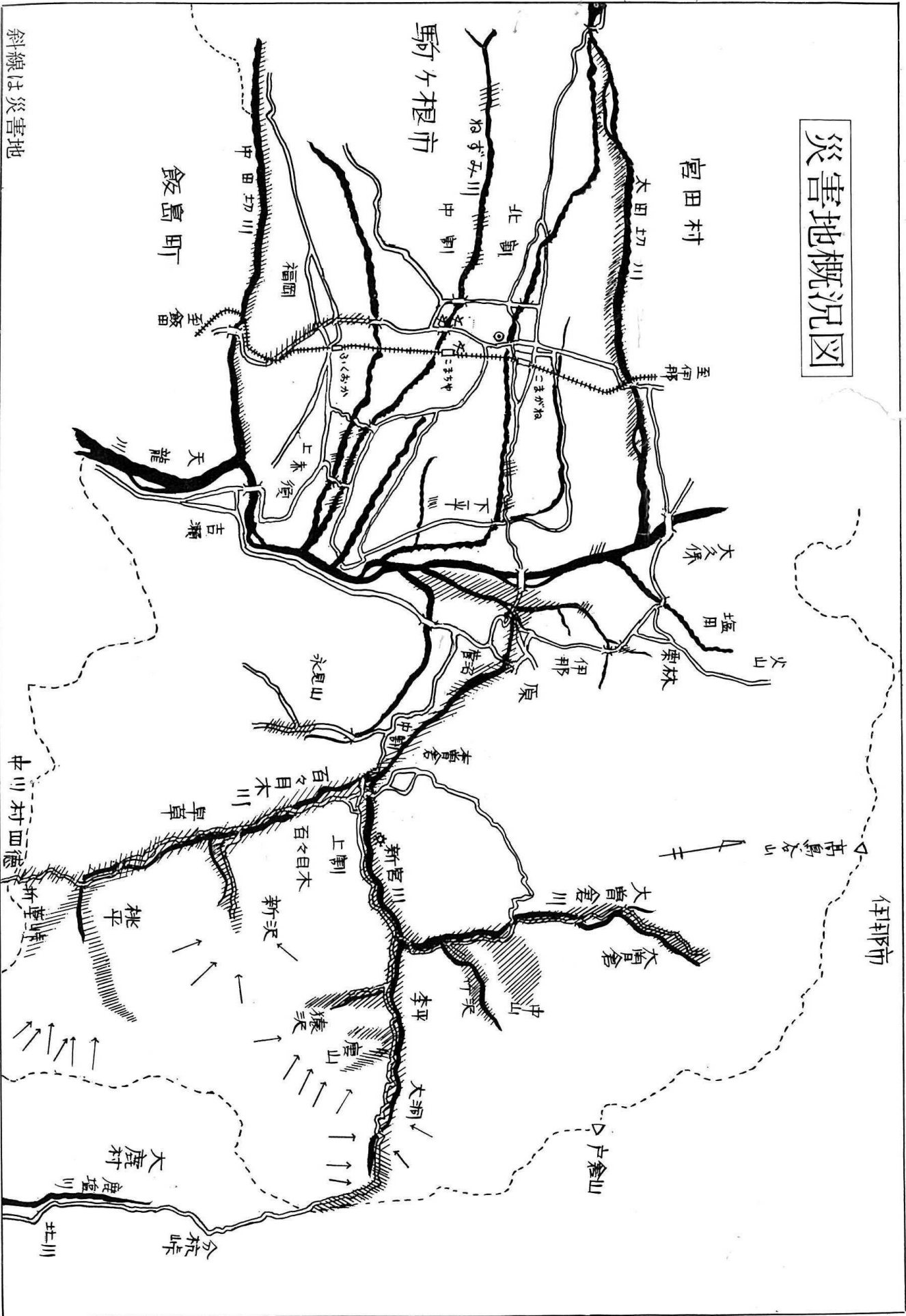
駒ヶ根の災害誌

36.6 梅雨前線豪雨災害を中心として



1964

災害地概況図



斜線は災害地

贈呈



災害復興記念碑

梅雨前線豪雨災害

昭和三十六年六月下旬伊那谷地方一帯は梅雨前線の影響により一時間四〇耗以上の集中豪雨を受け新宮川百々目木川を中心とする市内の被害は死亡五名家屋流失損壊一一九戸の外道路橋梁堤防の流失農耕地の損壊冠水林地林道の崩壊等無数に生じ被害総額約三一億円その惨状は二五〇年来といわれた

自衛隊を始め全国各地からの救援を受けて全市一丸の救助活動が行われ爾来三年国県関係機関の指導援助の下に約二〇〇世帯の移住者の受入れ総工費約二九億円に及ぶ復旧防災事業もここに概ね完工をみるに至った

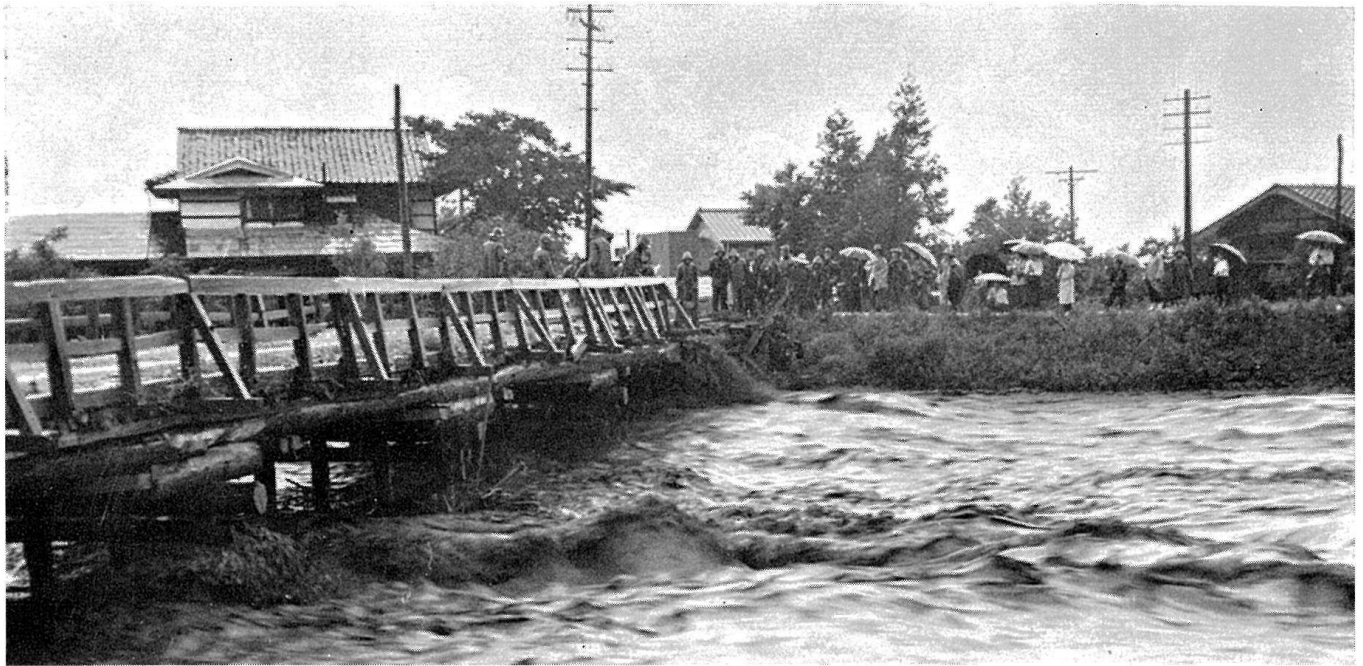
此度災害復興記念式典挙行に当り犠牲者の冥福と被災者の再興を祈り復興事業の推進者並に協力者に感謝しここに建設事業関係者の協力を得てこの碑を建立し概要を勒して記念とする

昭和三十九年七月

駒ヶ根市

記念碑は中田切産の青石 2m 35cm の棹を用い、台石は太田切沿岸岩田平産の花崗岩 1m 85cm の基底にコンクリートの枠を組み、周囲に下間川沿岸産の岩石を添加し被災者有志が当時を追憶しつつ寄贈された草花を岩間に移植した。総高 4m 20cm の立派なものである。碑の銘は市長の手になり、石工は市内太田秋夫氏。建設費は市費及び関係建設業者の拠出により 70 万円を要した。

* 新宮川流域 *



新宮川の濁流により流失寸前の新宮川橋



濁流うずまく新宮川岸付近



新宮川の氾濫で埋まった新宮川岸(新宮川橋流失)

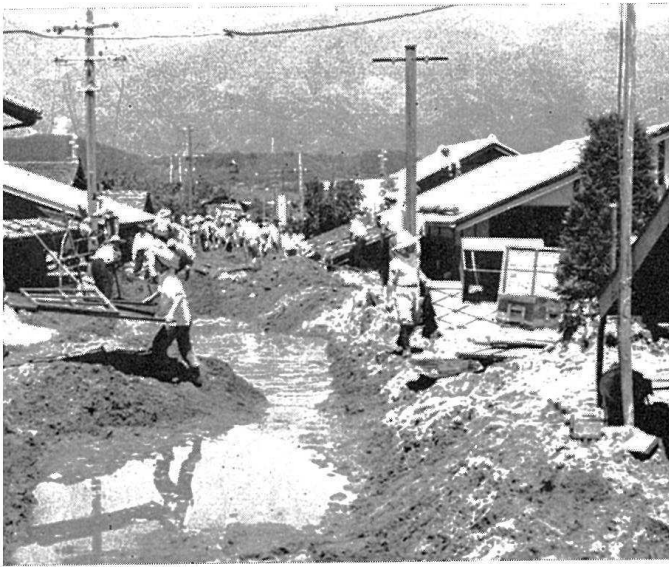




軒まで土砂に埋った新宮川岸の家々



家財道具を干す新宮川岸の人々



土砂の排除をはじめた新宮川岸の罹災者



災害地の防疫



流失切断された下曾倉橋



百々目木, 新宮川合流点付近の惨状



上割新宮川発電所付近の惨状



壊滅した発電所



災害前の落合(上)



災害後の落合(右)

落合部落14戸流失のあと(下)



倒壊した落合稚蚕飼育所

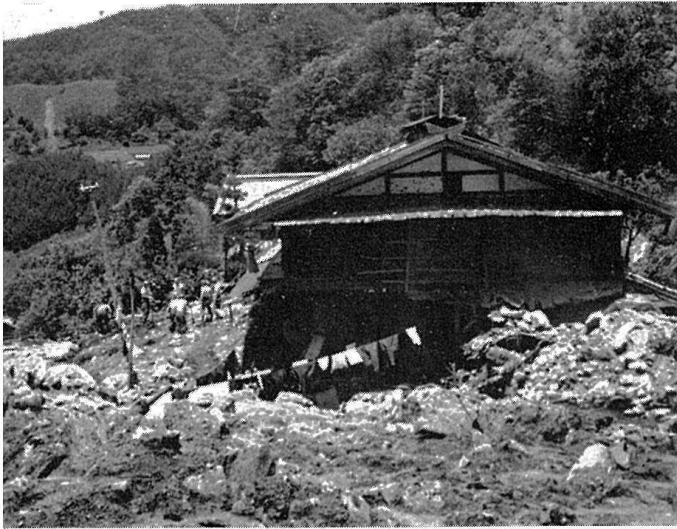




猿沢入口付近の惨状



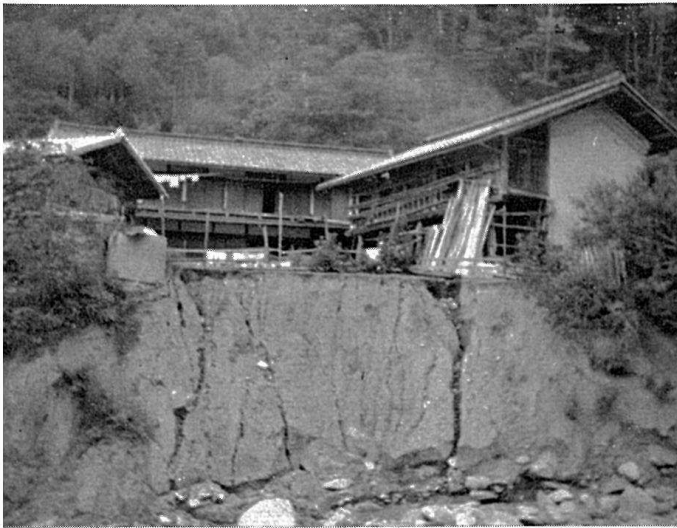
李平明賀の倉庫流失、本屋半壊の惨状



山津波に破壊された唐山の惨状



上割李平の惨状



前庭まで濁流に洗われ危険になった大洞の家

一瞬のうちに5人の命を奪われた大洞双山さんの家と遺体の発掘



 ** 百々目木川流域 **



百々目木川の氾濫（五十目付近）



自衛隊員による東分校への架橋工事



道路をつくる自衛隊員（左）と救援物資を背負って作ったばかりの道をゆく隊員（桃ヶ平にて）

桃ヶ平付近百々目木川の氾濫



 ** 東伊那地区 **

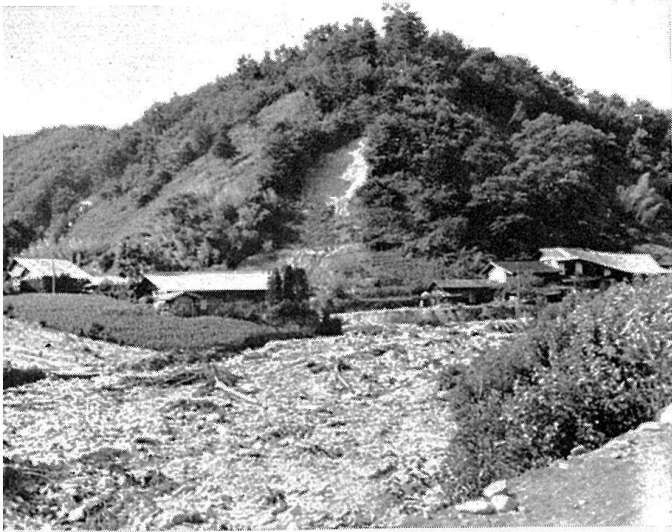


倒壊した新築したばかりの家

 * 中 川 村 四 徳 *



大張田中前より見た増水のはじまった頃（上）
 と災害後の状況（左）



濁流に洗われた四徳分校



桑原峯地籍より四徳方面の山肌を望む

 * 大 鹿 村 *

大西山の崩壊による家屋倒壊の惨状



* 災 害 復 旧 *



中沢下井頭首工被災(上)と完成(左)

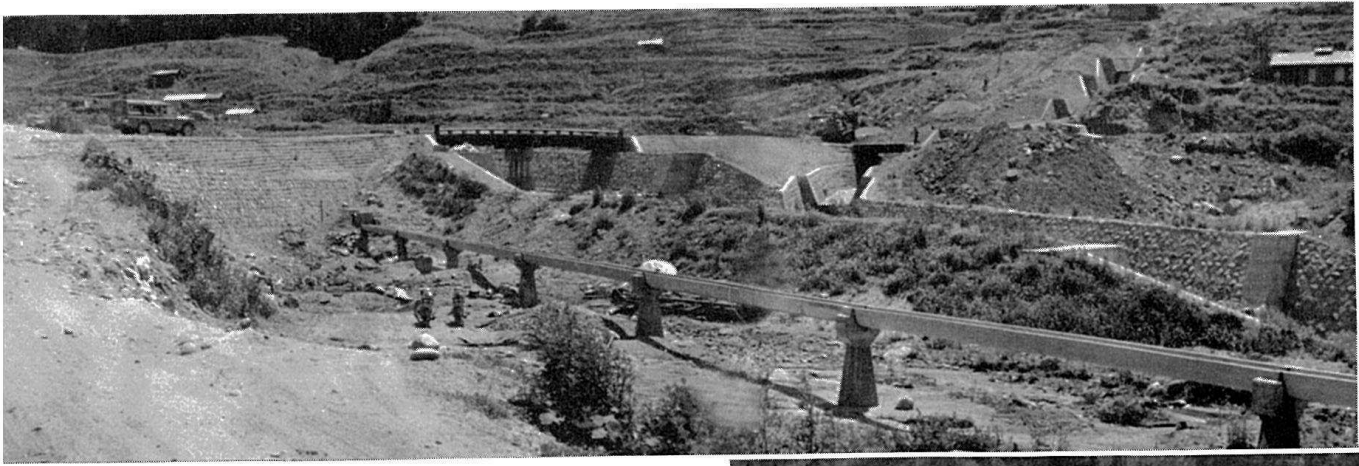


百々目木の農地被災(左)完成(下)



舟渡島の農地被災(左)と完成(下)





引の田井(水路)被災(右)完成(上)



釜洞の橋梁 被災(右)完成(上)

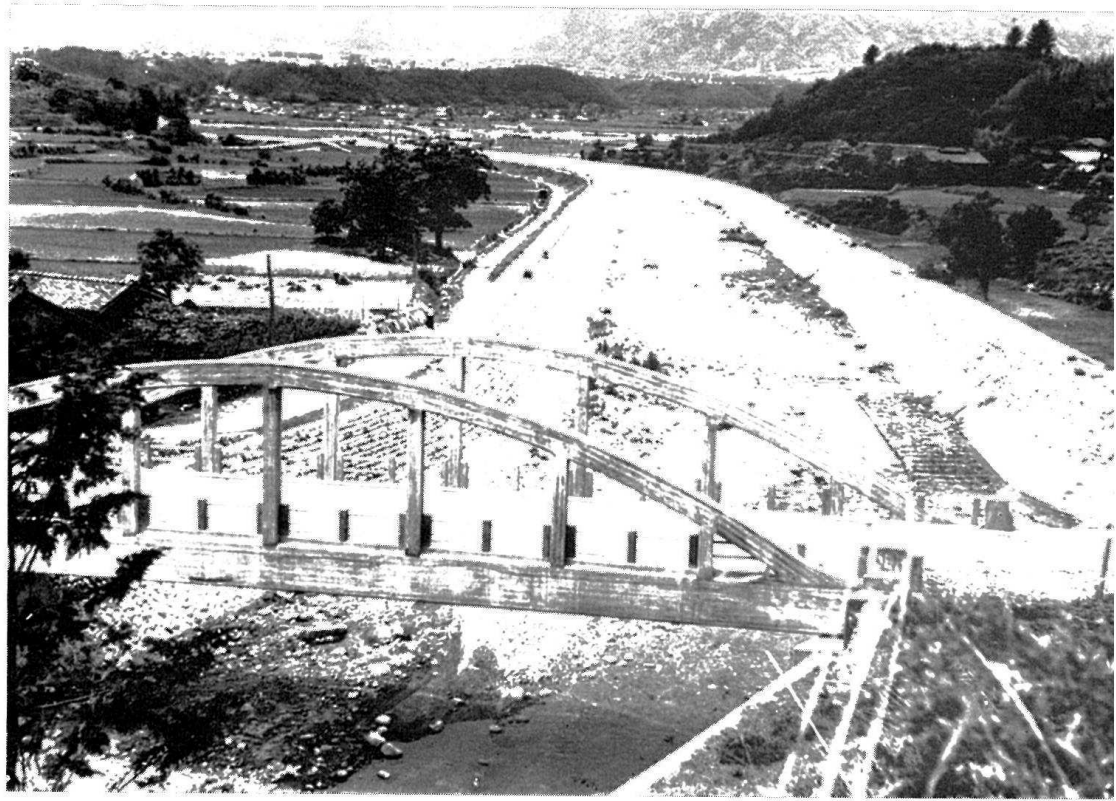


大角洞 被災(左)完成(下)

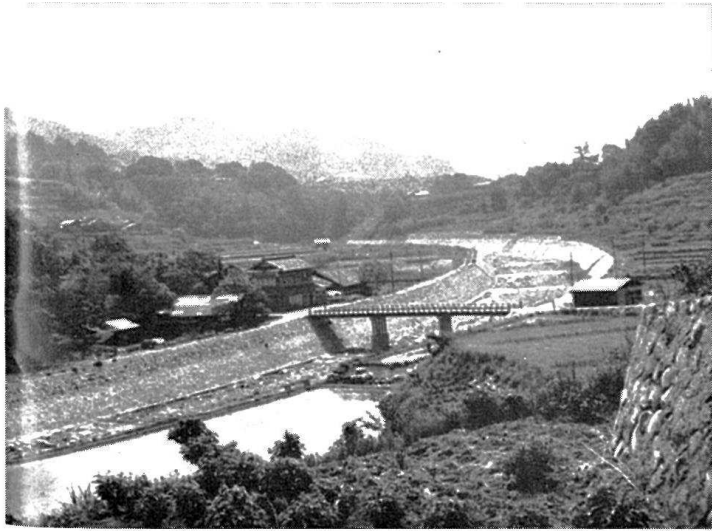




新宮川橋付近
被災（上） 完成（左）



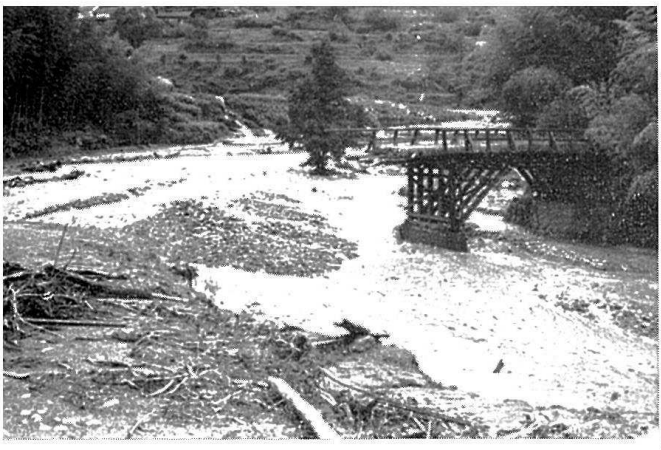
完成した松木平橋と堤防



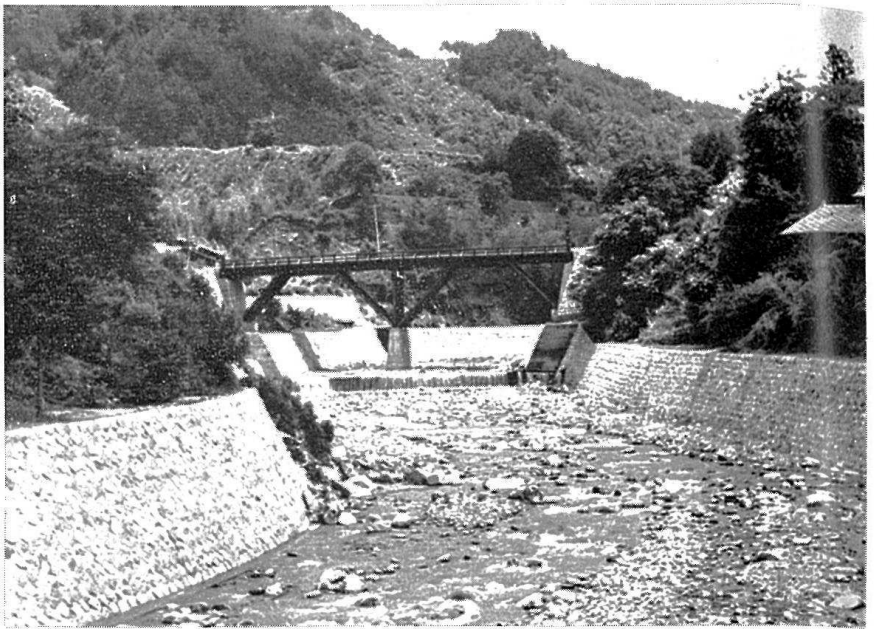
下曾倉地区の護岸

猿沢口より下方の護岸 遠山は中ア

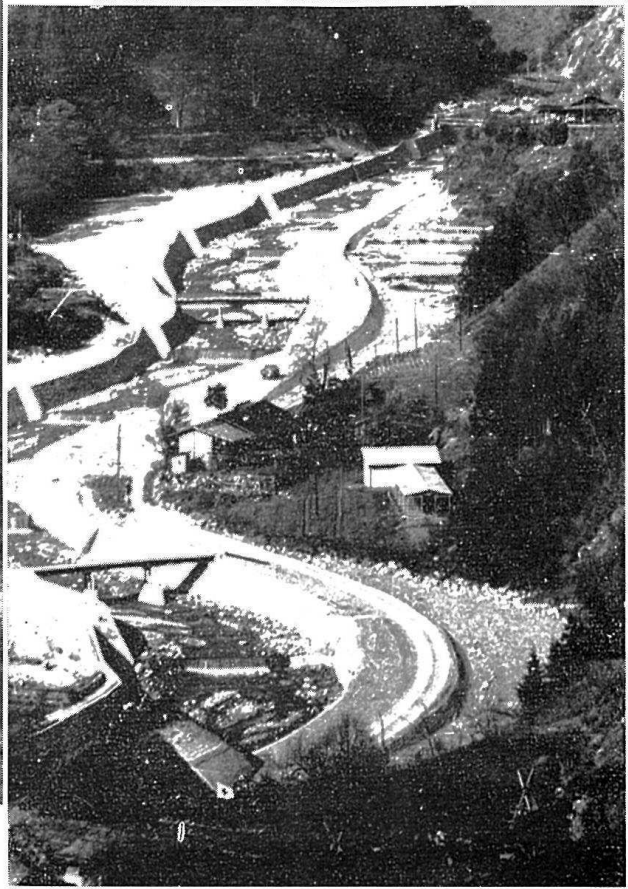




道平橋被災(上)
完成(右)



落合被災(上)復旧(右)



復旧した大松尾林道

目 次

表 紙 流失埋没した新宮川岸の耕地
題 字 北 原 名 田 造

| | |
|---------------------------------|----------------|
| 口 絵——目で見ると復興 | 3 |
| はじめに | 駒ヶ根市長 北原名田造 14 |
| 第Ⅰ編 郷土史にのこる駒ヶ根の災害 | 15 |
| 第Ⅱ編 36. 6 梅雨前線豪雨災害 | 26 |
| 1. 概 況 | 26 |
| 2. 災 害 日 録 | 27 |
| 3. 四徳（中川村）の災害 | 39 |
| 4. 大鹿村の災害 | 43 |
| 5. 濁 流 —— 36. 6 梅雨前線豪雨記録文集から —— | 46 |
| 第Ⅲ編 復 興 | 48 |
| 1. 36. 6 梅雨前線豪雨耕地災害復旧工事について | 48 |
| 2. 36. 6 梅雨前線豪雨公共土木災害復旧工事について | 49 |
| 郷土災害年表 | 51 |
| あとがき | 60 |

はじめに

駒ヶ根市長 北原名田造

正徳5年(1715)6月17日に発生した「ひつじ満水」以来247年ぶりといわれる「昭和36年6月梅雨前線豪雨」は当市にも未曾有の大災害を発生、随所に激甚なる被害を与え、ことに中沢新宮川、百々目木川流域一帯の惨状は言語に絶し、死者3名、行方不明2名、罹災世帯119世帯、罹災人員558名、家屋、一般土木、耕地、山林などの流失崩壊による被害総額は30億9千万円余におよぶ史上最大の災害となりました。

特に大松尾、戸倉山は、390箇所におよぶ山岳崩壊を生じ、土砂、岩石、立木を押出して濁流となり、その被害は目をおおうばかりの惨状を呈し、市では直ちに災害対策委員会を設けて防災につとめ、県に対しては災害救助法の発動と自衛隊の派遣を要請、6月28日午後6時50分災害救助法の発動をうける一方、臨時市議会、災害対策本部の設置などを行ない、国、県の援助を得て官民各関係機関団体の協力のもとに救助活動をはじめました。

また県知事の要請により出動した自衛隊は、人命の救助、道路の架設、物資の運搬をはじめ応急作業に日夜をわかつた努力を続けてくださいました。

こうした活動と相まって、土木、耕地関係の復旧工事も大型機械をもちいて36年度から着工しました。

次いでこの災害の激甚地で、すべての財産を失い新地に移住を余儀なくされた罹災者の移住対策、応急仮設住宅の建設、災害転職者の職業訓練所設置も併行して進めましたが、災害発生以来ここに満3年、復興田の植付も終り、耕地、一般土木の工事も完了し、市制10周年並びに梅雨前線豪雨災害復興記念式典を挙行するはこびとなりましたことは、皆さんとともによろこびにたえないところであります。

このときにあたって、駒ヶ根博物館から「駒ヶ根の災害誌」を刊行し、幾たびかくり返されてきた災害の教訓とその記録を広く頒布することは時宜を得たものと思いますので、幾百の爪痕がいて緑につつまれる日の近いことを祈念し、犠牲者の冥福を祈るとともに、今回の災害にあたって寄せられた救済と、復興に尽力して下さった多くの方々に感謝申し上げ、災害の折よんだ短歌一首をそえてははじめのことばとします。

昭和39年7月

幾百の
爪痕
伊那山脈
梅雨前線
豪雨過
たき
北原名田造

第I編 郷土史にのこる駒ヶ根の災害

はじめに

今次伊那谷を襲った。集中豪雨による災害の跡をかえりみて思うことは、今度の災害と同じかまたはそれに近いような恐ろしい災害が過去においても、幾度か繰り返されたことを知らなければならない。一度あったことはまた何時かはあるものと覚悟しなければならない。今度の災害を越えて偲うことはまた何時の時にか彼様な恐ろしい災害もあろうことを深く心にとめ覚悟を新にして、常にその対策に万全を期さなければならない。

この意味において過去の災害の歴史をひもどくこともまた意味のないことでもなかりうと思う。

武田時代の災害

天文2年5月20日、天竜川大洪水、伊那谷一帯の田畑人家、畜に大被害。

天文9年5月、天竜川大洪水、木曾飢饉。

天文14年乙巳年同15年丙午年又飢饉、世に己午の飢饉。

文禄3年8月10日、天竜川大洪水、下流地方殊に甚大。

慶長元年、此年浅間山噴火時に地震有り。

徳川初期の災害

慶長9年11月、浅間山焼く。

慶長14年巳酉8月16日、大洪水、8月10日大風雨。

慶長17年5月、天竜川大洪水、箕輪郷の田中城およびその城下町流失、三日町を天竜東の現在地へ引移す。

「上伊那郡史」

慶長19年8月、天竜川大洪水、8月洪水、11月大地震。

元和6年8月、洪水

元和8年8月11日、大洪水、近藤領上穂村の田畑4丁2反7畝歩流失

寛永元年4月、天竜川を始め支流各河川大洪水、天竜川満水、田島に大水害、一部の者高遠原へ上る。

「上伊那郡史」

寛永2年5月1日、近江、美濃、伊勢、駿河、三河、信濃、山城等諸国大地震近江国だけでも百姓男女412人死亡、信濃国内でも人畜の被害甚大。

寛永3年、夏早魃、草木枯死、河魚干死す「郷土年表」

寛永4年8月洪水、10月4日大地震所々に潰屋あり、

人民甚だ難渋、寛永10年幕府諸国に巡見使を派遣。

「赤須旧記」

寛永18年、当年早魃大雨風数度、作物実らず木葉草葉迄でも払底、万民難渋。

寛永19年午年、去巳年に増る大凶作、諸国共に人間は申すに及ばず牛馬犬猫までも餓死するもの限りなし。貧者は松皮を餅につき喰い、又古菰を貰い集め粉にしてなめるほどの飢饉、山川道中に倒れ死ぬもの数知れず。

正保2年正月26日、浅間山噴火、5月木曾大火

慶安元年5月、洪水

慶安3年3月、天竜川大洪水下平浸水、夏洪水、地震

「上赤旧記」「上伊那郡史」

慶安4年3月、浅間山噴火、夏洪水。「上赤旧記」

承応元年6月、天竜川大出水川路村被害甚大。

「川路水防史」

承応の災害と井堰の開さく

承応3年(1654)本年洪水、高遠領民苛政に苦しみ、領外ににげ去る者3000人に及んだ。「近郷郷土年表」

上穂村近藤領の定納米は寛永初年には678俵であったものが、寛永15年(1638)には723俵に増加、これが承応3年(1654)には251俵に大激減、その上御種子貸米25俵2斗5升、殿様御貸米が18俵となった。これはいかなる理由か、当時の状況より判断しておそらく太田切川その他の災害と、その復旧ならびにこれを機会に、上の井の開さく工事によるものではなかりうか。その後寛文2年まで定納米250俵であったものが、その翌年寛文3年(1664)の上穂村近藤領の定納米は798俵3斗5升到急増、加えるに増米100俵、末年新田13俵、合計1150俵2斗8升到急増している。これは(承応3年より10年)鎌下年期明けと、井堰の完成、新田開発によるものと判断される。

延宝前後の災害と飢饉

延宝元年、大洪水

延宝2年7月、洪水、太田切川、田沢川切込、秋凶作、下伊那阿島方面に小作科軽減の騒動起こる。

「下村、知久文書」

延宝3年、秋近年稀な凶作、飢饉。「上伊那郡史」

延宝4年7月、洪水、凶作、春から夏にかけて天下飢饉。「上伊那郡史」

延宝5年、飢饉甚だしく、餓死するもの多く、乞食、

非人おびただしく、町々通路をふさぐ、お助け小屋を建つ。

「飯田世代記」

延宝8年7月 洪水，秋より冬大旱魃，今冬飢饉。

「上伊那郡史」

天和元年酉年，飢饉

天和2年正月，洪水，天然痘流行。「上伊那郡史」

天和3年3月，大洪水。「松尾小史」

貞享元年夏，旱魃，但秋豊作

貞享3年凶作（松本藩内に中萱嘉助事件起こる）

「上穂赤須旧記」

元禄の災害と河除林

元禄2年5月，洪水

元禄3年12月6日，上穂，赤須両町大火，過半数焼亡。

元禄4年2月，大洪水，田沢川切れ込み，南下平流失水田高3石9斗5升1合，畑高1斗3升2合川欠。

「下村文書」

元禄4年2月，下平村共同太田切川に河除林をたつ。

太田切川河除林立申連判之事

1. 太田切川河除林の儀，太田作之進様御代官の節，御手代佐々木惣七郎様，浅利喜右衛門様御兩人御見分にて被仰付，山の鼻より天竜川まで長さ700間，横100間，諸木を植え惣百姓仲間林に立て申候事。
1. 河除牛木，杭木，そだ，井堰草等，相談にて切り申事。
1. 苜蓿夏草の儀は地主加り取り可申事。
1. 林守の儀は地主仕可事。

右定め申上は互に吟味仕り，一切諸木切り取り申間敷候為後日連判証文如件

元禄4年かのと未2月 日 「堀内文書」

元禄4年5月，霖雨降り続き，8月洪水

元禄7年，洪水，南下平田畑流失，田高4石7斗2升9合，畑高1升3合，川欠永引。「下村文書」

元禄9年6月，夏の真中に雪降る。次に洪水，本秋凶作，前段災害により酒造に課税，規制を加えた。

元禄11年5月，天竜川，太田切川大洪水，下平村へ切れ込み未曾有の大惨事，殊に南下平は過半水を蒙り，田畑屋敷の流失夥しく，約高500石の耕地が川欠，天竜川沿いの家屋敷を山際へ移す。

元禄12年8月，大風雨，天竜川，太田切川大満水，下平村へ切込み，昨年5月の大洪水に次ぐ，流失田畑南下平水田高34石，畑高8石9斗7升3合川欠，赤須町分水田4石4斗4升，畑4斗4升8合 「下村文書」

元禄13年，大凶作人々苦しむ。

元禄14年8月，洪水，秋凶作，飢民多く，餓死者が出た。

元禄15年4，5月頃に狼現れ被害多，8月洪水

元禄16年10月地震，11月大地震，伊那に潰家あり 「近世郷土年表」

元禄17年正月 浅間山噴火

正徳5年（未満水）

正徳5年6月17日より同24日まで，伊那谷未曾有の大雨降り，各河川とも大洪水にて，田畑，家屋，道路，橋等の流失限りなく，太田切山崩れ，太田切川満水，古田切川を押埋め新たに石川ができた。そのため安楽寺流失，南下平入口では田畑，家屋流失，流死人9名，このため米価大暴騰，金10両に米10俵という未曾有の相場が出現，8月1日にまた大風雨，この秋5穀凶作。

正徳5年6月南下平村川欠水押書上帳「下村文書」

1. 屋敷 1畝19歩 榑引押埋 又三郎
1. 原畑 2畝6歩 右同断 同人
1. 家 4間棟に8間 右同断 同人
1. 土厚く，諸道具召物何にても，一切出し不^レ申也
1. 人数 9人 9人押埋り，死人5人（内男2人，女3人）残る4人出申也（男2人，女2人）渴命に及び申候
1. 馬 1頭 押埋り死亡 同人
1. 田 2カ所 ^{上田13歩} 下田2畝10歩 永川欠 同人
1. 屋敷 20歩 榑引押埋 喜平次
1. 家 4間半に6間半 右同断 同人
1. 田 5カ所 ^{中田8畝歩} 下田2畝歩 永川欠 同人
1. 屋敷 永川欠 長左衛門
1. 田 7カ所 永川欠 半九郎，清三郎，徳右衛門，門十郎，己兵衛，次郎兵衛

右書上候通り，当6月17，18両日の大雨にて，天竜，太田切，宮沢の諸川満水仕り，榑引，家屋敷，田畑共，川欠押埋り罷成申候に付，委細帳面に書上申候，御検分の上，御了管被^レ施被^レ下置候はば，難^レ有奉^レ存候，云々
正徳5年未6月26日

南下平村名主 治郎兵衛

1. 正徳5年6月18日，伊那郡中未曾有の大洪水あり。田切，野底川大石を流し出す。島田辺は流失家屋64，死人33人，馬6疋，田畑流失7800石余，米430俵3斗2升3合，困窮者へ救助米として1人に付米1合宛分与，飯田も大洪水ありて風越山諸山一時に崩し飯田を襲はんとす。

人民立退市中火災あり，56軒流失その他田畑7800石の地永流，当流などあり，180年以來の大洪水な

りと伝えたり。暴風雨山崩のため野尻村の須佐男社流潰す。同日木曾川洪水須原宿、古町流る、この年凶作、秋より物価上がり粃10両に22俵、大根100文に2把、小麦1分に付1斗3升「上伊那郡史」

享保の凶作と差上地

正徳のひつじ満水は伊那谷の記録に残るものでは始めての大災害で、その復旧もできかねた翌年享保元年8月洪水被害甚大、翌2年5月中旬から早魃100日に及び、7月23日大地震、8月19日浅間山噴火「上伊那郡史」

翌3年7月26日大地震、享保4年8月15日大洪水、世人これを「亥の満水」という。翌年の5月朔日浅間山噴火、8月洪水、享保5年8月、享保6年7月20日洪水、南下平田畑流失、田高9石6斗1升、畑高1斗2升、7年6月、9月凶作のため世中騒然、8年8月洪水、9年8月6日大風雨被害甚大、「郷土年表」といったように、災害の連続であった。10年から12年までは大きな災害も見られなかったが、13年8月4日から降り出した雨は13日まで続き近年稀れな大凶作、翌14年春となり、昨年秋の不作から百姓は食うに食なく、飯島代官手代中根角右衛門が赤須村外5カ村の飢人調査に来た。その調査の結果、飢人合計490人あったことを報告している。

享保16年4月、5月、8月、9月洪水、ことに8月大洪水にて天竜川氾濫、田畑流失夥して、世に「亥の川欠」という。

17年6月霖雨、つづいて凶作、米価高騰、10両に米25俵、18年7月洪水大凶作、餓死者続出、17年以前「未満水」より被害が大きかったといわれる。享保18年5月早魃、田地しつけ水渴水、享保19年8月洪水、秋凶作、9月赤須町小町屋、市場割大不作に付両検見願出。

「注記」前段の如く連年の災害凶作につき、再三免税、減税を願い出たが、免税どころか毎年御上納が増加するばかりなので、たまりかねた貧しい農民は課税対照となる農地を捨て、欠落（夜逃げ）するものが多くなり、捨て去った農耕地を共同耕作して「御上納を弁納しておった。村役人たちは遂には弁納もできがなくなり、その土地を「差上げ地」としてお上へ差上げたき旨の願書を出した。これをみても当時の農民の苦情を察して余りあるものがある。

乍恐以書付奉願上候事 「赤須町問屋文書」

（前略）当村の儀、古来より悪場所に御座候処、年増に御高免に罷成り、御年貢弁納の田畑多く御座候に付、前々飯島御役所へ上ヶ地の場所書付け御願申上候へ共、御了管無御座候に付、村惣作に仕り罷在候故、難儀に奉存候。

右弁納田畑差上ヶ地に奉願候場所 高963石8斗御座

候、此訳け

- | | | | |
|-----------|-----|-------|-----|
| 1. 高236石 | 内荒地 | 45石3斗 | 赤須町 |
| 1. 高127石 | 同 | 33石5斗 | 上赤須 |
| 1. 高341石 | 同 | 68石 | 小町屋 |
| 1. 高90石3斗 | 同 | 15石3斗 | 市場割 |
| 1. 高170石 | 同 | 34石5斗 | 南下平 |

右の通り御座候 以上

赤須5カ村

享保19年寅17月

塩尻御役所 室七郎左衛門様

元文3年の災害と下の井決潰

元文3年5月より雨降り続き、7、8月天竜川氾濫、支流の各河川共土砂を押し出し、橋を押し流し、道路を欠潰、田畑等の流失頗る多く、高遠領内のみにては田畑高1万6石余の損失、米価暴騰金10両に米18俵、5月太田切川満水、下の井堰口500余間押流され、作付不能につき御役所へ注進した。「赤須町文書」

覚（赤須町田畑痛ミ大積り）

「赤須町問屋文書」

村高471石5斗 信州赤須町田畑高

- | | | |
|-------|--------|------|
| 1. 田高 | 236石8斗 | |
| | 内31石 | 皆無作 |
| | 158石 | 大痛ミ |
| | 43石 | 中痛ミ |
| | 4石8斗 | 小痛ミ |
| | 外7石8斗 | 無作 |
| | 同17石 | 亥ノ川欠 |
| | 同8石 | 前々川欠 |
| 1. 畑高 | 194石7斗 | |
| | 内70石 | 皆無作 |
| | 100石 | 大痛ミ |
| | 5石 | 小痛ミ |
| | 外2石3斗 | 無作 |
| | 同4斗 | 川欠 |
| | 同5斗 | 屋敷 |

右者先達御注進申上候通、7月22日より23日風雨にて、田畑損毛見分仕候処、未だ難見定候に付 大積り如書面に御座候 云云

元文3年午8月 赤須町 名主

大草太郎左衛門様御役所

宝歴の災害と跡地の開発

- 宝歴元年2月、昨延宝3年午12月江戸伊勢屋五兵衛赤須町文之丞から出願のあった。太田切河架橋、並に下平村川除普請につき、飯島代官所では、利害関係各町村に諮問した処、上穂村、宮田村等から反対の返

答があり、不許可となった。

1. 宝暦元年4月24日、北信、越後に大地震があった。
(寛延元年?)

1. 宝暦2年、昨年小町屋東村へ移転した如来寺が、今春焼失、翌3年12月小町屋船山の現在地に再建。

1. 宝暦3年4月、麻疹流行、8月天竜川洪水。

1. 宝暦4年2月27日、江戸下谷長富町久左衛門、団助の兩人出願に關する、元禄11年の大水害により流失した下平村天竜河原の検見に代官手代浜名豊吉、金子八郎の兩人出張

1. 宝暦4年8月 猪、鹿、早霜の被害夥しく検見を願出た。

乍恐以書付奉願上候 「赤須町問屋文書」

(前略) 私共村方の儀山寄にて猪鹿夥出で、作毛荒し其上、霜降早く候に付例年早稲中稲斗り作り申候に付、来28、9日頃より刈取り申度奉存候間、何卒急ぎ御検見被遊被下置候様に奉願上候

宝暦4年戊8月

赤須6カ村 名主組頭一同

(注記) 前記猪鹿の被害を物語る資料として、「宝暦4年上穂村入用割合帳」に「惣メ24貫400文中獵師扶持分錢5貫400文」と記載あることからしても、猪鹿の被害が甚大であることが察知できる。

1. 宝暦5亥年夏天竜川洪水、是を「亥の川欠」という両下平の田畑が流失したので、両下平の人々が協力して、惣人足で川除林に松の木を植えて、将来の水害に備えた。

1. 宝暦6年11月11日、下平天竜河原の開発場所検分として、坂木代官天野助次郎が出張した時、入会秣場の事から上穂、赤須両村に争論が起った。これがいわゆる宝暦の秣場争論で10余年間論争を続け、江戸表までも訴訟に及んだが、宝暦13年5月に至り漸く和談内済した。

1. 宝暦7年4月より5月6日まで雨降り続き時々洪水指上申す一札之事

両下平用水路大破に付、赤須町の内4カ村へ助人足被仰付候、御割賦の通り、初日には差出候へ共、町分柄の百姓、悉く難儀仕り候故、達而御訴訟申上候 処御聞済の上御割賦御減し被下、去10日人足10人差出候様被仰付云云(下略)

宝暦7年丑5月

飯島御役所 赤須町名主代

1. 宝暦7年9月、天野助次郎天竜河原開発場所再検分

1. 宝暦8年5月、数年以来赤須町と赤須町文之丞と、天竜河原田地流跡に付き出入ありて、江戸表までも出訴したが、今春に到り取受人ありて和解内済となった。

1. 宝暦8年8月、上穂、赤須秣場出入に付、江戸より

論所検分吟味として、田辺仙助、白須直七の兩検使が出役して、8月から10月まで3カ月に亘り論所を改めた。 「島治文書」

1. 宝暦9年2月、天竜河原開発工事は久左衛門、団助並に兵次郎外8人にて請負う事になった。

「赤須町文書」

1. 宝暦11年3月、下平村天竜河原の開発工事は久左衛門、団助並に兵次郎外8人にて開始したが、工事は少しも進行しないので遂に久左衛門、団助等願人の工事請負を免じて両下平の村請工事に移す事になった。

1. 宝暦12年5月の早魃、当秋不作

1. 元禄一延享年間の赤須町田畑荒高調

宝暦14年赤須町田畑荒高書上帳「赤須町文書」

本田畑荒高 34石4斗6合

内田方荒高 32石9斗5升 前々川欠永引

4石4斗4升 元禄11寅 5斗 宝永11酉

1石2斗2升 元禄13辰 1石8斗5升 享保元申

16石9斗 享保16亥 1石8斗4升 延享元子

2石8斗 寛保3亥 1石6斗2升 寛延四未

内畑方荒高 1石4斗5升 前々川欠永引

4斗5升 元禄11寅 1石 延享元子

右之通り書上候処少も相違無御座候 以上

宝暦14年申4月

赤須町名主 興市右衛門

天明の天災と大飢饉

天明2年7月、浅間山大噴火、本年時々大風雨、秋5穀不稔、凶作飢饉、此冬時々雷鳴。

「近世郷土年表」「大沼日記」

天明3年5月29日、15匁から20匁大の雹降る。人畜草木に被害、田植後益々曇天、雨天続き、冷氣甚だしく、8月4日大水出、4月より7月浅間山噴火、伊那地方まで降灰、7月7日火見ゆ、水田に害虫発生、8月24日雪降る。当秋未曾有の大凶作、米価暴騰金10匁に米5俵、小諸、上田に大騒動、伊那地方も人気頗る不隠、殊に高遠領内最不隠。 「赤穂大沼日記」

天明4年昨秋以来未曾有の大飢饉、各藩共領内へ施米を出し飢民を救う。3月各地に火災頻々として起る。4月5月頃疫病流行、死者多し、且大飢饉にて行倒続出。

「赤須町問屋文書」

天明5年1月25日、米穀頗ら底、村々穀類津留、村々の出入口に番所を設け、米穀の出入を厳重監視。

「赤須町問屋文書」

天明6年、当年雨多く、而も冷氣五穀大凶作、各村々騒敷く、飢民食を求め旅出人多く、諸所施米、酒造半減、米価暴騰、飯田町では米騒動、穀屋潰起る。

「大沼日記」

天明7年春夏共に、雨天勝、冷氣、五穀不作、米価益々暴騰、秋凶作百姓食うに食なく、所々に騒動、食を求めて旅出人続出、今年酒造大制限、3分の1造り、3分の2減の布令、伊那地方でも飢民に所々で施米を行う。

「赤須町文書」

天明8年、雨天冷害五穀不稔、米価騰貴、各地に施米、9月夫食貯方に付布令、9月飯島代官所より、夫食貯方に付申渡、これにより各村々連印「夫食貯方御請書」を提出

「赤須町文書」「城東文書」

天保の天災と飢饉

天保2年、天明7年より51年目の大凶作、5月早魃。

天保3年、夏以来霖雨、時々洪水、米穀不熟米価高騰本秋不作に付松本御役所へ破免を願出づ

「赤須町文書」

天保4年、4月より6月まで長雨降り続き、稲田に害虫発生、気候不順米価高騰、世上騒がしく、6月飯田にて米屋潰しの噂盛、8月大風雨諸作物皆吹倒され、米価暴騰、米不足にて米屋休業状態、各村より検見出願

「城東文書」

天保5年2月、貯穀を出し飢民に貸渡3月福沢憲治「饑年要録」を編み施本、5月飢饉に付御下ヶ金、御下ヶ穀、8月洪水、今年気候不順秋凶作、11月疱瘡流行

「赤須町文書」

天保6年、6月30日大風、8月5日より13日まで大風雨、大木倒れ稲吹倒され凶作、世上騒々敷諸所に騒動起る。

「赤須町文書」

天保7年4月、大雨洪水、7月2日大雨洪水所々山崩山抜等被害甚大、7月8日御役所より穀物は其の村の村内限り融通して他村に移出を厳禁、8月洪水、8月13日洪水、本秋稀有の大凶作、悪疫流行死者甚多し。

「赤須町文書」

天保8年4月、米価益々騰貴、金10両に米6俵、諸所に米の廉売又は施米を行う。赤須町では貯穀稗6石を払下げた。8月諸方に乞食非人の行倒があった。

「赤須町文書」

天保9年4月29日、大雨洪水、米価高騰、4月24日より26日まで大雨降り続け太田切川橋流失。

天保14年11月、天然痘が流行死者甚多し。

天保15年、3月9日大風、3月22日大風雨

「大沼日記」

安政、万延年間の災害と下平の被害

安政4年5月17、8日大雨天竜、太田切川大満水、諸井頭、境の木より切れ込み、北下平の被害殊に甚大、両下平の耕地6割流失、100年来の大水害、水位3丈余、水死人一人、7月29日大雨洪水、西山大荒、太田切川へ流木山の如く押し出す。上穂石川へ大井切れ込み古田

切北下平へ浸水、17、18日の大雨洪水にて上の井大破上穂赤須両村より人足割出し、応急修理漸く水を通した処、7月23日洪水大破、修理中又々7月29日洪水山崩れ井筋跡方も無く押埋め、関係5カ村立会の上自力に及び難く、御役所へ検分を願出た。9月10日勘定方直井倉之助、普請役齊藤勘一郎廻村下平村普請所検分

5月22日朝地震、8月また洪水。

「下村、北村、大沼文書」

万延元年5月11日、数日来大雨続き天竜川満水、田畑流失、3月より7月まで雨降り続き凶作、5月15日太田切川大洪水、川除林西「山の鼻」より切れ込み、北下平殊に被害甚大、両下平にて被害戸数106戸耕地の8割流失、文化4年の災害より被害大。

幕末の災害と社会不安

1. 元治元年、文久4年2月元治元年と改元、11月19日には江戸からの飛脚により水戸浪士の入信を伝えた。20日水戸浪士下諏訪に宿営、21日伊那街道を下り平出に休息これより二手にて、分れ松島にて合しここに宿泊。22日上穂、赤須宿泊、在町豪農より献金強要。24日は駒場、25日は上清内路泊り、26日に木曾に入り馬籠に宿営。

この年はまたまた大凶作米価騰貴、翌慶応元年5月には小売100文に米4合5勺、飯田では5月17日穀屋潰し10軒に及ぶと。

「飯田町小史」

1. 慶応元年5月15日午後より降り出した雨は16、17日に至り大風雨、天竜川大満水、太田切川の本瀬が下平井筋へ切れ込み、田沢川も満水、その他山沢大荒れ、正徳のひつじ満水以来の大洪水にて各地の被害甚大、此時飯島本郷西岸寺の大島の御朱印地田畑悉く流失、米穀騰貴飯田にては穀屋19軒が潰された。

「下村文書其他」

1. 慶応2年凶作米価騰貴、飯田領主250俵を1両に4俵で払下げ難民を救済、明年出来秋まで1カ年間酒造停止、尚又1カ年間酒宴遊興は勿論客呼び、職人呼等総て酒肴一切停止のお達を出した。

1. 慶応3年、秋諸神御礼降りの俗説美濃方面より始まり、人心きょうきょうとして正気を失い、遂に大祭と変じ、御蔭祭りと称して、世人気違沙汰の乱ち騒をした。

明治以後の災害

明治元年、5月7日より洪水、伊那地方に被害多し、7月2日天竜大洪水、世に辰満水と云う。10月8日米穀の他所売渡並に酒米買入可見旨の御触が出た。

「上伊那郡史、川路水防史其他」

明治2年、天保以来の凶作、困窮者は草根木皮を食

す。伊那里，藤沢，中沢等また騒擾，3月伊那県より又4月7日再度御触が出た。11月民政局より節米御達出づ。

「上伊那郡史其他」

明治15年5月，8月，9月，豪雨，11月1日大洪水
「上伊那郡史其他」

明治17年7月15日洪水，大不景氣，天竜川氾濫，流失面積下平にて4町8反，
「下村文書」

明治18年4月，出水6月雪降，7月1日暴風雨，農作物不足藁餅，松皮を食べる。下平諸井頭，境の木，夜魚川，丸塚より切れ込み下平河原の分更に残らず，流失面積110余町歩に及ぶ，天災打ち続き，農作物不作，藁餅，松皮を食べる。
「下村文書其他」

明治22年7月15日，天竜川氾濫，明治19~20年に構築した80間の堤防流失，水位1丈余，田畑流失27町2反10歩，7月26日暴風雨，9月11日強雨畑流失，

「下村文書」「北村文書」

明治23年4月19日，天竜満水下平流失面積田3町3反，聖牛15組流失，5月5日米価騰貴状報告。

「下村文書」

明治24年9月30日暴風雨，被害面積52町2反7畝13歩，10月28日濃尾大地震
「下村文書」

明治26年，洪水，被害面積50町8反7畝

「下村文書」

明治30年8月ウンカ発生大凶作，9月29日大洪水被害甚大，9月1日下伊那黒田騒動起る。「郷土年表」

明治31年4月7日米価騰貴外米買う，9月暴風雨

「郷土年表」

明治36年7月9日天竜川大増水時又水位17尺3寸

「郷土年表」

明治38年7月14日，暴風雨，8月4日俄然冷氣，10月陽氣，8月17，18日洪水，凶作

明治43年8月10日から15日まで大雨，県下各河川氾濫，特に8月13日南信一帯に集中豪雨，被害甚大，天竜川下流時又で水位1丈8尺，下平でも向河原より古町尻へ切れ込み，丸塚を一押しに一帯白河原と化す。

大正12年6月9日，22日の両度の暴風雨，飯田測候開設以来の最高雨量，天竜川増水，各地に被害甚大，下平は田沢川氾濫家屋流失，倒潰甚しく，本県より罹災救恤を受けた者3名此事天聴に達し，救恤金御下賜，又本県より慈恵救済資金が交付されたもの5名，中沢四徳川氾濫流失橋4カ所，下平丸塚水田の流失冠水甚し。7月18日鼠川大氾濫
「事務報告」「高原新聞」

大正12年9月1日，関東地方に未曾有の大地震あり，村長，助役，青年会員，軍人会員より成る救護班を編成，9月7日上京，東京，横浜における赤穂出身者を慰問，倒潰5戸，単身罹災者120名，死亡者7戸16人。

昭和13年7月，諸井頭より切れ込み150間堤防決壊，

南下平丸塚水田2町歩流失，天竜大橋袖石積決壊，新宮川の氾濫を主として其他中沢の水害は全く予想以上被害見積り355町歩の総額13万円，道路決壊4000米，用水路100米，堤防3カ所，家屋流失10戸，埋没30余戸，土砂浸入15戸等の外大小崩れ各所にある惨状

「7月8日高原日日新聞」

昭和25年6月14日より6日間連続降雨，下平地籍船渡島堤防100米決壊，流失水田13町4反6畝，丸塚10町歩浸水一部流失，天竜橋東側一部流失，天竜川増水北下平大橋上より堤防を乗越え6月13日より水田地帯に浸水，天竜大橋上流の堤防決壊し水田流失，河原地籍は3日~7日間冠水，南下平丸塚地域は下流より上流へと順次冠水約10町歩に及ぶ。

昭和26年7月3日より16日まで2週間降続き天竜川満水，丸塚の堤防120米決壊，本瀬西に向い水田1町2反流失，冠水10町歩に及び1~2週間続き水稻次々に枯死，浸水地帯復旧の見込みなく，一面河原と化す。

昭和28年は水害と凶作に明けくれた年で，6月7日の台風二号の襲来から始まり，7月17日から20日まで大豪雨，つづいて9月25日には台風13号が長野県を縦断，全壊93戸，負傷者十数名連続的な災害が繰り返され，飯田測候所の調べによれば，この年雨天は180日，その豪雨は天竜川とその水系のすべての河川を氾濫させ，堤防を破壊，田畑を流失させた。つづいて異常低温のためイモチ病発生，稲作5，6割その他農作物不作減収となる。

昭和34年8月，9月と連続2回の台風が本県に来襲。8月26日夜から27日朝にかけて，大型台風15号瞬間最大風速37米，各地に被害起り，全壊家屋352戸，半壊家屋1131戸三峰川上流戸台川の鉄砲水で，三和小学校戸台分校を押し流し，三和ダムには一時は2000石から3000石の流木が浮んだ。伊那里地区で三峰川の橋全部流失

昭和13年7月災害

6月28日から7月5日まで降り続いた豪雨は中央気象台の発表によれば63年以来の豪雨とのこと，7月4日の如きは1日の雨量90mmを示し，村内新宮川，下間川刻々増水，上割桃ヶ平上方山崩の為，土蔵，家屋の流失百々目木川沿岸田畑道路の欠壊相次ぎ，橋梁全部流失の為交通全く絶絶，災害の状況不明，7日に至り漸く山を越えて安否を知るを得た。原，下割部落の新宮川岸地籍は増水と共に新宮川堤防欠壊，山地から押流す樹木，や家財を交へた土砂の為，水田流失，埋没，人家は屋根下まで浸水，床上4，5尺土砂堆積，避難するもの40余戸直ちに村長から本県へ罹災救助方の申請書を提



新宮川岸の惨状

出した。

当時中沢村総戸数 983 戸中被害戸数 260、要救助戸数 41 戸、被害反別 156 反、救助申請費用 927 円 27 銭であった。12 日付学務部長物部薫郎から村長宛、救助申請承認あり、事件処理後 8 月 14 日社会課長宛時の村長木下一雄氏から救助の状況報告があった（要摘記）

1. 応急救護の状況

イ. 町村罹災救助資金による救護

7 月 4 日から金 100 円を支出避難民に対し焚出し開始。

ロ. 一般救護の状況

罹災者 44 戸に金 10 円宛と 39 戸に米 2 斗を給与、部落総出動応急防禦作業後土砂搬出作業に協力更に飯米 1 斗宛を重ねて配給。

ハ. 水害に依り傷痍を受けたもの及家屋

直ちに医師の治療を受けしめ、浸水家屋は村費をもって石灰を支給散布せしめ、臨時清潔法施行、予防接種実施、ワクチン利用等による伝染病予防に力めた。

ニ. 村支出外の救助

一般特志者の寄付金 1000 円を配分、県の罹災救助金をも交付、可及的早く生業につかした。

2. 今後の対策

一団地 20 余町歩の災害箇所は耕地整理組合を設立 3 反歩以上の団地は共同作業、河川沿岸の被害地はそれぞれ村の指導を施し耕地の復旧を計った。（尚この水災に 2 名の死亡者があった。）

昭和 25 年 6 月災害日録

6 月 11 日

一昨日来の降雨、朝来劇甚を極めて、9 時頃水防出動の警鐘が鳴り出す。今朝明賀の竹沢誠君がバラ入口の川を跨いで積んだ赤穂工業の木材を組の人々と外す作業中

足を滑らせ、濁流中に転落行方不明と、一同川筋探しに下って来たが、大水過て手の施しようがないという。

百々目木川の仮橋の新田冠水、家は無事なるも、兎雞小舎流失の報あり、田村滝次郎の付近山崩ありと。

新宮川岸刻々に増水、逆に新堤防を乗り越し、桐屋と次の家まで浸水。消防団土俵作製防災に大奮である。

午後 4 時頃コンクリートの天竜橋東詰の第一ピーヤ倒れ、橋面が折れて沈む。交通緒絶となる。7 時頃やや小降となる。夕方大坪橋落橋米岡浸水の報あり、原消防団新宮川岸警戒の儘徹夜、建設事務所北原技師来泊（役場）夜 10 時建設事務所長来村

6 月 12 日

助役議長土木委員長村土木委員。村内災害状況実地踏査大坪橋。上流からの流材がからみ満水の為北の橋台欠壊落橋、落橋前米岡に浸水、家財浮上一同避難とのこと、沢の田及竹林半壊流失、木下恒利竹林及県道一部地滑り発電所上田二枚冠水、発電所庭浸水堆砂、南海下県道数箇所欠壊、駒場下護岸欠壊通行不能、中山道合橋欠壊、竹の沢下道路欠壊、猿沢口道路一部欠壊、李平（明賀下田 2 枚冠水、流木堆積）落合松島裏石垣欠壊馬屋危険、木下製材所裏欠壊、小林裏石垣欠壊、上の田 2 枚冠水堤防欠壊、下曾倉奈良屋橋流失、入口上 3 村道路崩落、穴山竜東線各所崩落

6 月 13 日

朝雨劇甚、午前中小止みなし。夕方又雨、下平、北原両技師災害地撮影出動、救助法の件米沢氏来庁午後 4 時耕地課長一行新宮川岸視察、副知事、地方事務所長、天竜橋上より現況視察、吉川代議士、湯沢県議視察に来村。

6 月 14 日 雨、雨量多く天竜又氾濫

前 9 時急施村会、午後区長会。天竜氾濫増水、消防団出動、マンホール遂に倒落、橋台危険、上流へ聖牛 2 頭を組み立て激流と闘い乍ら流し入れ漸く橋台を守る。

6 月 15 日 久しぶりの晴天

消防団総出動、聖牛 17 を組み本流の水を追い午後 4 時頃まで作業続行、連中の奮闘感謝の辞なし。

午前中衛生部長会（水災に対する臨時衛生の件）

天竜大橋に仮橋架設、漸く赤穂への通行可能となる。

午後 2 時災害対策委員会。地方事務所、町村会より見舞。

6 月 16 日 晴

竹沢君労災保険手続打合せ。天竜橋東橋台後ろより本流々入、堤防破壊、仮橋落橋、午後 4 時県工務課松田氏来村、北原技師同道、落合、穴山、大橋等詳細に巡視夜 9 時に至る。

6 月 17 日

竹沢誠君死体、横吹堰第 1 牛にかかり居り、李平組捜索班により発見、駐在所に急報、野村医師、助役立合検

死埋葬手続を了し、組員遺骸を家に送り消毒班、厚生班立合納棺、村より金 1000 円見舞。

穴山崩壊土掻出し作業、村工夫及地元民、助役、寺平、菅沼昌委員大坪橋より本分校まで道路橋梁被害実況調査。

6月18日

柴崎技官、耕地課長一行新宮川岸視察。

赤穂村委員 5 名来村、天竜橋仮橋工事陳情の件打合せ。

6月19日

助役、菅沼昌、牛丸、小沢、伊那建設事務所へ陳情。

測量班（下平、北原、小島、北原牧）今後の方針打合せ。

6月21日

製図隊伊那町あいやの一室を借り作業着手大草伊那線崩落土掻出作業につき委員地元民打合会。

上割区長土木委員会南海棧橋につき地元交渉。

災害見積 1 億円。

信越電通局次長、岡谷支局長、電話線保護協力の礼に来村。

6月23日

土木関係者 6 名、棧橋架設下調（南海）中山竹の沢道路、猿沢、矢代橋、又七垣外視察後、大津渡流失田（竹村茂十氏有）視察、対策打合せ会。

6月24日

寺平委員、吉瀬、菅沼両区長立会、吉瀬除手入打合せ、常設土木委員会召集、災害対策委員会と協力方依頼。

6月26日 伊那測量隊帰村

下平委員 6 名来村工事合同施行（25 万宛）打合せ。

伊那村赤穂本社連 6 名来村棧橋架設に協力決定（8 万寄付）

耕地課馬場氏、吉瀬及樋泉井視察に来村。

6月27日

菅沼、吉瀬、下割、原 4 区代表 12 名来庁、天竜水電、日発ダム反対陳情打合せ会、代表選任。

午後 2 時村内土建業者 5 名召集災害復旧協力方要請、

午後 3 時、上割中山大曾倉 3 区長の参集を求め棧橋架設に協力方依頼。

6月28日

午後 3 時頃中曾倉五十川宅地滑り危険の報あり、矢沢、須沢巡査急行視察。

6月29日

建設省篠技官、県、海沼技官、松本技官一行来村、天竜大橋、大坪橋、上割 2 号、発電所、落合入口まで視察。

6月30日

上割区長、木下恒利、田村芳雄、木下善一 4 氏来庁、上割地籍トラック道、棧橋架設を区へ 10 万にて委托する。

宮下元一、塩沢両名峠の崩落土掻出完了、1000 円支給。

午後 2 時菅沼下割原 3 区委員伊那村委員合同打合せ会、清水川放線を無条件耕地課へ一任のこととなる。

7月1日

耕地課長、高木昞四氏馬場氏来村、三区代表伊那村代表合同会、清水川踏査陳情、放線を直線に測量するよう指示あり、中割新井視察、上割棧橋材料代 1 万追加決定。

7月8日

災害対策委員会中間報告。

庁中総動員耕地課関係災害補助申請書 13 通作製提出。

7月17日

災害対策委員会解散、今後を常設土木委員会に一切移すこととなる。

昭和 25 年 水 災

| 名 称 | | 員 数 | 損 害 価 格 | |
|------------|-------|------------|-------------|------------|
| 建 物 | 住 家 | 流 亡 | — | |
| | | 破 損 | 8 戸 | 160,000 円 |
| | | 床上浸水 | 13 戸 | 65,000 |
| | 非 住 家 | 床下浸水 | 20 戸 | 40,000 |
| | | 流 亡 | 1 戸 | 20,000 |
| 土 地 | 田 畑 | 破 損 | 2 戸 | 40,000 |
| | | 流 亡 | 13 町歩 | 4,050,000 |
| | 山林原野 | 浸 水 | 19 町歩 | 2,195,000 |
| | | 流 亡 | 10 町 9 反 | 17,000,000 |
| | | 堤 防 欠 壊 | 11 カ所 | 17,300,000 |
| その他治水工作物堰堤 | 2260m | 22,600,000 | | |
| 道 路 欠 壊 | 50 カ所 | 35,870,000 | | |
| 橋 梁 流 亡 | 10 カ所 | 6,378,000 | | |
| 損 害 合 計 | 流 亡 | | 100,618,000 | |
| | 破 損 | | 2,800,000 | |
| | 浸 水 | | 2,300,000 | |

死亡 1（竹沢） 負傷者 4 名

◎復旧工事

○橋梁大坪橋

木桁土橋復旧長 30m 有効幅員 3.60m

(26. 3. 31 竣工)

桁 五通、橋脚 2 基 請負 758,000 木下善一

増工 袖石積 259,000 道路復旧 65,000

(26. 8. 31 竣工)

○坪の内地区橋梁復旧

橋長 6m 幅員 3m 橋台 2 基 請負 200,000

宮下 勇 (竣工 26. 3. 31)

- 樋泉井堰復旧工事
導流堤 23m 水路 52m 護岸 43m 法留石積 10m
請負 380,000 北原桑太郎 (26. 3. 31 竣工)
- 河原地区井筋
延長 190m (受益面積 10 町歩) 請負 600,000
所河昌太郎 (27.6.10 竣工)
- 下割 2 号農道復旧工事
延長 110 間 請負 698,500 所河昌太郎
(26. 9. 21 竣工)
- 河原関係 排水路復旧工事
延長 224m (受益面積 300 反) 請負 470,000
滝沢 義彦 (26. 3. 31 竣工)

昭和 34 年 8 月 7 号颱風災害

8 月 13 日, 14 日 7 号颱風通過, 市内中沢地区百々目木川氾濫災害甚大, 伊藤信明家屋に裏山より崩壊の土砂奔入。土砂搬出に消防出動, 奥の橋, 大角橋, 板橋流失, 5 箇供有伐木 3 車流失, 瀬傍石垣下まで欠壊, 板橋宮下儀市宅浸水, 畜舎流失, 水田冠水, 百々目木上の水田冠水, 桜渡万屋上の田冠水の被害あり。

百々目木流域被災状況

(34. 8. 15 現在)

| 種 別 | 被害面積 | 被害額 | 摘 要 |
|---------|-------|--------|----------------------------|
| | 反 | 千円 | |
| 耕地流失 | 7.5 | 1,500 | 反当 200 |
| 水 稲 | 16.0 | 5,370 | 反当 3.35石@10 |
| 蔬菜桑等 | 6.0 | 120 | 反当 20 |
| 頭 首 工 | 990.0 | 2,120 | 頭首工災害 4 カ所 |
| (1)樋泉井 | 500.0 | 800 | 災害復旧工事概算による |
| (2)樋ヶ下井 | 400.0 | 396 | " |
| (3)引ノ田井 | 50.0 | 660 | " |
| (4)大角井 | 40.0 | 264 | " |
| 橋梁(農道) | 1 カ所 | 984 | " |
| 耕地災害 | 2.1 | 420 | 災害復旧工事非該 当地区災害反当20 万 |
| 合 計 | | 10,514 | |

土木関係被害総括表

(34. 8. 18)

| 種別 | 延長 | 個所数 | 概 算 事業費 | 備 考 |
|-----|-------|-----|------------|------------------------|
| | m | | 千円 | |
| 県 道 | 443 | 14 | 11,160 | 南向赤穂線 |
| 河 川 | 1,586 | 19 | 29,820 | 百々目木川 |
| 市 道 | | 3 | 2,510 | |
| 砂 防 | | 2 | 9,150 | |
| 林 道 | 313 | 14 | 3,840 | 大松尾山 5 カ所 中田切山 9 カ所 |

| | | | | |
|-----|-------|----|--------|--------------------------|
| 治 山 | 9.5ha | 65 | 35,000 | 大松尾山 7 ha 中田切山 2.5 ha |
| 計 | | | 41,480 | |

昭昭 34 年 9 月 11 日災害対策特別委員及日赤奉仕団駒カ根支部合同会を開き義損金 17 万 1704 円と衣料品 1422 点配分につき打合せ金 5 万円と衣料品を県に送付のこと, 12 万 1704 円を市内罹災者 37 名に配分贈呈のこと決定それぞれ贈呈を了した。

昭和 34 年 10 月 7 日

15 号颱風災害

被 害 総 括 表

(34. 10. 1 現在)

| 区 分 | 面積及個所 | 被害額 | 摘 要 |
|-------|--------|--------------|---------|
| 農作物災害 | 7,361反 | 千円 12,116 | |
| 耕地災害 | 10m | 30 | 中沢下井水路 |
| 林道災害 | 20m | 200 | 林道中田切川線 |
| 治山災害 | 2 カ所 | 3,500 | 中田切山 |
| 家屋災害 | 28 件 | 1,471 | |
| 計 | | 17,317 | |

罹災者に対し市内義損金品募集を行い(1戸 20 円以上) 居宅土蔵等被災状況に応じてそれぞれ見舞を贈呈した。

昔 の 大 火

元禄 3. 12. 6, 上穂町五十鈴町より山口小路辺まで。赤須町現市役所前から古田切川まで両町過半数焼失。

享和 2. 4. 26, 夜八時赤須町中町より出火, 南は寺大門より, 北は上穂赤須両町, 両側不残焼け, 坂の北屋興市右衛門宅まで延焼, 但寺大門前の地藏堂は残る。

享和 3. 1. 26, 光前寺本堂, 阿弥陀堂, 三重塔など全焼。 「竜泉寺文書」

文化 6. 3. 1, 上穂町百姓源左衛門居宅より出火, 同人焼死, 紺屋平三より北, 南赤須町上穂両町両側不残焼失, 土蔵 23 カ所袖蔵は数不知, 赤須町惣家数 83 軒の内 78 軒焼失, 上穂町不明, 居宅は不及申衣類諸道具, 夫食等に至るまで不残焼失, 文化 6 年 4 月赤須町全焼に付(前手) 夫食米並に小屋掛金拝借を出願。「赤須町文書」

文化 8. 1. 2, 夜九ツ時上穂町宿免片端町より出火, 12 軒類焼, 馬 1 疋焼死。 「赤須町文書」

天保 9. 3. 17, 上穂町仲町より出火, 中町北町全部焼尽, 上穂町 45 軒, 赤須町 44 軒類焼。「赤須町文書」

天保 9. 4. 18, 上穂町宿免より出火, 上穂町 4 軒, 赤須町 6 軒類焼。 「赤須町文書」

天保 14. 11. 12, 上穂町名田屋店借藤三郎方より出火, 上穂町 9 軒, 赤須町 10 軒類焼。

天保 15. 1, 上穂町赤須町協同火消道具を新調申定
弘化 2, 2, 両町協同火消道具新調, 1, 2, 3, 駒 5 と 5 組の火消組を組織。

弘化 2, 3, 17, 赤須南町石屋儀兵衛方(現市役所前)より出火, 上穂町 21 軒, 赤須町 34 軒類焼, 同年 6 月右火災に付小屋掛料として金 51 兩拝借。「赤須町文書」

弘化 3. 6. 18, 光前寺本堂全焼。「大沼日記」

弘化 3. 8, 安楽寺大門脇へ火の見櫓を建つ。

文久 1. 4. 17, 上穂町北屋和吉方生石灰に雨もり夜雨中出火, 4 軒類焼, 当日秋葉講宿にて消止, この時から秋葉講が盛大になった。「赤須町文書」

文久 3. 6. 20, 上穂町坂頭馬小屋より出火, 町屋 13 軒を類焼。

明治以後の大火

明治 16. 3. 15, 赤須町宿免松崎峰吉方納屋の取灰より出火, 焼失, 21 世帯, 43 棟, 現市役所南から宿免まで, 「宿免の大火」

明治 23. 3. 28, 中沢菅沼, 菅沼勘十郎方より, 焼失 31 世帯, 被災 40 棟, 160 人。「菅沼の大火」

明治 36. 3. 8, 中沢菅沼, 小牧金弥方より, 焼失 20 世帯, 23 棟, 130 人。「菅沼の大火」

大正 11. 1. 13, 玉屋町白鳥栄重方より, 焼失 5 世帯。「玉屋町の火事」

大正 15. 2. 5, 中沢中割天竜社製糸工場, 焼失, 工場, 事務室, 病室など全焼。「天竜社の火事」

昭和 7. 4. 19, 中沢上割落合, 島伊八方より, 焼失 6 世帯, 16 棟。「落合の火事」

昭和 12. 4. 2, 赤須町 3 区玉屋町カフェー・ユニオン, 山村さかえ方料理場より, 焼失 66 世帯, 72 棟, 被災者 302 人, 死亡 2 人, 負傷 38 人。「玉屋町の大火」



玉屋町の大火 (気賀沢文男氏提供)

昭和 16. 3. 27, 昭和病院, 狂人の放火, 焼失事務室, 内科, 外科の病棟等 5 棟, わずかに食堂, 看護婦寄宿舍

を残すのみ。「昭和病院の火事」

昭和 21. 10. 25, 赤須町 4 区竜水社赤穂工場 食堂より出火, 焼失事務室, 会議室, 寄宿舍, 揚杵場全焼, 製糸部乾燥場は消し止む。「竜水社赤穂工場の火事」

昭和 24. 3. 20, 赤穂石川町製材工場協栄木材搾油機関室より出火, 焼失 10 世帯, 60 人。

「協栄木材の火事」

昭和 24. 4. 15, 下平店通り南側より出火, 焼失 19 世帯, 55 棟, 95 人。「下平の大火」

昭和 25. 6. 7, 赤須町琴平町赤穂工業株式会社製材工場, 焼失 6 世帯, 8 棟, 44 人。「赤穂工業の火事」

昭和 27. 12. 19, 赤穂石川町協栄木材工業 K, K ストープの飛火, 焼損, 類災 8 棟, 6 世帯。

「協栄木材の火事」(駒ヶ根消防署調査書より)

昭和 29. 3. 7, 駅前山二遠藤商店より, 焼失 23 世帯, 26 棟, 100 人。「駒ヶ根駅前大火」

昭和 31. 8. 14, 赤穂福岡大力木材 K, K 赤穂工場焼失, 工場など 5 棟その他木材。「大力木材の火事」

赤穂騒擾事件

長野電燈会社社長(花岡次郎氏)は県下各地の水利権を買収, 発電所設置を計画, 赤穂村及び伊那町を供給地域の中心として, 羽翼を拡げんと計画のもとにその準備を進めつつあった折柄, 伊那町の重盛二三四氏等の諸氏により電燈経営並に発電所設置の出願があったので長野電灯会社はまずその先願権を得て, 更に宮田村, 赤穂村も編入して許可を受くべく追出願をした。これを伝え聞いた当時の赤穂村長福沢岩夫氏は, これに刺戟され, 赤穂村は単独にて出願, 村民自からの手によって経営するの得策を思い, 有力者 2, 3 と協議を重ね 44 年 7 月 20 日に赤穂村を供給区域として, 電燈事業経営の出願を本県知事を経て, 通信大臣に提出した。一方重盛氏は 6 月 27 日に, 一切の権利を長野電燈会社に譲り渡してしまったのである。斯くて同年 9 月 30 日付をもって, 伊那町及び赤穂村を供給区域とする電燈事業経営は長野電燈会社に認可され同日付をもって福沢岩夫, 生田大助諸氏の出願は不許可の指令と共に一切の関係書類は返戻された。

不許可の指令に接した福沢, 生田の諸氏は, これに対して今後の方針を協議研究した結果, 長野電燈会社に交付された許可指令の内容に「国または供給区域を管轄する公共団体において, 電気事業の全部または一部を買収せんとする時は会社はこれを拒むことを得ず」との一項にヒントを得, 村自治体自身が経営したならばとの考案のもとにいろいろと施策を練った。電燈村営問題は結果的には余り好ましからざる終末を告げたが, その発端は実に茲に基因するものであることを知り, 先人の識見と郷土を思うの真情に対し感謝と敬意を表する意味あいに

において、直接関連はないが災害誌の末尾に加えることにした。

この電燈村営問題は村民大会にまで進展，その間赤穂駅の位置問題までも関連性をもつに至り，問題は一層複雑激化し，遂に暴動化し騒擾事件にまで発展した。嵐のあとの静けさは，物凄いまでに寂しく凄惨を極めた。

検挙につぐ「検挙」「拷問」「重罪犯」村民の恐怖をそそる流言はそれからそれへと流れ，9月28日村長福沢岩夫氏検事局へ召喚，即日予審へ回付令状執行取監されるに至った。この事件に関連して予審終決までに取調べを受けた者は聴取書にあらわれたものだけでも，被害者

24名，証人並に参考人132名総人員202名に上り，取調回数424の多きに及んだ。大正4年3月4日東京控訴院において，次の如く第2審の判決が下った。控訴棄却8名，懲役9年1名，7年1，5年4，3年6，2年1，1年1，8カ月7，10カ月1，4カ月1，8カ月（3年間執行猶予）1，罰金50円2，30円1，20円5，無罪4，直ちに上告，同年11月6日大審院判決下る。3名に対し原判決を破毀して名古屋控訴院に差戻，その他の被告の上告はこれを棄却す。斯くて名古屋控訴院に移された3名は1回の公判を開いたまま控訴を取り下げ服罪するに至り，この事件は一先ず終結を告げた。

第Ⅱ編 36.6 梅雨前線豪雨災害

1. 概 況

昭和36年6月の梅雨前線豪雨災害の発生前の気象状況は、温暖好晴で陽気もすすみ、農作物の生長も良好で、6月に入っても雨はすくなく、一部には水不足の声もきかれ、早々に麦刈りや田植もすんで豊作の年と予想されるくらい好天候であった。

下旬に入ってから、北太平洋の高気圧が次第に強まり、今まで影をひそめていた梅雨前線が、にわかに活動的となり、24日夕方より本州南岸ぞいにまで北上し、中部地方一带はひきつづき曇り時々雨が降るようになったため、早天の慈雨としてよろこばれた。

25日は梅雨前線がまた北上し、熱帯性低気圧などの影響を受けて活潑となり、西日本に豪雨が降りつづいて集中豪雨は次第に東へ移動して大雨を降らせ、300～500mmに達し局地的被害が出はじめた。

しかし伊那谷では30mm前後で、強雨が東に移動しているという感じはほとんどなかった。

26日、四国南東海上の熱帯性低気圧は発達して台風第6号となって北上、梅雨前線は押しあげられて中部地方南部を東西に長くのび、台風の刺戟によって活潑となり、南の湿った風はますます強く、雨は一段とはげしく、近畿、東海地方では大雨、洪水警報が発令され、伊那谷も早々から降り出した雨が次第に本降りとなり、正午までに40mmに達し、夕方には小降りとなったが気象上から今後の降雨が予想され、17時45分に大雨注意報が発令された。

27日は朝から伊那谷は梅雨前線の直下におかれ、台風第6号くずれの熱帯性低気圧の接近にもない前線の活動は活潑化し、17時20分には県南部と西部に大雨洪水注意報が発せられ、1時間40mmに達する豪雨のため、中沢地区の河川をはじめとして天竜水系は氾濫し、駒ヶ根市においても消防団員が出動して防水につとめ、学校の児童を早退させるなど事態は容易ならざるものとなった。

そのため28日には災害対策委員会、市議会全員協議会の開催、災害対策本部の設置、情報の収集をはかるとともに災害救助法の発動、自衛隊員の派遣要請をおこなった。

県は直ちに18時50分災害救助法を発動、21時には

西沢知事、相沢企業局長一行が来市、6月30日には自衛隊高田部隊（普通科）340名が災害地に出動して救済と復旧に当るなど〔災害日録〕に示す大災害となった。

この災害は、正徳5年6月18日（1715年6月18日）の梅雨前線による大洪水以来約250年、世に伝えられる未満水をしのぐもので、駒ヶ根市の被害は、河川の氾濫、山津波の頻発によって、死者3名、行方不明2名、罹災人員558人、119世帯に及ぶ人的被害をはじめとして、堤防決壊、道路橋梁の流失、農作物の冠水、耕地、農地の流失損壊、林道、林地の崩壊など総額30億9千896万円に達し、隣接の中川村をはじめ上伊那地区の被害額は71億7千323万円、大鹿村など下伊那地区の被害額は、192億6千442万円、あわせて伊那谷の被害は264億3千765万円に達し、史上最大といわれる災害となったため、国、県をはじめ関係方面、自衛隊、民間団体などの協力を得て人命救助に全力を注ぎ、交通遮断のため孤立状態になった奥地の部落への連絡、救援物資の補給運搬、道路、橋梁の復旧、負傷者の救出にヘリコプターの協力を得るなど、被害を最小限度にくい止めることに努力した。

以来各方面よりの暖かい援助と、国、県はじめ自衛隊を中心とした災害復旧と救済活動、罹災者の力強い復興への意欲と建設業者の日夜を分たぬ努力が結集されて、移住も完了し、36年植付け直後に流失した田にも廃工を除いて37年、38年と逐次植付けが行なわれ、本年度は復興田のすべてが青々とした田となり、3年の歳月を経て、道路、橋梁も整備され生れかわった新天地が拓かれここに復興成ったのである。



復興田とヘリコプターによる薬剤撒布（昭38）

昭和36年6月梅雨前線豪雨被害

駒ヶ根市総括表

(単位千円)

| 区 分 | 数 量 | 被 害 金 額 | |
|-------------|--------|-----------|--------|
| 人的被害 | 死 亡 | 3人 | — |
| | 行方不明 | 2人 | — |
| 罹 災 者 | 世 帯 | 119世帯 | — |
| | 人 員 | 558人 | — |
| 公 共 土 木 被 害 | — | 2,823,360 | |
| 農耕地被害 | 耕地災害 | — | 90,430 |
| | 農作物 | 1,264反 | 30,470 |
| | その他 | — | 50,533 |
| 家 屋 被 害 | 5,381坪 | 86,980 | |
| 宅 地 被 災 | 3,067坪 | 3,068 | |
| 水 道 被 害 | 2カ所 | 13,328 | |
| そ の 他 被 害 | — | 790 | |
| 計 | — | 3,098,959 | |

被害状況内訳

1. 人的家屋被害状況

死者 3, 行方不明 2, 重傷 1, 軽傷 3
 罹災総数 世帯数 119, 人員 558
 家屋被害 全壊 世帯数 34, 人員 152
 流失 世帯数 31, 人員 132
 半壊 世帯数 35, 人員 192

2. 災害日録

昭和36年6月26日(月)7時頃から激しい降雨となる。終日小止みなく降り続けた。飯田地方では正午までに40mm近い量に達したと報ぜられた。全国的な雨で、夕方は大雨注意報が発せられ、四国中国地方、人死に、土砂崩れ、浸水家屋続出、とのラジオニュースであり、大分増水して来た。

27日(火)朝からの豪雨である。梅雨前線とジェット気流の合作らしい。7時ころから1時間量10mm前後で雨勢はますます強くなり、13時には1時間量36、同13時10分頃には同じく40mmというすさまじい降り方で、消防団出動の有線放送で頻々として、各所の増水、危険防止の状態を伝えて来る。午後1時頃中割の町

浸水家屋 床上浸水世帯数 4, 人員 15

床下浸水世帯数 15, 人員 67

家屋被害総額 86,980

2. 公共土木被害状況

| 区 分 | 箇所数 | 金額 |
|---------|-----|-----------|
| 国道 | 7 | 500 |
| 県道 | 43 | 387,200 |
| 市道 | 22 | 46,500 |
| 河川 | 72 | 1,047,460 |
| 橋梁 | 23 | 56,900 |
| 林道 | 22 | 31,800 |
| 治山治水 ha | 206 | 1,180,000 |
| 被害総額 | | 2,823,360 |

3. 耕地被害状況

| 区 分 | 箇所数 | 金額 |
|--------|-----|---------|
| 耕地被害 | | 90,430 |
| 農業施設 | | |
| 頭首工 | 17 | 12,430 |
| 橋 梁 | 2 | 850 |
| 農 道 | 6 | 1,660 |
| 溜池水路 | 33 | 29,910 |
| 農作物 | | |
| 水 稻 | | 21,819 |
| 桑 | | 1,530 |
| その他 | | 7,071 |
| 家 畜 | | 1,703 |
| その他 | | 220 |
| 耕地被害総額 | | 167,683 |

通りへ行って見ると街道が河となり、各家の縁の下へ流れ込む。小溝も井筋も満水ではき切れない。小学校のパン工場は縁の下から溢水して土間で波打っている。各戸総出で防水に大奮という騒ぎである。2時頃大坪の坂本へ行く。百々目木川が大増水して、物凄い勢で前のやせ山の岩壁へ打ちつけている。家人総出で心配しているが、末だ庭から5、60糎も低いし、中頃に柿の大木もあるから大丈夫だろうと、言い残して坂を上る。大坪の竹藪の下の田は25年の災害の時半分ばかり流失した儘、護岸工事も施さずにあるので、今度の出水では又欠壊するかも知れぬが手の施しようもない。

午後3時頃新宮川岸の滝沢二三男君付近の河川が氾濫して沢尻線が不通となり、赤穂方面から帰る高校生や、一般の人々は東伊那に迂回せざるを得ない状態となった。此状態を知らずに天竜大橋にかかった一部の人々は

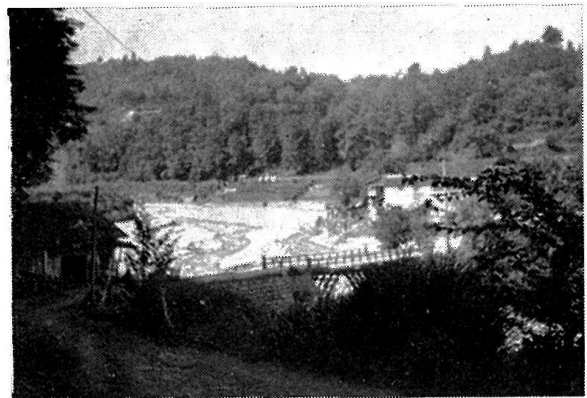
消防団員の肩によって水中を漸く渡ったような有様だった。正午頃からの集中豪雨は、大增水の予感で、各校共学生生徒を早退させたのは機に応じた措置であった。

午後4時頃から、下割の阪本、大上、本曾倉の奈良屋等各住宅が危険だとの有線の報道があり、続いて新宮川橋付近の状況も最悪の事態となりそうなので、大至急防水応援を求めるとの声が有線により村内に伝えられた。松木平付近の入口、下浜、各住宅も危険が刻々に迫る。新宮川流域全線に亘っての防水に、消防団員が主となり一般の人々が全力を尽して努力したが、大濁流は施す術もなく、夕刻6時頃、奈良屋に土砂流入と同時に坂本の住宅土蔵とも、大上の住宅何れも流失の惨状を呈し、亀田の宅地も防災を必要とする状態となり、近所の人々により家財の搬出が決行せられた。午後8時頃から、新宮川岸、大丸屋付近一帯の家屋数戸に堤防を乗り越した泥水の流入が始まったので、いよいよ新宮川橋を破壊する事となった。老朽した橋でもいざ破壊となると仲々容易でない。そこでブルドーザを動員して橋台を除去し、新宮川堤防の決潰を僅かに喰い止めたが濁流は益々猛威を逞しくし、遂に中島屋下から堤防を乗り越え、本春竣工したばかりの喜びの土地改良区は全域無惨な状態となってしまい、(表紙写真参照)原、下割の新宮川岸地帯30余戸の老若男女は一斉に避難を開始したとの事、夜に入ると各地区の被害で電気が消えてしまい、各戸ローソクを立て暗い気持で夕食をとる。戸外の恐ろしい雨音、まるでバケツの水を打ちまけるような凄い勢だ。其中に下の河中では石と石とが打ち当たって流れるゴロゴロゴッと言う音が益々高まって来て不安はつのるばかり、皆一睡もせず夜を徹した。

28日(水)暁暗隣家の消防員から、今朝方大坪の坂本へ落合川と百々目木川の両川が流れ込み全員命からがら上の家へ避難したとの報がある。

雨仕度に身を固め発電所へ行く。屋舎はペシャンコとなり、(口絵写真参照)電柱が根こぎとなって電線にぶら下り、濁流にブカンプカンと揺れ動いている。近所の人々2、3人が集まって来て、昨夜10時頃小沢組の人達10人ばかりが応援に見えたので焚き出しをしてやったが、今朝来て見ると誰1人いる形勢が無く、屋舎は見る影もない有様だ。真さかとは思うがと皆その安否を気遣う。ごうごうという水音で呼んでも聞こえない。此処から上は両谷間に漲る濁流で道路も何も区別がつかず、南海方面へは上の山へ上らねば連絡がつかない。普だんは発電所の下から屈曲し大廻りをして西側の高い大田をまん中から突つ切って一反歩ばかりの田の形も見えず、広い河原を濁流が狂奔して流れ下る。兩岸に茂っていた胡桃の木はみんな影も形もない。栗沢線の上の方は全部欠壊しているらしい此処から引き返して桜渡橋へ行

く。百々目木川の氾濫で、今々落ちる寸前であり、消防員が懸命に防いでいる。万屋の裏通りの上田、7.8反歩が全部本流の渦中に巻き込まれて見るも無惨な貌である。橋下を見ると3米もあった石垣を乗り越えて、1反



桜 渡 橋

歩余の上田に埋高く土砂と材木を積み上げ、その余勢で坂本の家半分を埋め、締めた倉庫の戸を押し倒して、土砂が侵入、おまけに北方から落合川が氾濫して来て、田3枚を埋没し終って、更に厩と便所へ打つけて柱を折り、両川の挟撃で家が傾いているという惨状、川向うの竹村君の家は田と共に影も形もない。両家の避難所を見舞ってから大坪橋へ行く。東伊那へ行く上井が欠壊して、藤門沢を流れ下り、右岸の宮田へ通ずる三村道路を突き切り、落合川との挟撃で北岸の橋台を洗い去り、橋



大 坪 橋 (道平橋)

は真ん中から千切り取られ、昭和25年災害の時出来た向ふ岸の高い護岸も、その陰にあった米岡(人家)も何処へ行ってしまったか、全部が広い河原となっている。昨夕心配して見た竹藪の下の田はすっかり本流の底になって、然も上り道のあった桑畑まで崩れ去り、街道の道肩へ25災のおくれに造ったコンクリート壁の真下まで30m位の断崖になっている。その東方に並んでいた田圃3枚も泥流の底に沈んでいる。(前夜の豪雨を郡誌558~560)はこう伝えている。「15時には早くも200mmに達し、夕方、17時20分伊那谷に大雨洪水警報が出され、大被害に具え嚴重な警戒が必要になってきた。18時には250mmに及び大被害発生の気象状態になった。19

時～21時は稍小降りとなったが、その後も時々強雨を交へ24時には340mmにも達し量は増える一方であった。28日午前2時頃雷が発生これに伴って時々強雨となり、1時間量25～30mmと再び大雨の兆が現われ4時頃には遂に400mmに達したが此頃から小降りとなって来た。(27日9時から28日9時までの日降水量は325mmで明治31年飯田測候所開所以来最大日降水量の大記録となったと記載されている。)

朝食後危険に瀕している桜渡橋を或は夕方は帰宅出来ぬかも知れぬと言い居いて中沢支所へ下る。

雨は幸に止んだようだが水は中々引けない。支所に集った情報は、新宮川岸28戸全部浸水埋没、下割流失3戸本曾1、中曾1、中割1。夜来上割は両谷共有線杜絶状報不明、橋梁桜渡橋以外は全部流失、護岸道路大半欠壊、落合数戸流失の模様との事、惨害は夥たしいので市は午後1時急遽災害対策委員会を召集した。赤穂東伊那は被害割合に少なきも中沢の山地の状況全然不明、朝から人を派して調査中。災害救助法の発動は町村25戸以上、市は50戸以上の全壊家屋に適用との事、取りあえず全員現地を視察することとなり、市の車に分乗、大久保橋を渡り東伊那の一軒の倒壊家屋を見舞い、新宮川岸に下りると、松木平橋以下新宮田圃の上田数町歩全部川原となり、部落の家屋20余戸全部土砂に埋められ、二階が砂上に浮んでいる。最近多額の資金を投じて完了した粟沢線南部の耕地整理全域2米余の土砂堆積。今新宮川の濁流が更に部落に浸入せぬよう、中島屋上へ消防員が聖牛を入れ、懸命に石置作業をして守っている。委員全員その惨状に先づ眼を覆った。更に自動車で中割大津度付近の欠壊浸水状況に驚き、桜戸橋に下車。百々目木川、落合川合流地付近の意外な惨害に驚き、更に発電所全壊の状況と落合川氾濫の猛威に魂を奪われ、一同黙黙として支所に集合。中沢、特に上割地区16軒に亘る谷々は有線も電灯線も寸断され、県道、護岸殆んど流失、全域の橋梁は唯桜渡橋が辛うじて通ずるのみで、奥地の被害全貌が入手出来ないが今朝から20余名の人々が両谷へ分れて調査に向っているので皆その報告を待つ。同じ部落でも河をまたいでいる処は橋が流れて連絡がとれず、谷一杯の水で話もきけない。他の部落の方から大廻りして、山を越えたり新たに出来たナギを渡ったり、小沢の増水に木を渡したり、渡渉したりしての調査なので抄取らないわけだ。漸く百々目木川方面は引の田まで、落合川方面は李平までの大体の調査をして夕方支所へ集合した。又中沢農協の男職員が二越峠を越へ大曾倉へ(4軒)更に中山を下り、山道は大日向へ、途中2箇所山崩れをふみ越え、バラ部落につき、丸山(人家)が流失したが人畜には幸被害がなかった事を入手、更に横手をよじ上り、小谷川を渡渉して漸く、上割最奥の大

洞部落に辿り着き、中島(双山家)一家7人中5人の犠牲者の出た悲報を聴取往復6時間を費して夕方帰着したとの事に此人達にも来て貰い、更に桃平方面に苦辛して1日ばかりで見舞に行ったという親戚の人にも参加して頂き、支所で臨時災害対策委員会を続開。上割全部の状況の取りまとめをした。その結果によると、流失30、全壊33、半壊31、床上浸水4という事になったので、直ちに県に災害救助法の発動を要請することに決定。尚双山家に対しては、明日晴雨に不拘、消防団の捜索隊の出動を乞うこと。救援物資、懐中電灯等を明朝急速に配布する等を地元対策委員支所々員一同にて手配すること、市役所から支所へ増員して手落のないよう活動する事等を申合せて解散した。席上ラジオ速報で中川村四徳72戸中57戸流失、死者7、行方不明10名、大鹿も大氾濫36戸埋没、死者27、傷者50との情報で、中川は逸早く救助法が適用されたことも伝えた。

夕方又小雨が降り出す。中沢の小委員会を終ったのは8時、雨中を桜渡橋まで来ると、西側橋台の袂に大穴があき板をかけ並べて注意して通行させており橋の西と東の兩岸に消防団員が出動、太縄を張り渡し警戒を厳重にしている。此橋が若し流失の厄に過へば、上割方面は孤立してって数10の罹災者の救援の道は殆ど断たれて了うので、是非これだけは何としても助けたいが、と徹夜で監視を続けているが手の施しようがない。

同夜6時災害救助法適用の発令があり、午後9時西沢知事、相沢企業局長一行5名が市役所に来訪。被災状況を聴取された由であり、市長から自衛隊特派について知事に懇請したとの事である。



西沢知事に状況を説明する市長

29日幸に雨は稍小降となり、水勢も大分劣へかけたかに見えたので、消防団員及び付近の人々で、左岸橋台の上方に聖牛を入れ、大穴の増大を防ぎ、更に対岸の松岡の上にも又聖牛1基を入れ、河の中央を水が通過するよう作業を始めた。一同泥まるけ水浸しになっての活動で辛うじて唯一の橋の流失は免れるらしい、有難い事だ。

昨日の情報で百々目木の保護家庭と他1軒が流失して

消息不明との事に訪問に出掛ける。中割の矢代から秋葉蔓根に登攀、ここから山道の横手を伝うと、中途に3ヶ所ばかり、大ナギが出来、大木が根こぎになって倒れている。泥をよけ、岸の草木にすがって、漸く南分校、給食婦の家に辿り着く。小学校の校長先生が、今早暁から出動、此山の尾根から樹木の間を分けて下り、これから分校の奥さんや子供さん達を一時生家の方へ避難させる手配で、部下3人の先生方を先行させてあるとの事、大いに感心しながら、暫く休んで主婦から状況を聞く、下の川端にあった宮下儀市さんの家は家倉共に昨夜流失して、老夫婦は分校の体操場に避難している由、此家は34年8月14日の台風7号で、田畑を流し、畜舎便所も流失、住宅も危険に瀕したのだったが、災害復旧工事の施行で上下に人々の驚く程の頑丈な堤防が出来、分校の児童通学の為の立派な橋も完成し、昨年は2枚の田も漸く復旧、今年は今1枚出来るという段階で、又々堤防も、橋も兩岸の田も畑も悉く一瞬に吹飛ばしてしまい、命からがら退避したわけだ。通路も欠壊して通れぬので、上の藪を掻きわけて分校に辿り着き、昨日来の詳細を聞く、此前の苦い経験もあるので、家財から重要書類、食糧現金に至るまで全部上の蔵に運び込んでしまうと、物凄い泥流が、堤防を欠壊、忽ち居室を打ち倒し、アッと言う間に倉庫まで一物も余さず流し去ってしまい、全く着のみ着のまま逃げ上ったとの事、慰めの言葉もない、気を落さぬよう、身体に一層気をつけて立ち上ってくれるよう力づける。

更に保護家庭の老夫婦の行方を聞く。昨夕福祉事務所の主事が取りあへず対岸まで来たが、家が流失して見えず、近所の人々に聞いたが消息不明、事故があったのではないかと言われた由話すと、之も川には相当遠い高さでありどんなに荒れても流れるなどとは予想しなかったが、上からの道の水が溢れて来、家へ泥が這入るので、夫婦して、少し上にある他人の作小屋へ僅かの家財を運んでいると、新沢から、滝の様に流れ下る泥流に百々目木川の本流が押しまくられて、忽ち左岸の山裾を削り、次々と道を削り畑を削り住宅の裏側から殺倒して、アッと言う間に家を持って行ってしまった。その余勢で上の作小屋も運んだ品物も皆な消えてしまい、家と同じ高さにある分校上の水田も半分程引っ欠き、分校上に突き出していた岩壁に打ち当たったので方向を転換した。というような事でその人達も着のみ着のまま、上の松下さんの家に逃げ込んで厄介になっているが、命に別状はなかったとの事で、ほっとしたが、現場を実見して、今更乍らの猛威に驚歎するばかり、狭谷一杯に濁流が、あふれ両側にあった田も畑も岩磐まで洗い出されて、全く青い色が見えない。上流に8つの橋がある筈だが、全部流失しているとの話だった。両夫婦を避難している家の主人公も来て

くれ当時の模様を交々語る。皆共々に此非常な苦難に対処し、助け合い励まし合って立ってくれる様、依頼し激励して置いて引きかえす。帰路は百々目木組の西岸川向うの2軒を訪ねる為に山の横手から、新井の井筋へ下る。井の端の藤葉小屋に上下2軒の人々10余人が避難して、雨丈けを免れながら共同炊餐をしていた。遭難当時の模様をきき慰問の言葉をのべ、直ぐ救援の手が伸べられるから、力を落さず立ってくれるよう言い居いて現場を見る。上の家は古い大きな家だったが、いん居も家も蔵も完全に流失して了って、食糧も衣料も皆無の状態、下の家も古い大きな家だったが、上りの家が倒れかかって暫くすると、屋内に奔入した泥流と共に大音響を立て、流



百々目木五十目前の惨状

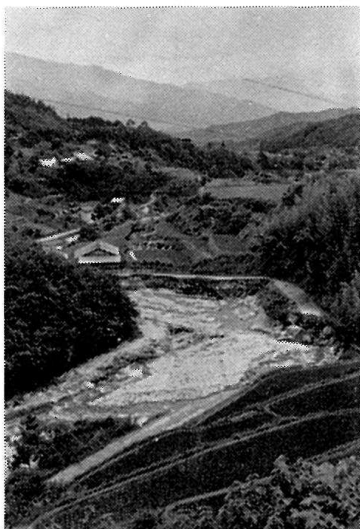
れ去ったがその勢で本流の方向が対岸の50目へ向って殺倒し、上の大田から昨年までに一億数千万円を投じて出来上った、前災の堅牢な復旧工事の護岸を一飲みにして、県道四徳線をも欠壊、家の下にあった蚕室をなめて、荒れ下ったので、後ろにあった土蔵2戸前が不思議に残ったという。然し今、激流がまだ蔵の土台下に打ちつけて、流失寸前という処、青葉を切って瀬追をし、蛇



残った土蔵

かごを入れて懸命に喰い止めようとしているが、消防員も全線に亘って分散しての作業であり、連日の奔走に勞れて応援の手配もなく、家の人々と親戚の人など数人で、針金を張ったり石を運んで重石とし、波の打ちつける度に崩れ去る土砂の押えをし、泥まるけになって、応急作業は続けているが、此上は運を天に任せるより他な

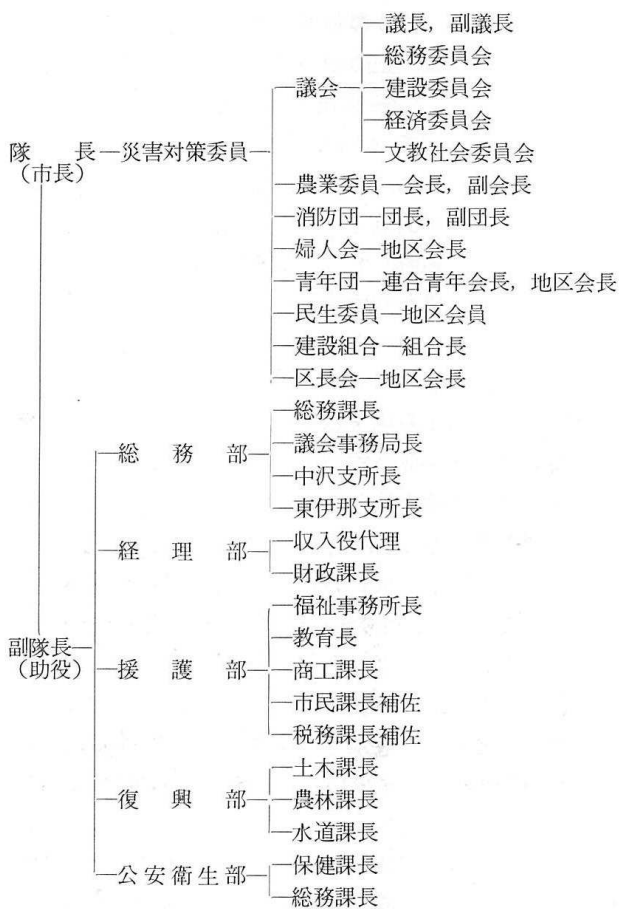
いと、憂色が濃い。裏の畑には搬出した家財道具が雨ざらしになって抛り出されている。矢代の山崎の家も流失寸前に見える。



矢代付近

新井から2つの大きなナギが矢代橋を落して行った惨状を見て、午後支所の災害対策委員会に出席、見聞実況を報告。救援物資の配給等の手配をする。市では臨時議会を召集し、罹災救助条例の一部改正を議決。対策本部では次表の組織と部会の編成を了し、それぞれの部門分野の打合せを行ない、直ちにそれぞれの活動を開始した。

災害救助駒ヶ根支隊編成表



建設部会は即刻現地調査に出張。中沢の現地では昨夕の手配により、本部消防員の精鋭30余名が出動、山を越へ、激流を渡渉して、死体捜査に活動、(口絵写真参照)その結果、中島の倉庫の倒壊流失の下敷となった為か、埋

没の家屋前の土砂中から老人夫婦が死体となって発掘されたのみで、若夫人と2児は行方不明であり、翌30日検死埋葬の手続を取った。

30日(金)は朝の間の雨も順次上り久しぶりに爽やかな陽の目に遇う。早朝支所から青年連の救援物資配給隊が各方面に出動したが皆張り切っていた。自衛隊高田隊普通科340名が救援の為配属となり、午前9時半中沢中学校庭に到着。隊長第2大隊長2等陸佐大塚泰一氏指揮直ちに活動を開始した。逞ましい血気の若人たちが、整々たる行動で、シャベルをかつぎ鎌を手にして、第1作業隊は大洞方面に第2作業隊は百々目木方面及び水源地方方面の連絡路啓開に一部は新宮川岸地籍の水防と土砂搬出に着手した。ショックと連日の奮闘に疲労して、虚脱状態となり、茫然自失、何も手につかぬ村民たちが、此溘溘たる若人たちの頼もしい活動姿に、どれ程勇気づけられた事か。14軒流失の落合部落も老人達を避難させるなど、区民も稍生気をとり戻して活動を始めた。市は議長外2名、伊那建設事務所及び地方事務所に災害救援の陳情と情況報告をする。一方日赤奉仕団(婦人会)は救援物資の募集配布の準備をした。陸上自衛隊朝霞駐屯部隊第1建設部第102建設大隊幹部、建設事務所、市吏員と架橋作業の打合に來られた。



婦人会奉仕団

7月1日(土)

朝雷雨があり又増水の傾向である。朝8時上下雨仕度で民委担当区上割南洞歴訪に出発。百々目木の平が全部広河原となってしまった中に昨年までの復旧工事の一部が流失を免れて立っているのに驚く。川向うの倉庫は幸にまだ安全である。今は部落の人達や消防衆が此方の川原から連絡をつけて救援作業に熱中している。自衛隊の通路啓開班と前後して、川島宅訪問28日朝裏山からの山崩れの為、家屋が全壊し、途端に3つにち切れて下の田に投げ出され、自分も田圃の屋根下の梁と柱に挟まれていて出る事が出来ぬ。幸外へ投げ出された妻の叫び声に力を得て無我夢中でいざり出し、一緒にいた筈の子供達の名を連呼すると、天井裏あたりで返事があり、かぶさった屋根を蹴上げるので、漸く所在を知って、大急ぎ屋

根をつき破って助け出したが、自分は腰を強打して痛くて仕方がないので、お医者様に診て貰った。骨に傷が入っているのだが他に支障はないと言われ、安心しながら隔日に通っているとの話。壊れ残りの物置小屋を囲って親子3人、雨露を凌いでいた。重傷でなくて何より良かったと慰めたり励ましたりして置いて新沢に上る。此沢には6軒の住家があり、郡の耕地課で、此奥に村有林や、県行造林地があるので、数年がかりで、10数箇所に砂防の円堤を入れ、漸く完成したばかりであり、大体的理想的な砂防施行区域である筈なのに、此集中豪雨に堪え切れず大松尾から各谷に崩れ出した夥だしい土砂の奔流で、殆んど全部の円堤が欠壊し、泥流が狭い谷間の兩岸の田畑を削り、平常の河川、道路より3米も深い岩盤まで掘り出して、今尚谷一杯に濁流が走り下っている。全く想像を絶した惨状である。入口の家(木戸)は谷から遥かに高いので幸家に別状はないが川端の田や畑が流れたとのこと。2軒目の家(上)は後ろ山からのナギが家の半分に突き込み、前庭は氾濫した濁流に欠き取られ家の隅柱が宙にぶら下っている。今一息で家も危険という状態となったので、災害発生以来家人は皆木戸へ避難し続けているとの事。赤岩は濁流に倉庫をさらわれ、畜舎倒壊土砂が堆高く突き込んで来たが幸住宅は被害が無いので冷々しながら住んでいる由。4軒目の新家は此谷中最も危険と思われる位置にあるのに、川向うから渡る橋に堰がれて一時砂泥が入口の畜舎を倒し家の入口から縁の下まで浸入したが橋がもぎ取られると共に鉄砲水となり、対岸に向って狂猛に走り下った為に家も周囲の田畑も、奇蹟的に助かったと愁眉を開いて、流入の土砂を運び出している。カンペヤンキは稍川に遠いので安全かと近寄って見ると、後ろの山が、全面的にずり下って、家の裏から、戸を押し破って屋内に浸入。大黒柱を押し出し、家が傾いて、表の土台がねち曲げられ、今一押で全壊する処土間が大きな流れとなって、戸間口へ流れ出しており、家人は皆そばの土蔵に避難し、競々と過している。家の下の大田は、河の本流通過で、木材、石塊の山のような堆積である。6軒目の福本に行くと、本流の為に居室の上に在った萱葺の小屋を潰した勢で庭を削りとられ、特に転落寸前という処へ、上の山からナギ抜けが襲って来て居宅へ流れ込み、これが重圧となって流失は免れたが、一方家と庭との間にあった畜舎を押し倒した。中に2頭の牛がいたので、之を助け出さねばと、親子3人、泥まるけになりながら、必死で牛舎の一方を突き破ると、幸若い元気の仔牛は泥まるけが大した怪我もなく飛び出した。然し親牛は出られないらしいので、皆とって飯して今一度掘りにかかると、ぐたぐたの泥流が又上から上から襲いかかって来て、自分等も危険なので悲鳴を聞きながら遂に救助出来なかったと涙乍

らの話である。

一番大切な親牛を助け出す事も出来なかった位で、避難する処も時間もないので、僅かに無事だった蔵の敷板を外して、家財と一緒に牛を入れ、家内3人は蔵の軒下で日を送っているとの事、当事の模様を詳細に聞いて、全く戦慄を禁じ得ないものがあった。田畑の殆んどを流失し家が此状態で、皆生きた心もない。子孫たちにこうした苦難を再び味はせたくないと思えば、此際安全地帯へ移転することがまっ先ではないかと話し合っていると、深刻な表情である。誠に尤もな次第で、慰めたり励ましたり、我々としても必ず将来役立つ事の出来るよう相談相手になるから気を落さず、後図を計れと激励して辞去したが、川端の道へ下るに上の藪から吊下げた針金にすがって岩壁を下らねばならぬ。まるで高山の峻所渡りの感じである。横手の欠壊箇所2つを横断して引の田へ出るといづれも細萱の上の谷から崩壊した山津浪の為、どの田も畑も覆没して谷中まっ白である。まだぶよぶよしている泥の堆積の薄い処を踏んで細萱を訪ねる。上の山ぬけの大ナギが家の前の畜舎と納屋を全壊して谷一杯に流れ下ったが、幸に蚕室と居室は難を免れた。然し上の谷には第2第3の亀裂がある模様故、何時又抜けて来るか、心配故、上の畑の処へ牛を結って万々に備えているとの事。幅3~40mの大山津浪が谷中の田畑の上に被いかぶさって、入口の神社の森とその裏にある集会所を奇蹟的に外れ、真直ぐに熊谷君の家の倉庫2棟に激突、1棟は北に倒壊その余波が羽場の家の隅柱を打ち折り下の倉庫を押し倒して、左にそれ、下の大河へ突き込んだので、右下にある竹村の家は僅かの濁水に見舞われたのみで無事、1棟の土蔵は南に倒壊して、貯蔵の米も糲も泥流と共に下の大河へ、その余波の泥水が、左り下の家(西)の裏から床上まで流れ込んだ。土蔵を押し流した泥流の分派が熊谷君の居宅の北隅から、既に、通りを埋めて突入、隅柱を取り去った為屋根が傾斜したという騒ぎ、全く目もあてられぬ。西の上の家(オメエ)は裏山の小沢が欠壊氾濫して思いもかけぬ裏口から土砂が大量に突き込んで来て、通りから既に、座敷に堆積、表座敷丈が無事だったと、家内中で今砂出し作業の真最中。引の田部落は川から一段高い丘の上に在るので、何時の水害も川端の田畑の流失や冠水で真逆家には被害があるまいと思っていたのに、今度はいづれも山津浪の見舞を深刻に受けたわけだ。久保畑へ行くと、是も又、裏山からの大ナギが、田と言わず畑と言わず埋め尽くして見る影もない。然も家の中は奥座敷まで全部2米位の土砂を積み上げている。家内中と親類の見舞に来て呉れた人々数人で、今漸く奥座敷だけ土砂を発掘し終わった処だとのこと。一同傍の倉庫の内と軒を囲って生活を続けていた。桃平へ上って行くと、是も又34年の災害の時裏山か

ら土砂押入で移転を余儀なくさせた伊藤の家跡へ押し流して来た泥土が2つに分れて、1つは戸沢の家の納屋畜舎から通りに押し込み、1つは大間の裏口から戸を押し倒して屋内に陳入、床上まで土砂で埋まり、どう仕様もない。敷物を洗って乾し、床板を外して是から縁の下の砂を運び出す処だと夫婦懸命に作業を続けている。此際職場を考慮すると同時に家屋の移転について共に考えようと話し会った。桃平一番上の家(奥)は今度の入萱大松尾の山津浪で真つ先に家屋流失蔵だけ辛うじて残り、上手は家は無事だが家の前の県道が欠壊、庭幅まで本流が打ちつけ、危険な状態であり、菅沼の家は流失して、倉庫1棟河原中に取り残されている。川の向うの7軒は大水で渡れないが、大角の川が荒れて、上2軒に土砂が流入したとの事。家の無事なのは早草部落だけとの事。もう薄暗くなってきたので、今日自衛隊の造ってくれた連絡路を大急ぎで下った。

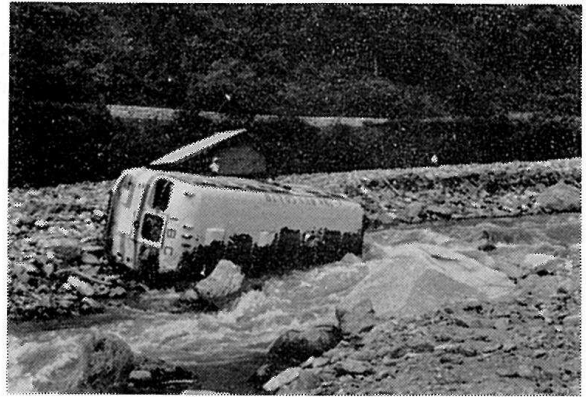
此日自衛隊の第1作業隊の30名は死体捜索に、他は桜渡橋復旧、大洞方面の人道開設と救援物資輸送に活躍され、第2作業隊は、簡易水道復旧、百々目木方面、道路啓開有線復旧、救援物資輸送、電灯用送電線復旧に活躍され又陸上自衛隊朝霞駐屯部隊第1建設第102建設大隊60名を引率して2等陸佐西村武雄氏が来援、東伊那公民館に宿営されて、新宮川橋の架設に着手された。

又日赤から市宛救援物資21梱が到着したので、市は災害対策委員会及び区長会を開会。救援物資及び義捐金募集のことを決定した。

7月2日(日)曇天だが気温は21度の高温である。

朝第6グループ婦人会の衣料慰問の相談があり、仮設住宅申込の2件を調査、9時支所に出頭する。対策本部の連絡会議に、昨日までの実地踏査に鑑み、埋没家屋の応援について具申し、10時から中沢地区民(児)委協議会を開いた。今日までの状況報告、是に対処する方針等の協議を遂げ、取敢えず午後には全員12名が手別けして、社協の見舞金並びに他よりの見舞品を携帯、罹災家族を歴訪する事となる。自分等4名は上割北谷に向う。自衛隊諸君の手により、連絡路が落合まで出来ている。先づ、南海宮の平に避難の2戸を見舞う。小林君宅は他の人達より後まで残っていたが、前へ突き込んできた大洞川の土砂と、後ろから護岸を欠いて突き込んで来た砂礫が2階まで流れ込んだ時、瀬が変り、その儘広河原中に埋没傾斜しているし、滝沢君の家は29日の午後になって完全に流失してしまったとの事共に住宅相談に応じ斡旋を約束して駒場を下る。しばしば危険を報ぜられ、防除に苦心を重ねた甲斐があって、上から順次14軒流失してしまった最後の家が、たった一軒流失の厄を免れている。見舞やら喜びをのべて表に出ると、見渡す限り落合の稚蚕飼育所から南海まで、南北50米位の広河原とな

り、砂礫中を延々自衛隊啓開の通路がうねっている。河原の真ん中に小林君の家が一軒大破埋没している。その少し上に倉田君の倉庫が1棟、腰から下を砂中に埋めている。伊那バスが1台河中に横転して白い腹を波に洗わせているのも衰れである。



横転したバス

農協の稚蚕飼育所は、李平川の本流が南側に突っ込んで来、中山川が北側から竹村君の家を流し、車庫と伊那バスを呑み去った勢で、突っかけて来て、全壊させたが、2階造りの住宅兼事務所は、基礎が確りしていた為か、根をさらわれて僅かによるび乍ら取り残されている。両川の中島に取り残された事務所の2階には当時巡回中の農協の蚕の先生が2人泊っていたが、飼育所がメリメリと大きな音して倒壊する。周匝は濁流の奔湍である。何処へも免れる道はない。2人共死を覚悟して、今か、今かと立ちすくんでいた時の気持は何とも形容出来ないとの後述懐であった。同じ中島の飼育所の庭に接した小堂宇(十王堂)と墓地が青々と残ったのも皮肉である。



稚蚕飼育所

県道栗沢線から、市道中山大曾倉線へ先頃完了したコンクリート橋は、流石に落橋を免れ、流水と土砂に埋め尽されているが、発電所への巨大な導水管は2、30米欠潰して無惨な残骸を晒している。此稚蚕所の北側の県道を隔て、伊那バスの車庫があり、これから西方半軒ばかりの間、県道の両側に櫛比していた10余戸の家々が僅



破壊された導水管

か中島君の家を半壊して残したのみで、全部洗い流され
 広河原となってしまう、周辺にあった美田も畑も墨々たる
 石塊の底にある。当時の怒濤の狂乱ぶりが、想像を絶
 したものであった事を思わせる。落合下に避難している
 4家族を訪ね更にぶどうにいる1家族、沢に身を寄せて
 いる2家族を見舞ったら、永い夏の陽も暮れに近づいた
 ので残りを明日にゆずり飯途楠垣外の1家族と発電所の
 1家族をのぞいた。今日本部へ建設省山本技官、中島代
 議士が視察に来られ、赤穂高校生150名、信大農学部37
 名が新宮川岸へ奉仕に来られた由。

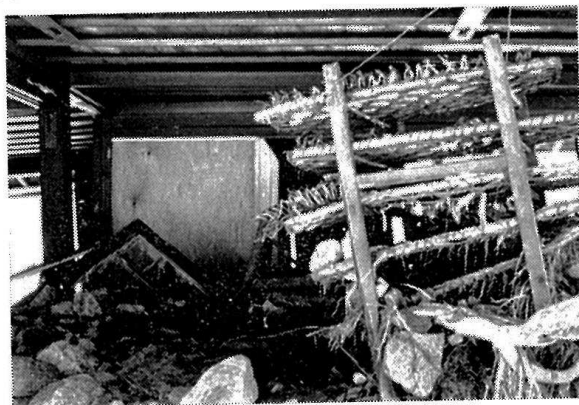


自衛隊の架橋作業

自衛隊の第1作業隊は死体捜索、桜渡橋取付復旧、人
 道開設、有線復旧、電燈用送電線（大洞方面）復旧、松
 木平橋護岸工事等に分散して活動せられ、第2作業隊
 は、簡易水道復旧、人道開設、有線復旧、電燈線（百々
 目木方面）復旧に、警務隊4名は大久保橋から中沢支
 間道路状況調査危険箇所表示に出勤された。

7月3日（月）は薄曇りだったが摂氏24度の高温で
 ある。今日は部落消防団員と親戚の人々で、今一応川下
 から現場まで限なく死体の大捜索をする事となり、丹念
 に探し廻ったようだが、残りの3人は逐々見付からな
 かったとのこと。自分は早朝赤穂町3区から落合部落へと
 送られた見舞品を背にして落合行、自治組合長に配分方
 を依頼し、昨日の見舞の残りの家庭訪問を続ける。猿沢
 口の東伊那校在勤の井口先生の家は蔵と共に跡形もな

く、高い岩の上に戸棚の破片らしいものが立っているば
 かり、猿沢洞も奥の方に沢山なナギ崩れがあったらし
 く、あの小さい河が大増水で、狭谷一杯に荒れ下り、川
 から10米も上にある井口君の家が下の方から漸次欠き
 流されて庭幅が欠け始めている。危険でと皆心配顔、上
 は無事のようなが細久保は庭前の倉庫に被害があった模
 様と聞いたが道が全然ないので上れない。李平へ行くと
 道路は全壊してしまい、道の両側にあった田とう田、畑
 という畑、全部が流失して青色なしというわけ、川の向
 う岸の明賀は草葺の屋根が3分の2もぎとられ、柱も壁
 も、床板も濁流に洗い流され、家はガラン洞となり、現
 在尚濁流が、床下に打ちつけて、削り流しつつある。李
 平に古くからある3軒の下の家は、唐山川と大洞川合併
 の大泥流が全部屋根上から殺倒、蚕室と土蔵を倒壊流
 失、居室内は全部土砂と石礫で埋めて了ったという惨
 状。幸に人畜に被害なく皆南側の土蔵に避難していて当
 時の恐ろしかった模様を交々話してくれた。室内には上
 簇の藪の棚がギッシリ立てられ見るも無惨に土砂に埋め
 られている。是から自衛隊の諸君に依て屋内の土砂取除



土砂に埋まった藪

き作業に取りかかるという処。上の家は此泥流の余波が
 上座敷から床下前庭等に浸入して来て、大分堆積した
 が、西方に在る納屋畜舎、麦はざ等の障害の為中の家は
 被害を免れた様子。唐山口の満州引揚者鈴木君の家と、
 農協の木炭倉庫は何処へ行ってしまったか知る由もな
 い。此中間にあった小さなお宮の御神木がたった1本、



唐山のナギと神木

大荒水も知らぬげに、広い河原中に堂々と立っているのは奇観である。自衛隊が急速に架けてくれた丸太橋を渡り、丸山を訪ねる。28日夕方、夕食をとろうとしている処へ非常な勢で水が襲って来たので先づ牛を1段高い後ろの納屋に押入れ、鼻面を撫で、別を告げ、一家後ろの岩山へ這い上って、バラへ避難したが、夜中に家も蔵も全部流失、唯幸にその納屋と牛だけは助かったと当時の悲惨な思出をきく、当分多賀神社の舞台を借りて住み、若い者は急速に転職、移住の計画をやると皆張り切っているのに安心した。多賀神社の仮住居の準備状況を瞥見してから唐山へ上る。唐山4軒の中3軒はいづれも無事だったが、2階造りの一番大きな上の家へは、真っ直ぐ上の山から大ナギがうなりを上げて襲いかかり、入口の長屋と土蔵を潰し去り、本宅の南半分から屋内全体に流れ込み、南の隅柱を吹っ飛ばし、百貫もあろうかと思われる大石までを堆積して、それ等が重しの役目を果たした所にか、柱は折れ、曲り、ホゾがねぢ切られて傾斜しながら、2階をのせた儘惨憺たる姿で立っている。現場に至らず外見だけで、最初の報告に半壊としてあったのも当時としては止むを得なかったが、慰問に訪れ、家人が奥の倉庫内に避難して、今奥座敷の土砂を運び出し乍ら、炊事の水も埋ってしまっていて、得られないという物凄い現場に暫く呆然とさせられた。幸お婆さんが逸早く、牛を上小屋へ避難させたので無事だったのは何よりだった。山の横手を伝って大洞に出ると、右手の洞から大きなナギが出て、上から下まで1町ばかり田形の儘覆土している。未だ柔かな土を踏み越えて、遭難の家双山君宅に行く。家の前にあった蔵は全壊流失、家屋は半ば砂に埋って立っている。本家の奥さんが怪我をして生き残った娘を連れ近所の人々と家財の片付けをしていて、今日は又皆で死体捜索というので生き残った主人公も下の方へ行っているという。御見舞の品々を托し、先日皆で老人夫婦を発掘したという跡に当夜を偲んだ。見上げるような高い処に並んでいた上、中の2軒の家々が、豪雨の為各谷々から集った激流に庭中まで根をさらわれて、危険だったと言われる位なので、中島と言われる位置にあった遭難者の家がこうした災禍に遇うも又天命だったと思われる。此処からバラ横手に上り西明賀に避難している竹沢さんを訪問して慰問し、仮設住宅就職の件等相談に応じて下向する。落合まで中配の電灯復旧班の人々が上って作業していた。

自衛隊第1作業隊は猿沢人道開設、有線復旧、送電線(大洞方面)落合部落防疫、救援物資輸送(大洞方面)落合より右岸通学路開設に、第2作業隊は人道開設有線復旧送電線復旧(百々目木方面)救援物資輸送、南分校通学路開設、中沢簡易水道復旧に引続き尽力せられ、別に警務隊は各開設人道へ交通安全内の表示をされた。

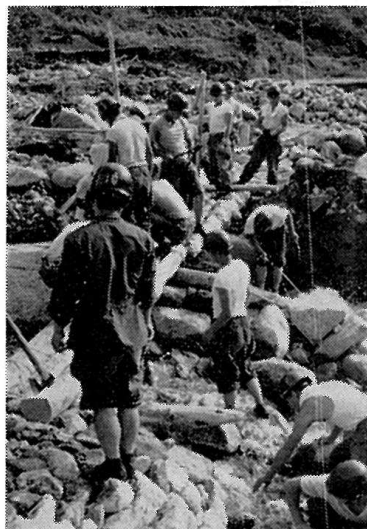
本日本部へは県の林務部長の視察があり、東京中沢人会の代表が沢山の見舞の金品を携えて中沢支所を慰問せられたとの事であった。

7月4日(火)今日も又雨だ、菅沼中割民(児)委3名の応援を得て4名が2手に別れ上割南洞の慰問並に仮設住宅申込決定の為24戸を歴訪する事となる。先達遅くなって廻れなかった大角は、瀬端が住宅流失の為家人は流れ残った倉庫内に住んでいた。移住を心配してくれとのこと市の公営住宅を心配する事に決定。大角下は土砂流入だけだったので大分掻き出しが出来ていた。中は家半分に土砂が突っ込んで大破している。大角洞からナギが来て上の家の畜舎を大破、居宅に流れ込んだ上、中の



大角橋付近

家へ突っ込んだものらしい。中の分家も裏山から来た土砂の床上浸水であった。落石は前の橋が流失して倉庫の下まで本流が打ち付け危険なので皆で牛を結う作業中であり、先日家屋流失、倉庫だけ川中に残された分家の菅沼君も手伝っていたので見舞等を托し、未だ危ない丸太の仮橋を渡り薄暮びしょ濡れとなり飯る。今日は又信大農学部学生60名が新宮川岸の砂堀り作業の応援に来て呉れ大いに仕事に渉取った由自衛隊第1は東伊那簡易水道



自衛隊の架橋作業

宮沢水源復旧、落合方面農業水路復旧、資材運搬、有線復旧救援物資輸送(大洞方面)落合よりの通学路開設。警務隊交通安全内表示。第2は南分校通学路開設、農業用水揚機搬入、(新井)中沢簡易水道水源上より早草までリヤカー路開設、簡易水道復旧、救援物資輸送、等に分散従事された。

7月5日(水)朝のうちの雨が順次上り、蒸し暑い曇

り空となった。水も大分減って来て、各所漸く安堵の色が濃くなった。前8時半支所に関係者集合。仮設住宅希望者の取まとめをする。割当20戸に対し19戸の申込があり最終的には充実する見込。午後1時半から市役所旧議長室で災害更生対策特別委員会が開かれ、仮設住宅受入れについての根本方針の策定をする。原垣外地籍の市有地に1戸当り50坪の敷地を設定貸与すること。市の公営住宅も併設する準備を整えること。住宅及び職業指導相談所を急設して、罹災者の相談に応ずること(8日、10日)等を決定した。此日、東京公衆衛生技術学校生6名が奉仕に来市せられ、建設大臣一行40名が上下伊那災害地視察に見えられた。自衛隊第1作業隊は東伊那宮



建設大臣に説明する市長

沢水源復旧。救援物資運搬(大洞方面)農業用水路復旧資材運搬落合方面東分校通学路開設に、第2作業隊は南分校通学路開設、中沢簡易水道復旧、新沢家屋取壊し、水路復旧資材運搬、早草へのリヤカー道開設に活動された。

7月6日(木)夜来の雨が8時頃から順次上り、2時頃まで珍らしい位の晴天、然も恐ろしい暑さになったが、午後又曇天となり夕方は降雨になった。午後1時から、中沢小学校裁縫室で駒ヶ根市民生(児童)委員協議会を開催した。災害状況の報告。是が対策の攻究、被害者に取敢えず見舞金2万円を贈る件を決定した。夜住宅職業相談所開設につき有線放送をする。本日市では昨日の決定に基づき、土地確保委員会を開き住宅地の決定をする。農林政務次官一行が視察に見え、102建設部隊40名が増援になり東伊那公民館に宿営する事となったし、自衛隊第1作業隊は引続き宮沢水源復旧、通学路復旧(大津渡橋)救援物資運搬、第102部隊援助(新宮川岸地区)第2作業隊は南分校通学路開設、新沢地区住宅砂出し、新宮川左岸住宅掘出し取こわし、救援物資運搬に従事された。

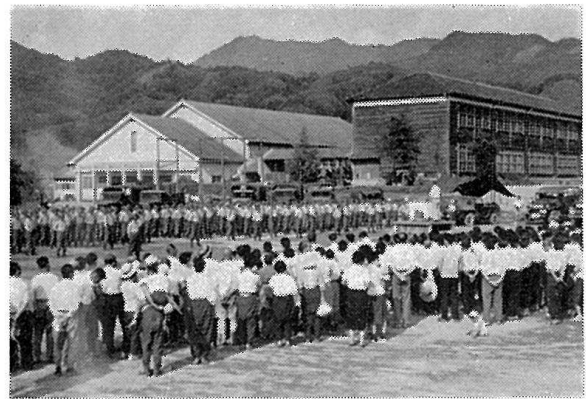
7月7日(金)は久しぶりの快晴高温である。自衛隊から30名上割佐越井の水掛作業の応援を得、地元関係民全員出動半日に完成した。其能率の上る事。節度の正しさに一同驚嘆した。此日建設省から市の公営住宅設立

に対し査定があった。自衛隊の第1作業隊は、農業用資材運搬(落合方面)通学路復旧(大津渡橋)宮沢水源復旧救援物資運搬(大洞方面)第102部隊援助(新宮川岸)桃平より折草峠へ人道開設を第2作業隊は新宮川左岸住宅掘出し取壊し、救援物資運搬(百々目木方面)左越井(30名)等だった。

7月8日(土)快晴高温である。伊那職業安定所員の出張を乞い、県から災害住宅金融公庫の係員も来て貰って朝から住宅及び職業相談に没頭する。30余名の出席者があり5時半漸く閉所した。此日の第1作業隊は桃平から折草峠までの人道開設、道平橋架設、第102部隊(新宮川岸)援助に第2作業隊は百々目木地区、引の田地区住宅土石出し南分校通学路復旧、菅沼土地改良水田への用水路開設に出動された。

7月8日(日)市内土建業者と落合方面木材保有者、地元関係者との協力方斡旋をし、罹災者住宅相談に巡回する。午後は自衛隊高田隊が任務完了につき、中沢中学校庭で感謝状の贈呈式が挙行された。一方102建設部隊はブルトーズを駆使して、南海下の河原を押し上げ、旧道に没って4米の道路を啓開南海橋架設の準備をした。此日全議員は全員災害地の現地調査に出動した由。

7月10日(月)快晴。午前7時半高田隊大隊は全員帰還につき、村民多数校庭に参集、見送りをする。短期間ではあったが、復興の業績に、精神的の影響に、多



高田自衛隊を送る市長挨拶

大の巧績を残して去られる車に、名残を惜しみ、感謝に燃えて手を振り、點頭し、年寄りなど合掌し、涙して見送った感激の一時であった。8時半から職業住宅相談の第2日目を支所に開設1昨日の残り全部を完了した。一方市役所では災害対策委員会援護部会を開いて義損金配分につき協議を遂げた。此日102建設大隊260名と松本駐屯隊41名応援の為到着。今日まで60名でやっていた新宮川橋へ71名、290名は南海棧橋及び南海橋架橋、ブルトーズによる堤防工事に取掛った。

7月11日(火)朝職業住宅個別相談の集計をやる。仮設住宅20戸、公営住宅11戸、融資申込38、宅地のみの必要者6、職業相談36件となる。午後1時半から

市役所正庁で特別委員会。引続き2時半から会議室で災害対策全体会議を開き、各部会の状況報告と今後の申合せをやり6時半解散。猛烈な雷雨となった。本日南箕輪青年会の諸君60名が奉仕の為来市された。その特志は感謝にたえない。102部隊は71名で新宮川橋の架橋と堤防作業を完了し、290名は南海橋2箇所の架橋に集中した。

7月12日(木)曇天、折々小雨が思い出したように降り、時雨模様の蒸し暑い天気だった。市では竣工した新宮川橋の渡り初式を挙行し、漸く新宮川岸から下割への通路が啓開された。衆議院の視察団一行が来市され、応援の松本隊41名は帰隊し102部隊320名全員南海橋の架橋に全力を尽された。

7月13日(金)曇天、時雨模様、市では総務委員会と郡市対策委員会が開かれ、朝霞隊は重機械を駆使して土砂を運搬架橋作業続行。

7月14日(土)晴、高温、県更生資金、災害住宅資金の貸与を受けたいもの、申込みにつき調査直ちに福祉事務所に申達する。午後2時から、災害対策更生特別委員会が開かれ、流失土地保証立法の陳情の件、住宅地々割の件四徳羅災民受入態勢の件等の打合せ協議を遂げ6時に散会した。102部隊の作業により南海橋及び架橋工事竣工。

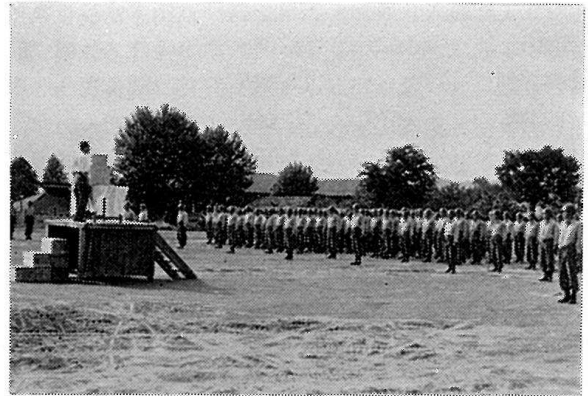
7月15日(日)晴、朝落合の2人から仮設住宅希望と木下正三君は蒲郡転出の相談あり、他県転出は最初である。午後102部隊架橋の架橋及び南海橋渡り初め式を挙行した。自衛隊員300名全員と対策委員全員が現地に集合して、架橋のテープは市長、議長の手により、南海橋は部隊長西村陸佐により、それぞれ切断され、全員4



南海橋のテープを切る市長と議長

列縦隊となって行進通過。一般地区民沿道に整列感激の中を、部隊の車輛30余台に分乗、市の宣伝カーを先頭に本日までの協力感謝と本日東伊那小学校庭の、感謝状贈呈式並に明日出発の時刻を放送し乍ら、新築橋の新宮川橋へ迂回して宿营地東伊那小学校庭に集合。自衛隊北面、市関係者、一般市民、小中学校生南面の対面隊形で市長から懇切な謝辞と感謝状の贈呈があり、隊長から謝

辞に併せて、一刻も早く復旧するよう市民の奮起を要望された。感激の壮行式であった。



自衛隊を送る助役挨拶(東伊那小、中学校庭)

7月16日(月)午前建設102隊全員朝霞本隊に帰属の為退市された(以下重要事項摘記)。

7月21日 更生対策特別委員会

7月25日 旧議長室で援護部会。義捐金配分打合せ

7月25日 県厚生課長一行現地視察(仮設住宅の件)

7月26日 松本自衛隊音楽隊災害地慰問演奏来市

7月27日 義捐金配分再検討(総計2,573,215円)

7月29日 中沢地区義捐金贈呈、原、下割、中割、上割各地区協議所に於て伝達

7月31日 東伊那、下平、吉瀬各区に義捐金贈呈式

◎今回の災害に対する概要統計

△一般土木災害(36.6.30現在)

| 種別 | 延長 | 箇所 | 概算事業費 | 備考 |
|----|--------|-----|-----------|----------------------------------|
| | | m | 千円 | |
| 国道 | 500 | 7 | 500 | 粟沢赤穂線竜東線 百々目木川、新沢 川新宮川、下間川 |
| 県道 | 16,521 | 43 | 387,200 | |
| 河川 | 14,694 | 73 | 1,047,460 | |
| 市道 | 4,400 | 22 | 46,500 | |
| 林道 | 3,680 | 22 | 31,800 | |
| 治山 | 410 | 206 | 180,000 | |
| 橋梁 | 307 | 33 | 56,900 | |
| 合計 | | | 1,823,360 | |

△家屋被害調べ

| 種別 | 棟数 | | 世帯 | 人員 | 被害額 | |
|------|-----|-----|-------|-----|-----|-------|
| 流失 | 住宅 | 34 | 1085坪 | 31 | 132 | 27125 |
| | 非住宅 | 40 | 367 | 3 | 14 | 5505 |
| 全壊 | 住宅 | 36 | 1020 | 34 | 152 | 25500 |
| | 非住宅 | 43 | 349 | 3 | 13 | 5235 |
| 半壊 | 住宅 | 31 | 1173 | 30 | 164 | 15249 |
| | 非住宅 | 35 | 315 | — | — | 2520 |
| 床上浸水 | 住宅 | 6 | 182 | 4 | 15 | 1456 |
| | 非住宅 | 8 | 47 | 1 | 4 | 188 |
| 床上浸水 | 住宅 | 15 | 546 | 15 | 67 | 1638 |
| | 非住宅 | 11 | 297 | — | — | 594 |
| 計 | 住宅 | 122 | 4006 | 114 | 530 | 70968 |
| | 非住宅 | 137 | 1375 | 7 | 31 | 14042 |
| 合計 | | 259 | 5381 | 121 | 561 | 85010 |

△耕地被害

| 種別 | 数量 | 被害額 |
|------|-----------------|---------|
| 農地 | 1679反 | 156,050 |
| 農業施設 | | 17,585 |
| 作物 | 1679反 | 38,038 |
| 家畜 | | 5,123 |
| 畜舎 | (家屋を含む) 3980 | |
| 合計 | | 216,796 |

△人的被害

- 死亡
 - 双山平治66世帯主農
 - " はるよ64 妻 "
 - " 袈裟男 8 孫 "
- 行方不明
 - 双山ふみ子35長男文男妻
 - 双山幸彦 4 孫
- 重傷 双山美也子6孫

の定める仮設住宅も家族構成に依っては、居住に堪えない実情なので、坪数増加を同時に陳情を重ねたが、法の上から認可にならないので、県は独自の立場で5人以上、1人を加える毎に1坪を増加して建設することを決定されたことは、実情に即応する。有難い親心である。かくして8月21日までは仮設住宅への入所が出来るよう、急速な手配の出来たことは罹災者の為にまことに喜ばしい企であった。



原垣外災害移住者住宅

△被害累計

| 区分 | 数量 | 被害総額 |
|---------|---------|---------------------|
| 1. 一般土木 | | 1,823,360千円 |
| 2. 耕地 | 167町9反 | 216,769 |
| 3. 家屋 | 259 | 85,010 |
| 4. 人的被害 | | (死3, 不明2, 重傷1, 軽傷1) |
| 5. 宅地 | 3067坪 | 3,068 |
| 6. 動産 | 推定 | 13,328 |
| 7. 水道 | 中沢, 東伊那 | 790 |
| 8. 総計 | | 2,142,352千円 |

市の住宅対策

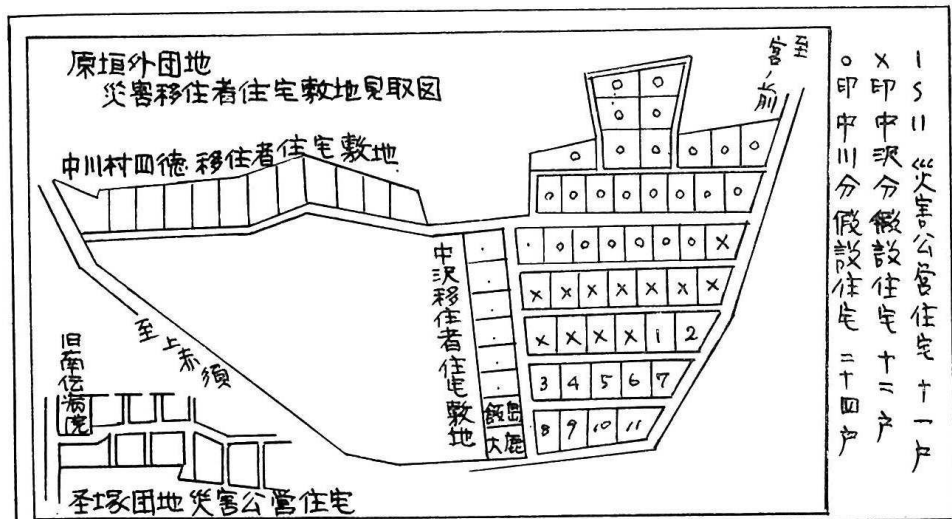
駒ヶ根市は県から災害救助法による仮設住宅(1戸建5坪, 10万円以内, 2カ年間無償貸与)20戸の割当, 公営住宅(1戸建9坪)18戸の許可に対して, 山村の異状災害は, 家屋敷地の入手, 極めて困難な事情を察し, 取敢えず, 市有地(工場誘致予定)の一部を罹災者の為に開放して, 二カ年間無償貸与することを決定。之等の人々の将来に希望を持たせる為にも, 1戸当り50坪を提供することとし, 道路の予定地を別にとり, 5坪の建坪以外は空地として利用せしめる構想とした。尚水道の共用栓をも計画を進めて, 先づ中沢からの罹災者仮設12戸住を決定。公営希望11戸との地割を始めた処。中川村四徳から大挙して移住の申込があった。

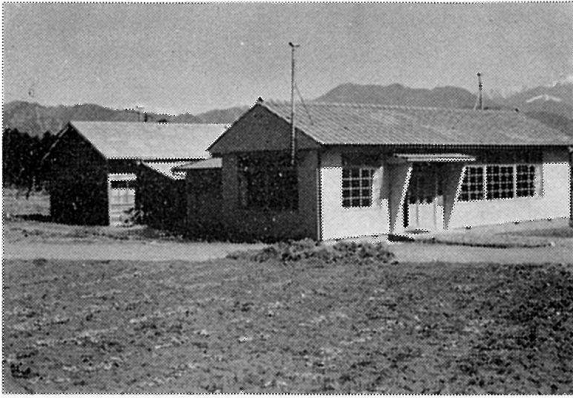
然し法の上から移住者にはその恩典の適用が無いとの事で, 両市村当局者が出県, 厚生省まで陳情の結果, 特例として, 駒ヶ根居住の許可を得たので, 急拠24戸の仮設住宅を増加, 更に後の申込に依る。災害復興融資住宅の敷地中沢7戸, 飯島1戸, 大鹿1戸, 四徳11戸分を4600坪の原垣外団地に設定し, 公営住宅7戸を経塚団地に決定して着工の段取を進めた。法

駒ヶ根臨時職業訓練所

罹災者の住宅対策は一応原垣外団地その他に設定, 着々として建設の歩が進められたが, 新職業の訓練を要望するものが続出したので, 市は罹災転職希望者の為に関係市町村長, 伊那職業訓練所及び, 関係業者と懇談を重ね, 「伊那谷災害転職訓練者援護会」を設立。県の了解を得て補助2分の1を頂き, 250万円の訓練所を, 原垣外団地の一角に新設することとなり, 9月15日, 地区内赤穂組により着工, 11月30日竣工を見た。更に赤穂農協の市場割稚蚕飼育所を宿舎に借り受けた。

駒ヶ根訓練所の訓練科目は, ブロック及び板金プレスであり, 募集の結果, ブロック科に, 駒ヶ根より1, 中川村より11(内寄5)長谷村より8(内1)大鹿村よ





駒ヶ根臨時職業訓練所

り2（内2）計22名（寄宿8）板金プレス科，駒ヶ根市6（内1）中川村7（内6）長谷村2（内2）大鹿村5（内5）計20名（内寄宿8）合計42名の入所生があり，電子機器希望者10名は伊那訓練所に，機械ブロック希望者64名は飯田訓練所が収容してくれる事となり，訓練期間中は，県及び援護会から，援護費，給食費，通勤費等を補助して家計を助ける処置を講じ，10月1日開所。6カ月の訓練を終へ，翌37年3月26日終了式を挙行し，それぞれ協力業者，その他へ全部就職して，各々明るい前途へ歩み出している。

3. 四徳（中川村）の災害

中川村四徳は町村合併以前は南向村の一行政区画とし



四徳中央部と下村の災害前（上）と災害後（下）

ての機能を有する特定部落であった。昭和36年6月27日伊那谷を襲った集中豪雨は四徳に対しても未曾有の大災害をもたらした。四徳の被害は伊那谷災害中でも最大激甚を極め，この部落発祥600有余年の歴史ある四徳も大自然の力の前に言語に絶する被害を蒙った，四徳谷に面した山々は崩れ落ち，谷は荒れ全山搔爪の跡も生々しく赤肌となり，至る所大欠潰をなし，肥沃な農耕地はもとより家屋の流失，全壊等々合せて53戸，全戸数の大半を失ない，この為の犠牲者は死者7人負傷者11人を数え四徳の損害は凡そ9億円の巨額に達した。

(1) 災害救助法の発動

6月28日12時40分災害救助法が発令された。この時現在の四徳の現勢は戸数84戸，世帯数93世帯，人口436人，農地，田23町6反1畝，畑24町2反，山林私有地2,555町9反7畝，区有林凡そ117町歩，この土地より生産した昭和25年度物産は，供出米936俵，生繭1,200貫，大小麦40俵，大豆60俵，コンニャク生玉460俵，木炭28,000俵，薪60,000束を販売し，用材売却代800万円，役牛51頭，乳牛12頭，アングラ兎1,620羽ニワトリ1,385羽等。

農協四徳支所の取扱関係は購買品年間1,250万円，販売品1,380万円，貯金785万円余，生産貸付金605万円である。

災害による家屋全流失全壊，半流半壊等合せて53戸，農地，田18町7反歩，畑16町4反4畝を流失埋没せり，中川村四徳分校も校舎内部を濁流が流通し，農協支部は農協の宿直室，書類倉庫，協議室，稚蚕所等流失，診療所教員住宅2棟等，又寺村集会所，ポンプ小屋2カ所流失牛6頭流失，道路は寸断され，橋梁は1カ所も無く流失せり，四徳製材所も設備整備直後跡形もなく，福泉寺も倉庫を残すのみ一切は流失したり，営林署四徳事業所も流失，以上27～29日9時までの惨状なり当時官庁その他非常に多数の関係各方面の人々の協力指導によって災害時の危急を救われたのである。（関係者氏名を略す）

(2) 当時四徳部落の要望事項

(1) 村当局に対する要望

1. 四徳よりの幹線道路の復旧応急工事を一時も早く
2. 電燈，電話復旧も一時もゆるがせに出来ない
3. 四徳に対する災害救助法の全面的且つ特例的な援護
4. 罹災者中，土地家屋を失ない現地復旧の余地なく生活の見通しのたたない者の他町村へ転出する場合住宅及び就職に特別な方途を講ぜられたい
5. 教育施設及び医療施設に最大の協力設備
6. 金融に特別の措置
7. 砂防に必要と認められる地域に徹底的砂防の方途を乞う

8. 役場職員の常駐

(ロ) 当時四徳より南向農協に対する要望

1. 有線放送施設の大至急復旧

2. 支所の開設

イ 購買部の早急開設特に日用品の販売

ロ 信用部の取扱開始, 特別貸付の大幅な窓口許可

ハ 販売部の開設, 特に春蚕の受入

ニ 利用部の開設

2. 残存田畑に対する技術員の指導

4. 被害地の共済金早期支払

5. 家畜類の早期販売体制確立

(3) 災害直後の状況

四徳の人々はいよいよ荒れはてたこの土地を離れるに当って特別に望郷の念があり, 色々と企画もたて農地の復旧も査定も受け, 河川及び道路も復旧のきざしも見えて来たが, 人間が居住するには何れの立場から見ても不適地と成り果て, 若人は災害直後よりだんだん他市町村へ移住, 永く住みついた農山村四徳をすててゆく, 老人のみにては何とも考える余地もなくそれも36年度中に40戸が他町村へ移住。37年度中に32戸が移住の準備をしつつあり, この時に当り, 何とも方途も無くなり, 四徳全戸が移住と決し, 38年3月末日を以て移住を完了した。この時四徳部落の農耕地及び宅地は約4,000万円

で県に買取された。

集団移住法により1世帯10万円, 1人2万円
 中川村見舞金 1世帯2万円
 四徳区配分金 1世帯10万円余, 区有財産処分代金
 家屋無被害者 31戸

災害当時は人口436人在住せしも, 36年11月末日172人となり37年度11月末日37人となりたり, 37年度より38年に年越せるもの23人となった。

(4) 中川村被災状況調(四徳はこの中に含まれる)

昭和36年7月10日現在(中川村役場調査)

罹災総数 戸数 295戸 世帯数 297 人員 1,382

1. 人的被害死者18人内行方不明4人重傷5人軽傷3人
 2. 全壊(焼)流失 戸数 97戸 世帯数 98世帯 人員465人
 住家の被害 { 半壊 戸数 34戸 世帯数 35世帯 人員465人
 浸水 戸数164戸 世帯数164世帯 人員705人
 非住宅の被害 115戸

3. 土木

県工事(直轄河川工事を含む) 1,150,000千円
 村工事 77カ所

耕地 { 農地 142.6ha 211,381千円
 頭首工 19カ所 16,590 "
 水道 18,295m 182,480 "
 農道 2,352m 14,540 "

事業 { 橋梁 12カ所 1,110千円
 溜池 6カ所 2,250 "
 揚水機 1カ所 3,000 "
 合計 431,341 "

5. 農耕地 { 田流失 159.6ha } 60,646 "
 埋没 51.7 " }
 畑冠水 70.5 " 10,540 "
 流失 153.6 " 38,120 "
 合計 109,306 "

6. 林務 { 林道被害 13路線 36,809 "
 林野治山害 334カ所 454,200 "
 林木, 素材 } 2,237m³ 6,445 "
 製材害 }
 木炭流失 5,000俵 2,000 "
 林産苗圃 } 63ha 9,328 "
 その他流失 }
 合計 508.782 "

7. 教育

四徳分校校舎 203.5坪 7,112 "
 " 教員住宅 35 " 1,050 "
 桑原分校 " 15 " 450 "
 " 敷地崩落 15 "
 内部施設 6,350 "
 合計 14,972 "

8. 厚生

四徳診療所 25.5 " 765 "
 内部施設 200 "
 合計 965 "

9. その他

流失家屋 } 96,000 "
 家財被害 }
 総合計 23億1136万6千円

(5) 四徳罹災者移住先

駒ヶ根市 49戸, 宮田村西大久保 14戸
 下伊那郡松川町 9戸, 伊那市 5戸
 飯島町 3戸, 中川村 2戸
 諏訪 1戸, 塩尻 1戸
 合計 84戸

(6) 四徳死亡・負傷者

死亡 { 小沢 笹夫 56 農 } 家号(北垣外)
 小沢 志なゑ 48 農 }
 小沢 ふよ 74 農 }
 小松 さよ子 39 農 " (西)
 小松 幸子 51 農 " (橋場)
 野呂 つたゑ 44 " (北垣外同居人)
 湯沢 宣一 32 農 " (南)
 負 { 小松 一美 46 重傷
 小松 磯男 61 "

傷 宮下 洵
小松 安男

(全戸集団移住四徳)による。

遭難者の方々、殊に死亡された方々7人同時に亡くなった所は、今見ると全く平凡な扇状地台地で本流の水害は絶対ない所であるが、台地の後ろの急峻な山が崩れ鉄砲水になって一挙に押しつぶされた。遭難者は何れも本流沿いの家でなく皆支流添いの人々である。本流沿いの家では流される前に殆んど避難してしまっていたのにまさかと思われる小川に大被害を出している。

これら死亡された水害のぎせいになった人々の霊に対して冥目合掌し、御冥福を祈りする次第である。

助かった人々たちは天井のない所にいた人たちに多かったし、女の人々が多くやられているのはその動作の故かも知れない。

(7) 遭難者の記録抄

四徳鉱泉罹災記

6月27日、前夜来の雨は朝になってもその勢は衰えなかった。しかしこの位の雨はそれ程めずらしい降り方でもなかったので未曾有といわれる程の大災害が間もなく私共を襲うとはつゆ知らなかった。この日2時頃私は用事があって川向うの新屋敷へ出かけた。午後4時少し前であったろうか、突然半の入に大きな山崩れが起った。つづいて東側の畜場入が崩れ出し、湯ノ沢まで流れ出した。この異変に新屋敷の人誰も誰もかもが1瞬色を失ったよう皆外へ飛び出して見た。

私も家が心配になったので、皆が止めるのを振り切って出かけたが、この頃はもう四徳川の川幅は何時もの23倍に拡がり、土砂や立木などが流れて来て橋を次々と押し流していた。私はようやく下の橋をまわって渡ることが出来たが、水をかぶったこの橋も私が渡ると同時に濁流にのみ込まれてしまった。中村の方ではものすごい濁流で田畑が流され、家も危険となり、どこかへ避難をはじめていた。

小さな川も水かさが増して溢れ出し、道も川になってものすごく流れていた。ようやく家(鉱泉)へ帰った私は直ぐに仕度をして床下をえぐられて危険になった「丸美屋」へかけつけて避難の合図をした。この時、直ぐ近くの「辻平屋」へ山崩れが襲って来た。「逃げろ」と言うので私は家へ飛び帰った。外はまだ明るかったが、この分では今夜はゆっくり御飯もたべてもいられないだろうというのでローソクを立てて夕御飯をたべたが、何か空恐ろしい気がして食事もよくのどを通らなかった。幸なことに今夜は泊り客が1人もいない。この頃雨は一層強くなり雷も鳴り出し、また各地で山崩れがはじまっていた。すでに白壁のはげかけた「中屋」も濁流におし流されはじめたのが見られた。

父はこんな晩に風呂へゆっくり入るのもよいものだななどといって一風呂浴びて汗を流し替えていたが、夕食後は部屋へ入って横になった。私も何か知ら怖かったので自分の部屋へ帰らずに父と一しょにいた。母は一人心配気に茶の間でローソクを立てて起きていた。

有線放送はすでに4時半頃には切れていた。

電燈線も故障を起したらしく電気もつかない、もちろんテレビは見えないしラジオも聞えないので、他の様子が全くわからない。心細い思いをしながら激しく降る雨の音と雷鳴と、山崩れの音に聞き耳を立てているより他なかった。そのうちに起き出した父がお宮へ避難した人達がえらい大きな焚火をしているよというので起き出してよく見ると、そこはお宮ではなくて、実は北垣外湯沢さんが雨の中で燃えさかっているところであった。

北垣外付近の地形は山崩れのためにすっかり変ってみえたのである。火は大きく燃え上っているのに誰1人として人影が見えない。知っていても雨と水と絶えず起る山崩れのために助けに行けないのである。この時頭の上の掛時計をみると午前1時を指していた。私の時計は3時半で止っていた。ふと庭先を見ると真黒いものが見える。なんだろう?熊でも出て来たのだろうか。幾らか動くように見える。驚いて懐中電燈で照してみると庭に大きな穴がポッカリ口をあけていたのである。それがまただんだん大きくなりそうである。大変だ、後から山崩れが起ると家もろ共にこの穴の中に飲み込まれてしまうだろう。そうなると思わぬ助かりようがない。父と母は直ぐに外へ飛び出して、昨日買ったばかりの山と積み上げられた薪をその穴めがけて投げ込みはじめた。雨は相変わらず小やみなく降りしきる。私は茶の間で怖ろしさに身震いが止まらない。それでも身仕度をして靴下をはいていると、突然母がバット飛び込んで来た。途端に私の坐っている所から見えるげんかんの両側から壁を突き破ってタンスが込んで来た。あと思った瞬間目の前に父の顔がチラッと見えたが、次の瞬間にはどこへ行ったか見えなかった。母は直ぐに裏庭へ飛び出した。私もつづいてあとを追った。家の両側の山が抜けて来たのである。2人は声を限りに父を呼びつけたが、かげもかたちも見えない。懸命にさがしている西側にあった木小屋が土砂で押しつぶされており、その中からかすかに声らしいものが聞える。二人は一生懸命におしつぶされた木小屋を持ち上げると、中から父の姿が見え、声にならない声で呼んでいた。顔に怪我を受けていたのである。

どうしてあのつぶれた木小屋の中から父を助け出すことができたか今もってわからない。あの時、両親とも外にいたのであるが、何で母だけが家の中へ飛び込んで来たのかそれもわからない。父はあっという瞬間に木小屋の中へ投げ込まれ土砂の中に埋まり、その上へ木小屋

が押しつぶされたのである。数日後、その木小屋を若い人達数人で持ち上げてみたがビクともしなかった。あの時どこからそんな力が出て来たのか今でも不思議である。不思議と言えば私の坐っている両側からタンスが飛び出して来るのが私にはよく見えたことであり、もう一つ父の顔が瞬間的ではあるが見えたことである。錯覚でなくてこの目で確かに私は見たのである。母はその時、足に大きな怪我をしてあとで医者に見てもらおうと、このきずだと5針ぐらいはぬわなくてはといわれたが、きずがふやけているため、きりなおしをしなくてはならないといわれ、とうとうぬわずになおしたが末だに足を引ずっている。

家の中は危いというので怪我をした父をつれて裏山へ避難することにした。頭と顔に大きな負傷をした父を風呂場で手当をしたが、出血は激しく顔色は青黒くなり見るも無惨である。とりあえず毛布を3枚もって裏山へ登ることにした。不思議なことに電燈はついていないし、真暗闇であるのに私にはこれまでのことがよく見えていた。しかし途中まで行くと真暗になり何も見えなくなった。

道らしい道もない急な山を父をつれて登るのは大変であった。押したり引いたりすべったりしてようやく松の大木の下に毛布をひいてその上に父を寝かすことが出来た。出血は依然止まりそうもない。顔色は益々悪くなりそれに時々けいれんさえ起る。私達はもう駄目かと観念した程であった。

こうして私達は手のほどこしようもない父の傍で夜の明けるのを待った。雷鳴と山崩れの音は狭い谷間に反響して益々もの凄。雨はさらに激しく一向に止みそうもない。今夜の雨は痛いねなどと話し合う程であった。山鳴りがすると、あちこち山々の中を電灯や提灯の火が飛ぶように左右に動く、多分家を流されたり壊されたりした人々が山へ避難する火であろう。

何時の間にか履いていた靴も靴下もない。皆はだしである。着ているものも下着まですっかり濡れ通ってしまった。そのうちに疲れと寒さのために匪魔が襲って来る。しっかりしなくてはと思うのであるが、何時の間にかすうっと気が遠くなり何処かへもって行かれるような錯覚に陥る。こらえるのが容易でなかった。後略

小松礼子記(伊那路災害特集号より)

(8) 自衛隊の活動

6月29日新潟県高田市の自衛隊第2普通科連隊第5中隊中隊長さん水野洗第6中隊中隊長さん関政吉以下49名の人々が駒ヶ根市中沢方面より仮設道路の開鑿をはじめ。折草峠へ向う道路で中沢との連絡路を通ずるのである。区長外5名案内にゆく。決死的作業に驚く、架橋11カ所。30日午前7時寺村の死者小沢笹夫氏外行方不

明者の発掘に当り27名にて是に当り4人を掘り出す。この時午後3時であった。悪臭鼻を打つ、余り臭いので酒少量を出す。小松さよ子さん発見の付近を湯沢宜一氏を捜して、流下地籍を発掘したが手がかりなし、止むを得ず中止、流失せるやもしれず、この案内は関係者として小松正美農協常務、外正副区長、警防団関係者が当る。

架橋は仮設されたが破損頻繁にして実際に役に立たない点多々残念。自衛隊の残余者によって農協より下の仮設道路を作る。架橋7カ所、この時自衛隊の持っていた手動無線にて自衛隊と本隊との連絡をしたので、借りて使。まことに都合よし。

7月1日道路仮設、架橋、死者の発掘を続行する土砂深いところは1米以上を掘り下げる。発掘されたのは、小沢笹夫さんの妻志なゑさんは夫に添っていた。笹夫さんは奥の部屋の桁の下敷となり顔が2尺も長くなっている。母ふゆさんは庭へ押出され土の下になっていた。同居人の野呂つたゑさんは家の下の川端まで押し出されて土の下になっていた。

7月2日自衛隊大隊長さん二等陸佐大塚泰一ヘリコプターにて来所、全部の打合せをなし本日中に全四徳の仮道路を完成すべしとの事。道路の手直し及び中沢桃平までそのため四徳下村田打タヲ(地名)より仮設道路の完成を見る深謝する。一等陸曹正副区長小松で慰労酒の件を白米18包カンパン32包急救薬品6包

重傷者小松一美、小松磯男を松川町中村病院へ入院のためヘリにて運搬。このヘリコプターに涙と共に感謝する。

7月1日 朝日ヘリ農協上米1包医薬品4包日用品52個。

7月2日 自衛隊大型ヘリ大島町より午前9時30分より往復7回カンパン31、地下タビ20足医薬品1、学用品1味噌16樽郵便物(初めて郵便物来る)トランヂスターラジオ1個各耕地の惣代により各戸に配布する涙が出た。

7月5日自衛隊ヘリ大型午前9時30分農協支所上飛来米3.180kg 医薬品450kg

7月6日 同機米2.25kg、医療品2.02kg、小松磯男氏の処へ布団と日用品を運搬してくれる。

応諾せず、3名にて宿舎まで持ってゆき一緒に労をねぎらう、活動振りに驚異の目を見張る。規律よし、区民の信頼と親近感を深む。

7月6日 自衛隊再度来訪。本日より前仮設の損傷ヶ所及び危険ヶ所の復旧に又護岸工事(仮)を作業する。

7月7日 通学路の危険カ所復旧、危険家屋に対する必要なる作業。

7月8日 前日に同じ、9日、小川内外棧道の仮設等案内6名(当時中川村農協常務小松正美氏のメモ帳より)

ヘリコプターによる救助

6月30日 午後2時30分大草の中川東中学校より発進四徳農協下へ（ヘリポート）着朝日新聞ヘリコプター小型1機衣類5包、味噌、醤油25kg、野菜45kg、日用品345kg

7月7日 大型機、農協支所上、白米30kg、医療品1包、学用品（マンガ絵本）ヘリポートの整地命令来る。即ち人足13人にて整地する。

7月8日 自衛隊大型機H19号ヘリポート標識フキ流し立替米1,092kg 乳牛等の飼糧120kg 野菜1,000kg 玉葱、キャベツ外、援護物資3包機械、水コシキ（水を清浄する）重量20貫位あり

7月9日 自衛隊大型ヘリ農協支所上白米1220kg 帰りに生菌を搬送依頼

7月10日 自衛隊機大型ヘリポート 農協上援護物資29、帰りに生菌を依頼駒ヶ根市赤穂、竜水社へ、更に赤穂高校庭へ

7月6日 新日本航空小型伊那市より農協上電気KKより5名来所（小松正美氏のメモ帳より）

(9) 集団移住特別措置法に基づく四徳の動向

災害より各自他市町村へ移住、これがため四徳区共有物を処理、平等配分すべしと総会に於て決議された。

売却処理された物件

山林、竜ヶ嶮角石笹ノ尾岩倉白カバ黒尾小黒尾峠ノ沢源平氏大笹平蔵東蔵本泥久保東平鈴馬ステ場つみみや沢なぎ沢旧林他宝蔵りあん跡他外、これを国有又は個人に売却処理す。委員7名（略）

記念碑建立 上記売却代30万円にて災害移住記念碑を建立38年10月8日建立除幕式をなす。高さ2.5米幅1.2米仙台石、四徳神社境内に建立、表面へ西沢知事の揮毫裏面碑文は戸枝村長記文移住世帯氏名連記す。

残置共有地四徳神社境内山林、75社山之神跡山林、湯之権現山林、剣滝不動山林、委員5名、

福泉寺処理 全檀徒移住財産処理 一部住職に残分記念碑建立費に。山林平鈴小川内洞、浅間山、本久保、田城宝蔵1棟他什物売却進呈、廃寺、住職加藤大禅一家南田島へ移住記念碑建立高さ2.2米幅1米仙台石表面へ曹洞宗管長揮毫、裏面常泉寺住職泰寿氏の碑文及び全檀徒の氏名を刻す。

除幕式昭和38年11月26日福泉寺跡地へ建立

檀徒総代正副長3名略 委員4名

農協支所 37年3月25日を以て職員の家族は全部移住補充不可能となり役員会の議決により役員に於て業務をなすこととし、常務小松正美氏1人にて処理する。

閉鎖37年11月21日 上記分凡処理完了にともない南向村産業組合として発足以来、四徳支所として区民の

経済、文化の中心として幾変遷の50年の歴史に終りを遂げた。

災害移住記念碑（碑文）四徳神社境内建立

昭和36年6月27日 豪雨大災害に遭い集団移住特別措置法に基き国県が耕地宅地を一括買上げ四徳部落は400年余の歴史に名残りを告げ全戸他へ移住せり時に由緒ある左記のものを共有地として存置す。

四徳神社境内及び山林

75社山の神跡山林

湯の権現境内及び山林

剣滝不動尊境内及び山林

右管理者5名

中川村長 戸技馨撰

4. 大鹿村の災害

昭和36年6月24日から29日にかけての南信地方を襲った梅雨前線による集中豪雨は、往年正徳5年のいわゆるひつじ満水以来の大洪水で郡下の各村に涉って甚大の災害をもたらした、幾多の貴い人命と、家屋、耕地その他公共施設に名状できない莫大なる被害を与えた。就中大鹿村はその災害の最も大なるものでありました。今次の豪雨は上下伊那全郡に涉っているとは申すもののその雨量も恵那山から風越山に、そして伊那山脈へかけて激しかった事は当時の各地の雨量計のデータが示す通りであります。災害激甚地の大鹿にしましても、毎度の豪雨の場合雨量の多い赤石山脈の主脈方面は比較的降雨量が少なかったのは今回の集中豪雨の特異の現象でありました。たとえば大鹿でも大河原方面の小渋川の上流や支流青木川上流は雨量が少なく村の中心地落合の村役場付近は別表の如く521ミリ（積算）であるのに赤石岳近くの釜沢部落付近では300ミリ前後であり赤石山脈の山陵は比較的平穏であったと当時山から下山して来た登山者の話でありました。若しもこの赤石岳方面が豪雨であったならば、その被害は一層激甚を極めたろうと思われまます。さて今回の豪雨で大鹿村の災害は郡下でも最も激甚であった事は別表被害状況調書の示す如くであります。その被害状況は、鹿塩地区と大河原地区とは全く災害様相が異なっております。前述のように赤石岳方面の雨量が少なかったので大河原方面では29日に起った大西山の山崩壊が無かったならばその被害は鹿塩地区に比して極めて軽かったろうと思われまます。そして今次の災害のもう一つの特徴は地質によって非常に軽重のあった事で、郡下全般を概観しても花崗岩地帯（松川町生田地区中川村南向地区）が激甚であった如く、大鹿村でも同じく殊に鹿塩片麻岩（大鹿片麻岩）地帯が激しく大西山の大崩壊がその最たるものでした。大鹿村では別表の



大西山の崩壊

| | | | |
|----------|-------------------------|-------|-----------------------|
| 崩落土砂堆積面積 | 200,000m ² | " 平均厚 | 15 " |
| " 最高厚 | 48m | " 面積 | 180,000m ² |
| " 最大幅 | 600 " | " 土砂量 | 2,800,000 " |
| " 押出幅 | 500 " | " 角度 | 43度 |
| " 土砂量 | 3,120,000m ³ | 家屋流失 | 39戸, 倒壊 8戸 |
| " 周長 | 1,800m | 死者 | 31名, 行方不明 11名 |
| 崩壊斜長 | 450 " | | |

降雨量が示す如く、24日から降り続いた梅雨の26日朝降雨がはげしくなって27日夜に至って雷鳴と共に猛烈に降りそそいで28日に涉り各地に山腹の崩落続出し、各小沢も増水し、遂に未曾有の大災害となりました。そしてその結果別表(2)の如き数字の物語る被害を被ったものであります。大鹿では正徳5年のいわゆる「ひつじ満水」については記録もなく、古老からの伝承もないので判りませんが、明治32年の大洪水で前茶臼山の一角が大崩壊し、小渋川をせき止めたために小渋川が倒壊流失し、浴客10余名が死亡した惨事以来未曾有の大惨事でありました。

別表1 大鹿村葉合

| 降 雨 量 | | |
|----------|------|---------|
| 測定月日時 | 日雨量 | 摘要 |
| 6月26日前9時 | 53mm | 日計 69mm |
| " 12 | 16 | |
| 27 前9 | 30 | 日計 235 |
| " 後1 | 24 | |
| " 前11 | 181 | |
| 28 後12 | 152 | |
| 29 後12 | 36 | |
| 30 前12 | 10 | |
| 7月1日 3 | 19 | |
| 計 | 521 | |

別表2 災害状況

| 種 別 | 被害見込額単位千円 |
|--------|-----------|
| 1 公共土木 | 1,404,200 |

| | |
|---------|-----------|
| 2 林 道 | 100,000 |
| 3 山林 荒廃 | 500,000 |
| 4 農 地 | 332,500 |
| 5 農業用施設 | 56,000 |
| 6 公共施設 | 71,920 |
| そ の 他 | 30,000 |
| 7 住 宅 | |
| 流 失 | 53戸 |
| 全 壊 | 68戸 |
| 半 壊 | 47戸 |
| 床上浸水 | 52 |
| 床下浸水 | 297 |
| 8 人 命 | |
| 死 者 | 35人 |
| 行 方 不 明 | 20人 |
| 重 傷 | 42 |
| 軽 傷 | 600 |
| 合 計 | 2,685,120 |

災 害 状 況

1. 鹿塩地区 鹿塩地区では村の中心落合地籍から延々10余軒分杭峠に至る鹿塩川流域一帯が人家も耕地も全滅と言っても過言でない程激甚を極めた惨状である。殊に北川北入両部は明治以後の開拓地とも言べき村でも比較的新らしく開かれた部落で、営々として開墾し、努力を傾けて今日に至った苦心の結果も一瞬に流失埋没したのでありますから悲惨の極みであります。同じ鹿塩地区の鹿塩地区の河川の中では塩川流域は前記のように今回の豪雨が赤石山脈方面では雨量が少なかったため塩川上流は被害が少なく、下流の塩湯付近で相当の被害が

あったのみであるのはせめてもの幸でありました。

鹿塩川流域の被害に至っては実に凄絶を極めたものでその詳細は到底与えられた紙数で書きつくせるものではありません。24日から降り続いた雨は26日に至って雨脚しげしいわゆる車軸を流す如くで至る処の山腹に山崩れが出来、大小の沢水は氾濫しきったので鹿塩川の水量は刻々と増し、夥しい土砂が押し出して来たので、警防団や村民の必死の努力も何の甲斐もなくただ悪魔の猛威の前に茫然自失手をこまねくの外ありませんでした。就中梅の木沢の崩壊では駒瀬幸雄氏荒谷新次郎氏両家を襲って死者6名を出し、寺沢では水防作業中の松尾英一氏外2名の犠牲者を出した外に黒川、大萱沢、小花沢等々の沢が山崩れの土砂を押し出して凄絶を極めましたので鹿塩川流域は全面河原となり畳々たる巨石が横たわっております。鹿塩川流域がこの実態となったので川添いの県道は名実共に寸断されて部落間の交通はもちろん不可能でありまして奥地との連絡はつかず、殊に北川地区では部落の人達はここに10人かここに20人と集まって飲まず食わず、罹災後の3日間を過したと言う悲惨極まるものでした。

尚鹿塩市場から北川に通っている伊那バスが27日午後0時20分発で保育園児童を乗せて北川へ行った帰路沢々の氾濫で立往生を余儀なくされ運転手と車掌は2日間このバスを見守ったが遂に車輛が濁流に吞まれてあえない最後を見届けて、村人の止めるのも聞かず土砂流木の激しく流れ来る濁流を越して報告のため帰社したと言う事なども後世に残る逸話でありましょう。

(2) 大河原地区 大河原地区の災害は、大西山の大崩落による大災禍を除いては鹿塩方面に比して少ないと前に書きましたが、しばしば書いた如く今回の集中豪雨が赤石の主脈に少なかったので小渋本流の水量が比較的低かったので、中小学校を始め大河原市場の主なる商店街が難を免れたのは何よりでした。然し青木川流域は被害があり、大西山にある針の木沢、上野沢の氾濫で人家3戸流失埋歿27日未明に到って平常水の殆んどない上唐沢の押し出しで1時青木川を堰き止め住宅5戸を流失しましたが、幸に人命には異状ありませんでした。

未曾有の大災禍をもたらした大西山の大崩落のあったのは雨も止んで、人々のほっとした29日朝9時20分頃でした。現場は従来から大河原に入った人達に直ぐ気をつく風景であるが、狭い落合付近の溪谷を来て、大河原に入るとたんに視界の広がった広い水田の西方に聳よる大西山の下部に広く物凄い程の崩壊地が見える。俗に「平ナギ」と呼ばれ大岩壁が見えますが、今次大崩壊したのはこの地点で高さ45米、幅500米、厚さ15米の岩壁が崩れ落ちたものであります。この崩壊の一瞬を目撃した人々の話を総合しますと28日にも朝来時々平ナギ

の上部に小さい崩落があり、大きき石の碎片が落下していたがまさかこんな大崩落の前徴とは夢にも思わなかった。ただ気になったのは集中豪雨で山の上方が滝の如くに流れ来る水が、ナギの上方で地中にしみて下まで流れて来なかった事で、今にして思えばその当時すでに大亀裂が出来ており、上方から流れ落ち雨水は皆その亀裂の中に入ったものであろう。崩落の瞬間は、何かゴーウと言うような音響が大西山の方ですので見ると平ナギの上方にパッキリと大亀裂が口を開いているのに驚いて「あれー」と言った瞬間に亀裂の上部が崩れ落ちると思うと亀裂の下方が45度位の傾斜であったのがむくむくと直立し、それに続いて大音響と共に東方に向かって倒れて来た。倒れた岩の上へ又上方から崩落が続いた。と言うのが実状のようであります。大崩落は非常な勢いであったので、その圧力によって起った風でありましょう。強い風が起きて水を湛えている35町歩の田の水を吹き飛ばしたのでたまらない。強風と泥水は県道添いにあった建設省の出張所を始め40余戸の人家をあっという間に吹き飛ばして東北方の山裾に押し込んだのでしたものである。その勢いの凄さまじかった事は建設省出張所の構内に待避していたブルドーザーを始め5、6台の大形トラックが吹き飛ばされて数町先きまでも押し流されてしまった事で判る。斯くして大河原の中心地帯の約半ばは壊滅し、42名の尊い人命と家屋は、大鹿村の誇りでもあった穀倉地帯と共に潰れ去ったのである。幸に生き残った人々は泥土の中で親は子を捜し子や妻は親や夫を求めて阿鼻叫喚実に八大地獄を現世に観せる如き凄惨たる場面は至る処に見られたのである。落下した岩石は、高さ48米、幅500米、長さ600米、容量312万立方米で周囲1.8kmと言う小山を残したので小渋川は青木川と共に1時堰き止められたので数時間後には対岸の青木川添いの水田も新築数カ月を経たばかりの小学校も中学校も壊滅するのではないかと案じられたが、幸に両河川の水は出来た小山の裾を廻って流出しはじめたので助かった。

以上が大鹿の災害の概況であります。災害後10余日他村との連絡がとれず、電信電話はもちろんの事、電灯もなく、主要食糧は漸くヘリコプターによって運ばれると言う災害対策等につき詳細を割愛し、今次の集中豪雨の犠牲者の冥福を祈って筆を置きます。

松下胤実 大鹿村青木 伊那1961年10月号より

5. 濁流——(36.6梅雨前線豪雨記録文集)——から

中沢の幸福のすべてを奪い去ったかに思われた濁流の当時のようすを後々まで残すとともに、まだ遺体のみつからない双山袈裟雄君の霊が、おかあさんや御家族の霊とともに安らかに眠ることを祈念しつつ、災害以来、中沢のために多大の激励慰問をしていただいた各方面の皆様のお厚意に、わずかながらも報恩のしるしとなるようにと忙しい毎日の中に全校児童の作文をまとめて文集とした——児童作文は災害直後に生涯の思い出として、各人がつづったものを集録した——と、36年8月に中沢小学校から刊行された文集「濁流」の後記に記されている。

この文集から2、3抜粋して掲載させていただきます。

○ ○

死線をこえて

東1 ふたつ山みやこ

みやこのうちへ

「おんどりや」のどこから

水がへってきた

ようさ

(夜)

みやこたちがねるとき

水が うんと

にわのところへはいつてきた。

とおりまでついてきたもんで

(土間)

とうちやが

「にげる」ちゅった

(言)

おとうちやと おかあちやは

うちぐらへみにいった。

おじいちやが

「くらがいい」とおもったもんで

みやこたちも みんな くらへ へえった。

そのとき

水が うんと 川のように

きたもんで

くらは

つぶれちゃった。

みやこは

土や、すなや いろいろ いっぺえ のんだ。

うりやぶの とこまで

ながされて いった。

おとうちやが

「しんじゃあ たまらん」と ゆった。

ゆずらの きのところに

おとうちやは

おちたもんで

うまく すわれた。

それで

でんきんばしらに つかまった。

「ゆき」が ちょこんと

くらの まんなかに たっていた。

みやこは

おじいちやと

おばあちやの

あいさへ へえって

くるしかった。

みやこの ところへ

木や ざいもくや ふとん やら

いっぺえ きたもんで

おとうちやが

ざいもくや いろいろ どかして

だしてくれた。

そのとき

おじいちやや

おばあちやは

しんどった。

7月19日、放課後、聞きとったもの。美也子さんの頭の中に残っていること、担任が特に加筆訂正をしてない。九死に一生を得たものことばは、余人が手を入れるものでない。(宮下清)

うちがながれた

1 西 かすがよしき

うちが ながれました。はしもとやの うちも ながれました。

あらいで みとったら ぼくの うちが ながれたよ。こまりますよ。

ばすが ながれました。こまったね。いやだったね。ふくが ながれて こまりました。ふくや いろいろながれて こまりました。

蔵もろとも跡かたもなくおし流された好希君の家である。水がひけてから、「ぼくの汽車だけでも落ちていないかなあ。」と好希君がさがしに行ったら、さびた輪が1つぽつんと砂にうずもれていたという。(小野)

お礼のことば

6 東 木下 三津子

わたしたちが、想像もしていなかった、あのおそろしいあくまのような大水の日から、早くも2週間たちました。自衛隊のみなさまのおかげで、家や倉を流されたり、田畑を流されたりして、大きな被害をうけたお友だちも、7月7日から、みんなそろって元気で学校へ来て楽しく勉強ができるようになってみんなほんとうにうれしく、ありがたく思います。

6月27日にふり始めた大雨は、ものすごい勢でふり続いて、とうとう私たちでは、手のつけようもないほどの大水になり、今まで一家そろって楽しく暮してきた家を流し、また、いままで苦勞して作った水田や畑をおし流して、またたくまに大きなつめあとを残していきました。こんなに被害をうけた中沢を、雨の降る日も、太陽のかんかん照りつける日も、一生懸命働いて、道を作ったり、橋をかけたりして下さってありがとうございます。

遠くのお友だちもしばらく休んでいて、いつ学校へこられるかみんな心配していましたが、こんなに早くそろって勉強ができたことは、本当に皆様のおかげです。

自衛隊のヘリコプターが、中学校の庭へおいたり、とび立ったりするところを私たちは見学に行きましたが、こんなところを見たのは初めてで大変勉強になりました。

また、橋や道を作っている所や、家も何もかもみんな流してしまったかわいそうな人々に、食料を運んでやるヘリコプターなど、何度も見てきました。こんな所を見てきた私たちは、ほんとうにありがたく思いました。

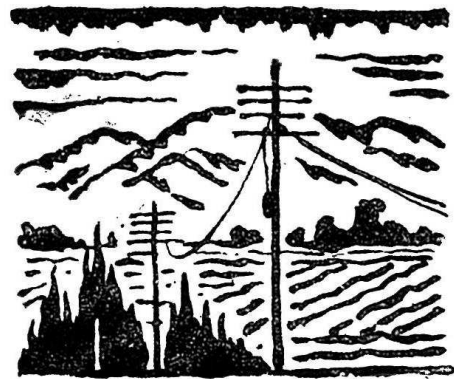
中沢は大正13年のときも大水で、おそろしく大きな被害だったそうですが、こんなに被害をうけたのは、初めてだそうです。私たちは、もう2度とこんなにならないようにしたいものだと思います。

雨が降っているが、つめたい川の中にはいって、あせ水たらしめている自衛隊の皆様を初めて見た私たちは、みなさまの苦勞が初めてわかりました。大変ありがとうございました。その上、校長先生にお聞きすれば、私たちのりさいしたお友だちに、たくさんのお見まいをくださったそうですか、働いてくださった上にこんなにしてくださるお友だちもまた新しい元気が出て、勉強ができることを思い、重ねてあつくお礼申しあげます。これからも自衛隊のみなさま、毎日毎日苦しいことや、悲しいことがあると思いますが、不幸な人々のために、また国のためにくじけずにしっかりと、このりっぱな仕事をいつまでも続けてください。長い間いろいろとありがとうございました。これから長い道中にたたれていくわけですが、体を大切にして、いつまでも国のためになる、りっぱなお働きをしてください。さようなら

昭和36年7月9日

中沢小学校代表 木下美津子

10日間、早朝から夜遅くまで危険をおかして復旧に努力して下さった自衛隊高田部隊が帰隊される前日感謝式に小学生代表として読んだもの。(「濁流」から)



第Ⅲ編 復興

1. 36.6 梅雨前線豪雨耕地災害復旧工事について

昭和36年梅雨前線豪雨により被災した農地は、51団地50ヘクタールに及び、これら農地に付随せる農業用施設の被害は、橋梁、道路、溜池、頭首工、水路等170カ所にして、被害総額312,268,000円という未曾有の大災害を蒙った。

さいわい国の災害救助法にもとづく高率補助の適用を受け、県の耕地災害復旧援助をうけるとともに、市単独の復旧費並びに関連事業費の予算処置等が適切になされたため、被害当時には予想もしなかったほど復旧工事が進み、被災後わずか3カ年にしてすべての復旧工事を完全に竣工し得たことは、関係者一同お互に、感無量のものがあると思います。

ときあたかも市制10周年記念行事としての復興祭にあたって、過去3カ年の実績を成し得たことは、県職員の適切なる指導および、県土地改良事業団体連合会技術職員の献身的な応援と、これら復旧工事に参加した請負建設業者の誠意ならびに地元関係各位の絶大なるご協力に深く感謝するものであります。

最後にこれら巨額の費用をかけて、復興成った諸施設の維持管理に意を用いることはもちろんのこと、備えあればうれいなしの諺のごとく、今後とも一朝有事の際にそなえて、技術主管課としての研鑽努力を借しまないことを誓い、再びかかる惨事の襲来しないことを念じてやまないものであります。(農林課)

昭和36年梅雨前線豪雨耕地災害

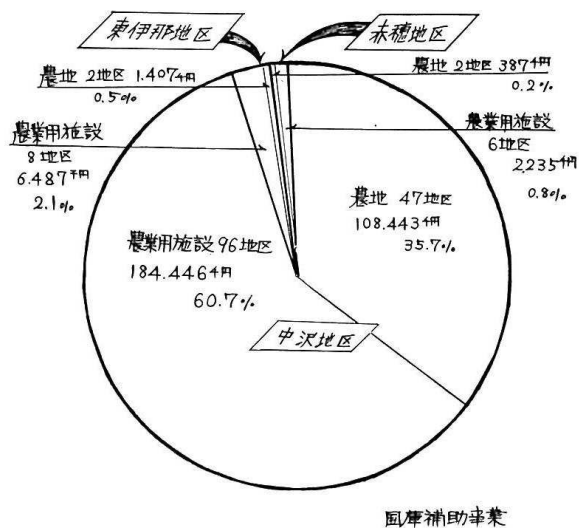
(1) 市全体被害額

| | | |
|-------|-----------|---------|
| 農地 | 110,237千円 | (51地区) |
| 農業用施設 | 193,168 | (110地区) |
| 計 | 303,405 | (161地区) |

補助率明細

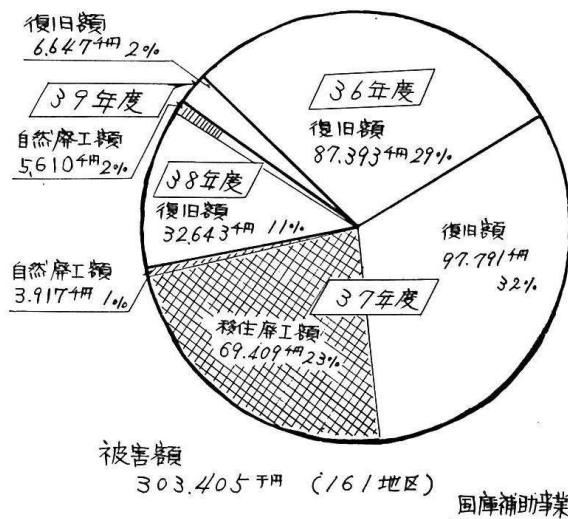
| | 農地 | 施設 |
|-------|-------|-------|
| 中沢地区 | 86.6% | 92.2% |
| 東伊那地区 | 50.0% | 65.0% |
| 赤穂地区 | 50.0% | 65.0% |

昭和36年梅雨前線豪雨災害被害額
地区別一覧表



国庫補助事業

昭和36年梅雨前線豪雨耕地災害復旧
事業復旧経過



国庫補助事業

(2) 被災工種別

| 農業用施設工種別 | 110地区の内 |
|----------|---------|
| 橋梁 | 9地区 |
| 農道 | 9地区 |
| 溜池 | 1地区 |
| 頭首工 | 6地区 |
| 水路 | 85地区 |

農地 51地区 49.21ha

このうち復旧された面積は、約68%にあたる33.55haで、残りの15.66ha(32%)は移住などにより廃工となった。

(3) 昭和36年起県単及び市単独耕地災害復旧事業
被災工種別一覧表 単独事業

82地区

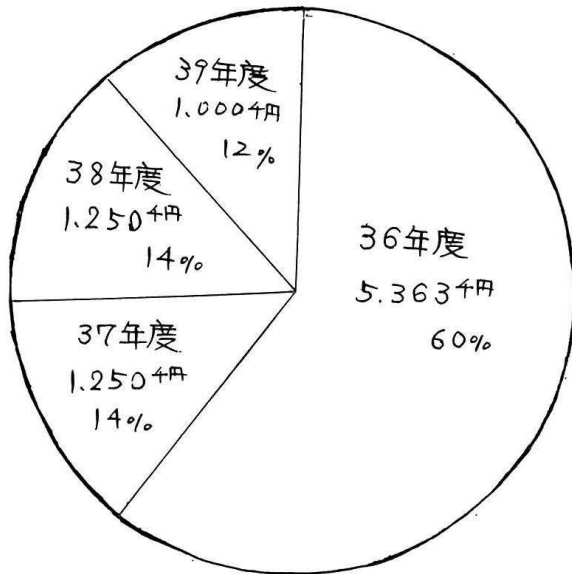
イ. 事業採択地区割合

| | | |
|---------|------|-----|
| 市単独関連災害 | 43地区 | 52% |
| 県単小災害 | 26地区 | 32% |
| 市単独小災害 | 13地区 | 16% |

イ. 工種別地区数

| | | | |
|----|------|-----|------|
| 農地 | 22地区 | 頭首工 | 6地区 |
| 橋梁 | 2地区 | 水路 | 44地区 |
| 農道 | 8地区 | | |

昭和36年起県単及び市単独耕地災害
復旧事業復旧経過



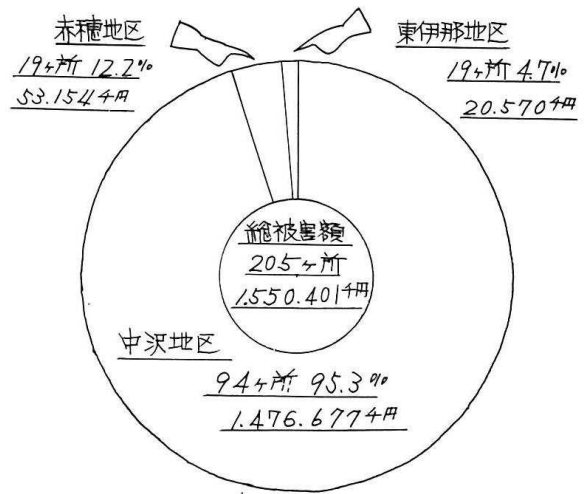
2. 36.6 梅雨前線豪雨公共土木施設災害復旧工事について

昭和36年の梅雨前線豪雨による公共土木施設の被害は、1時間降雨量40mmという集中豪雨に見舞われ、250年来といわれるほどの未曾有の大被害であった。

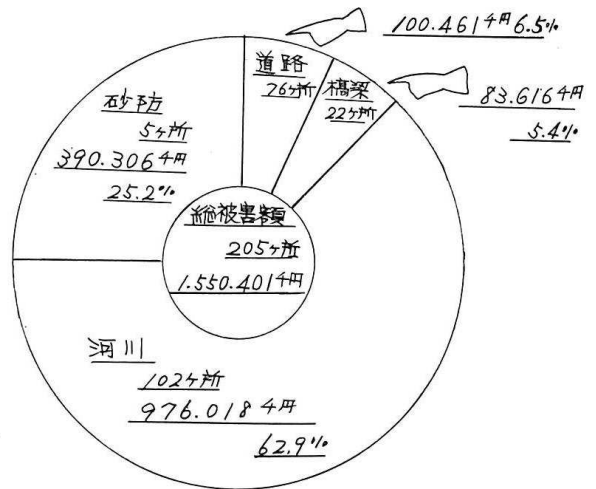
市内新宮川、百々目木川を中心に河川はもとより、道路の欠壊、橋梁の流失など200余箇所にもおよび、その被害額は実に15億余円に達しています。

被害直後この復旧工事に着手してより、着々と進められ、昭和39年度までにそのほとんどが復旧されました。(土木課)

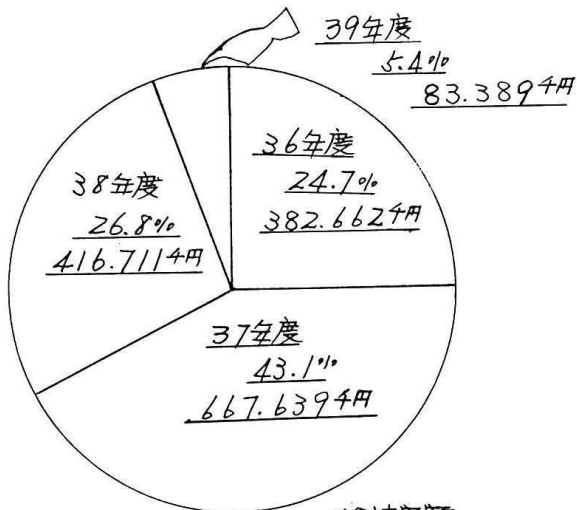
昭和36年6月災害被害額地区別一覧表



昭和36年6月梅雨前線豪雨災害被害
額工種別一覧表



昭和36年6月災害年度別工事進捗率一覧表



総被害額
1,550,401千円

被害箇所数
205ヶ所

国営治山事業

| 地区別 | 昭和37年度 | 昭和38年度 | 昭和39年度 |
|--------|-----------------|------------------|-----------------|
| 新宮川水系 | (7) 15,874千円 | (10) 17,287千円 | (6) 27,111千円 |
| 百々目木川線 | (19) 27,245 | 28,516 | (11) 39,704 |
| 計 | (26) 43,119 | 45,803 | (17) 66,815 |
| 合計 | 73カ所 | | 155,737千円 |

() 内カ所数を示す。

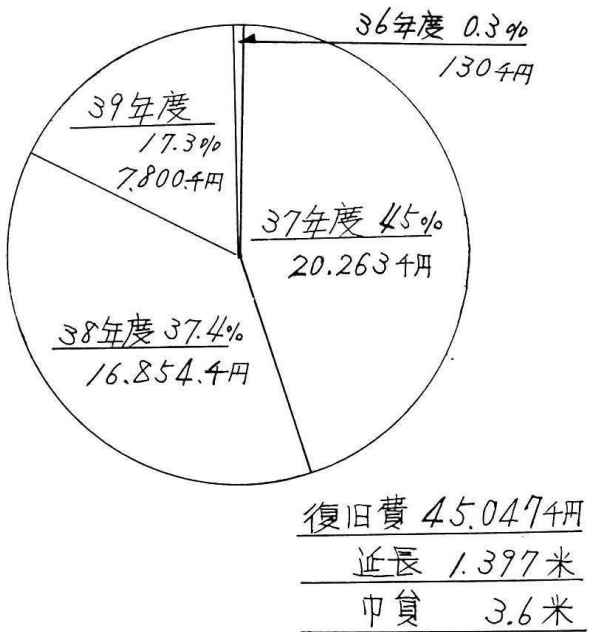
林道災害復旧工事及び国営治山事業概要

林道災害においては、中沢大松尾線、赤穂中田切川線の1路線、15カ所が切断、崩落などの被害をうけた。

延長1,397mとなり復旧金額45,047千円の莫大な費用を投じて復旧した。

治山事業においては、73カ所155,737千円を投じてもとの緑のやまと化しつつある。

林道災害復旧年度別進捗率



郷土災害年表

参考文献は各事項の末尾に記してありますが、下記文献名は略記号を使用してありますので参照してください。

| 記号 | 資料名 | 記号 | 資料名 |
|-------|---------|------|--------|
| (カミ) | 上伊那郡史 | (キン) | 近世郷土年表 |
| (ワブ) | 上穂赤須旧記録 | (キヨ) | 郷土年表 |
| (シモ) | 下村文書 | (アカ) | 赤須町文書 |
| (トンヤ) | 赤須町問屋文書 | | |

- 1533 天文2年5月20日 天竜川大洪水 伊那一帯田畑 人畜、家屋大被害 「妙法寺記」
- 1540 天文9年5月 天竜川大洪水 8月11日未曾有の大風雨 諏訪の鳥居吹倒
- 1545 天文142己 15丙年 兩年飢饉 世に己年の飢饉 (カミ)
- 1560 文禄3年8月10日 天竜川大洪水 下流地方殊に甚大
- 1596 慶長1年 此年浅間山噴火 時々地震
- 1604 慶長9年11月 浅間山噴火 (カミ)
- 1608 慶長13年 夏天竜川大洪水 (ワブ)
- 1609 慶長14年 己酉8月16日 大洪水 8月10日大風雨 (カミ)
- 1612 慶長17年5月 天竜川大洪水 箕輪郷の田中城及び城下町流失 (カミ)
- 1614 慶長19年8月 天竜川大洪水 10月25日 大地震 (ワブ)
- 1620 元和6年8月 洪水 (ワブ)
- 1622 元和8年8月11日 大洪水 近藤領上穂村の田畑高 4町2反7畝流失 (小林文書)
- 1624 寛永1年4月 天竜川始め支流各河川特に田島大水害一部高遠原へ上る (カミ)
- 1625 寛永2年5月1日 近江、美濃、伊勢、駿河三河、信濃、山城等大地震
- 1626 寛永3年 夏大旱魃 草木枯死、河魚干死 (キヨ)
- 1627 寛永4年 洪水 10月4日 大地震所々潰家屋あり (ワブ)
- 1628 寛永5年10月18日 浅間山噴火 (カミ)
- 1633 寛永10年1月 地震、諸国へ巡見使を派遣
- 1640 寛永17年 加州生れ小問物商四郎左衛門 天下御法度の切支丹の魔法をって奇怪な事を行なうこの秋大凶作 (中沢文書)
- 1641 寛永18年 昨秋大凶作大飢饉死者多し (キン)
- 1642 寛永19年年 去己年にまさる大凶作 諸国人畜餓死 松皮古蕨を食う (カミ)

- 1643 寛永20 前記中沢切支丹騒動の本人四郎左衛門山田河原に磔刑
- 1645 正保2年1月26日 浅間山噴火 5月木曾大火 (カミ)
- 1648 慶安1年5月 洪水
- 1649 慶安2年6月20日 大地震 7月 浅間山噴火 (カミ)
- 1650 慶安3年 天竜川大洪水 下平浸水 夏洪水地震 (ワブ)
- 1651 慶安4年3月 浅間山噴火 夏洪水 (ワブ)
- 1652 承応1年6月 天竜川大洪水 川路村被害甚大 (川路水防史)
- 1654 承応3年 洪水 高遠領民苛政に苦しみ領外へ遁去者3千人に及ぶ。3月1日 江戸大火 (明暦の大火) 今夏洪水。10月 浅間山噴火 (キヨ)
- 1660 万治3年4月19~27日まで 天竜川大洪水被害多し
- 1661 寛文1年3月 浅間山噴火 6月洪水
- 1662 寛文2年5月 京都以東地震 宮田宿大火
- 1670 寛文10年 夏洪水 米価暴騰大風大砂降る (噴火)
- 1674 延宝2年7月 天竜川洪水 太田切、田沢川切込む。凶作阿島方面米騒動 (カミ)
- 1675 延宝3年 近年稀な凶作 飢饉 (カミ)
- 1676 延宝4年7月 洪水、凶作春夏にかけ飢饉 (カミ)
- 1677 延宝5年 飢饉餓死者多し、乞食非人夥、飯田等お助け小屋を建つ (飯田世代記)
- 1680 延宝8年7月 洪水 天然痘流行 (カミ)
- 1683 天和3年3月 洪水 (松尾小史)
- 1684 貞享1年夏旱魃 飯田三大火事の1つ、池田町の又助火事 (ワブ)
- 1686 貞享3年 大凶作 松本藩内に中萱嘉助事件起る (ワブ)
- 1689 元禄2年5月 洪水 (ワブ)
- 1690 元禄3年12月6日 上穂、赤須両町大火過半数焼亡 (ワブ)
- 1691 元禄4年2月 田沢川切れ込み被害甚大、下平村共同河防林を立つ (戸枝文書)
- 1694 元禄7年8月 洪水 南下平流矢田高4石7斗余、畑高1升3合川欠永引 (シモ)
- 1696 元禄9年6月 夏真中雪降る。洪水、凶作酒造規制
- 1698 元禄11年5月 天竜川、太田切川大洪水 下平村へ切込み高5百石川欠 (シモ)
- 1699 元禄12年8月 大風雨、天竜川太田切川大満水下平村へ切れ込む (シモ)

- 1700 元禄13年 大凶作人々苦しむ(アカ)
- 1701 元禄14年8月 洪水 秋凶作, 飢民多餓死者出づ(アカ)
- 1702 元禄15年4~5月 頃諏訪に狼現れ, 被害多し
8月 洪水
- 1703 元禄16年10月 地震 11月 大地震伊那地方にも潰家屋あり(キン)
- 1704 元禄17年1月 浅間山噴火
- 1704 宝永1年6月 洪水 秋不作に付酒造3割減(アカ)
- 1705 宝永2年6月 洪水 7月 洪水田畑流失に付き公役検分に来る。(アカ)
- 1707 宝永4年6月 洪水 10月4日 大地震 11月23日 富士山噴火灰伊那に降る(飯田世代記)
- 1711 正徳1年2月 浅間山噴火 9月 洪水(ワブ)
- 1713 正徳3年9月13日 雪降る
- 1714 正徳4年3月15日 地震, 飯田松川満水(ワブ)
- 1715 正徳5年6月17日 17日より24日まで大雨降, 各河川共洪水 田畑家屋橋流失, 流死人9人 山崩れ, 石川出現安楽寺流失。8月1日 大風雨 今秋5穀不作 米価高騰(ひつじ満水)(シモ)
- 1716 享保1年8月 洪水 秋早魃 先年流失した安楽寺を上穂西裏へ移築
- 1717 享保2年5月5月~7月 早魃 7月23日 大地震 8月19日 浅間山噴火(カミ)
- 1718 享保3年7月26日 大地震遠山地方被害多し, 9月3日 浅間山噴火(キヨ)
- 1719 享保4年8月15日 大洪水 千曲川筋大被害 世人亥年の洪水と言う(キヨ)
- 1720 享保5年5月1日 浅間山噴火 天竜川洪水
8月 洪水(ワブ)
- 1721 享保6年7月20日 洪水 南下平流失田高9石6斗1升 畑高1斗2升(シモ)
- 1722 享保7年6~9月 凶作世中騒然(カミ)
- 1723 享保8年1月1日 浅間山噴火 8月 洪水(ワブ)
- 1724 享保9年8月6日 大風雨被害甚大(キヨ)
- 1728 享保13年8月4~13日 降雨近代稀な大凶作
9月 又洪水 10月 浅間山噴火(キヨ)
- 1729 享保14年 昨年来の不作につき飯島代官手代飢人調査に来る。(アカ)
- 1731 享保16年4月5, 8, 9日 洪水, 殊に8月大洪水, 「亥の川欠」下平大災害
- 1732 享保17年 麦大違作 6月 霖雨冷氣 害虫発生 稲作不作
- 1733 享保18年7月 洪水大凶作 飢死者続出 17年前ひつじの満水より被害大(ワブ)
- 1734 享保19年8月 洪水, 凶作 9月 赤須5村より弁納地を差上地に出願
- 1736 元文1年11月9日 凶作, 暴風雨(ワブ)
- 1738 元文3年5月 雨続き 太田切川満水下の井堰口5百間押流 7月22~23日 風雨田畑損失多し(アカ)
- 1741 寛保1年 洪水 8月 大風, 稲に害虫発生
- 1742 寛保2年8月 天竜川満水(カミ)
- 1747 延享4年 夏寒く稲苗枯死(カミ)
- 1749 寛延2年 昨年凶作につき貧民調査あり,(ワブ)
- 1751 宝歴1年4月24日 北信, 越後に大地震
- 1752 宝歴2年 春如来寺焼失翌3年小町屋船山の現地へ移転再建
- 1753 宝歴3年4月 麻疹大流行 8月 天竜川洪水
- 1755 宝歴5年5月から8月まで雨天続き凶作 夏天竜川洪水(亥の洪水) 両下平河除林に松を植る
- 1756 宝歴6 凶作 下平天竜川原開発地検分と坂木代官天野助次郎出張上穂赤須秣場争論起る。
- 1757 宝歴7年 大洪水両下平用水路大破(アカ)
- 1758 宝歴8年 数年来の天竜河原流跡地出入和解
- 1759 宝歴9年2月 下平河原開発工事久右衛門 団助兵次郎外8人請負となる
- 1761 宝歴11年 下平河原開発工事之右衛門 団助並に兵次郎外8人請負工事進まず両下平村請となる 継争中の中山原野論 9月江戸評定所へ出訴(アカ)
- 1762 宝歴12年5月 大早魃当秋不作 4月 中山原争論につき江戸評定所から地改検使出張和解
- 1763 宝歴13年5月 上穂村内草永上納方に付き紛争中の処江戸表出訴中今年に至り和談内済(城東文書)
- 1764 宝歴14年7月 洪水(キン)
- 1765 明和2年5月 大洪水 8月4日 大出水天竜川通, 古田流失跡地33町3反4畝の内4町起返(カミ)(アカ)
- 1766 明和3年 洪水米穀不作 10両に米28俵(アカ)
- 1767 明和4年 春霜害 養蚕不作 5月 早魃(アカ)
- 1770 明和7年6月 大早魃野菜類干枯 天竜川大減水 徒歩にてわたれた。中馬争議起る。(アカ)
- 1772 安永1年4月 大島宿との中馬争議協定成立
- 1773 安永2年9月1日 大洪水 交通断絶(キヨ)
- 1775 安永4年 春麻疹流行 5月 狂犬現る 8月

- 洪水 7月 飯島 片桐 大島宿より中馬1件に
付訴願(キヨ)
- 1777 安永6年5月 旱魃(アカ)
- 1778 安永7年 春かう秋まで旱魃野菜干枯(キヨ)
- 1779 安永8年7月 洪水 8月 焼砂(火山灰?)
降(キヨ)
- 1780 安永9年6月 霖雨続く 7月 旱魃雨乞(キ
ヨ)
- 1782 天明2年7月 浅間山大噴火、時々大風雨 凶
作飢饉 此冬時々雷鳴
- 1783 天明3年5月29日 雹降る。人畜草木に被害
雨天続き冷氣甚だしく 8月4日 大出水 水田
害虫発生(大沼日記)
- 1784 天明4年 大飢饉行倒続出各藩領内へ施米 4
~5月頃疫病流行死者多し(トンヤ)
- 1785 天明5年1月25日 米穀頗弘底 村々津留出入
口へ番所を設け嚴重監視(アカ)
- 1786 天明6年 当年雨多し冷氣 五穀不熟大凶作各
村騒然飢民食を求め旅出者多く施米 酒造半減
米価暴騰 9月9日 米騒動 穀屋潰し行なわる
(大沼日記)
- 1787 天明7年 長雨降り大凶作 乞食 行倒 餓死
者多し(御用記)
- 1788 天明8年 雨天冷氣にて五穀不作 施米(御用
記)
- 1789 寛政1年6月18日 天竜川氾濫 沿岸地方被害
多 高遠領内特甚し 8月 再洪水 11月 地震
(ワブ)
- 1791 寛政3年7月 大旱魃諸所雨乞 9月 凶作の
ため酒造3分の1減申渡(後聞筆記)
- 1792 寛政4年6月27日 大洪水 米穀暴騰飯田町に
穀屋騒動起る(飯田世代記)
- 1793 寛政5年 春狂犬所々に現る 飼犬届出 (ワ
ブ)
- 1794 寛政6年 稲に害虫発生 酒造3分の1減(キ
ヨ)
- 1795 寛政7年 稲に虫付き代官所より注意(城東文
書)
- 1796 寛政8年1月 天然痘流行 夏土用前雨天勝
米価騰貴人心不穩 飯田町に米騒動起り100軒潰
す
- 1797 寛政9年12月 南下平才次郎、上穂村八五郎兩
人より下平太田原開発出願
- 1798 寛政10年10月19日 雪降る(大沼日記)
- 1802 享和2年4月26日 赤須上穂兩町大火 町内3
分の二 上穂40軒 赤須町60軒焼失(アカ)
- 1803 享和3年1月 麻疹流行 5月 浅間山噴火
6月 洪水(ワブ) 1月26日 光前寺本堂、阿弥
蛇堂、三重塔焼失(上片桐竜泉寺文書)
- 1806 文化3年7月 洪水 五穀豊作米価下落(城東
文書)
- 1807 文化4年5月27~6月3日 大雨田畑流失 殊に
天竜川、上穂川、太田切川、中川大満水(アカ)
- 1808 文化5年7月25日 大雨洪水 氣候不順(城東
文書)
- 1809 文化6年3月1日 上穂南町源左衛門後家火元
同人焼死 上穂赤須兩町全焼 上須町総78軒焼失
(アカ)
- 1810 文化7年7月 天竜川、三峯川洪水(ワブ)
- 1811 文化8年1月2日 上穂町宿免片端より出火
上穂赤須兩町にて12軒焼失 馬1疋焼死(ワブ)
- 1813 文化10年9月6日 大霜降る。その後も大霜降
(城東文書)
- 1814 文化11年6月 旱魃(アカ)
- 1815 文化12年1月20日 浅間山噴火 6月27日 長
さ4寸~7寸位の白毛天より下る 7月 雨続
(ワブ)
- 1816 文化13年4月30日 晴天中俄に大風雨雹降 6
月19日 太田切川洪水往来橋流失 8月2~6日
まで大風雨
- 1817 文化14年7月 大旱魃
- 1818 文化15年5月 旱魃諸所に雨乞 4月 地震
- 1819 文政2年4月 狼諸所に出現 6月12日 地震
(ワブ)
- 1820 文政3年5月 春以来旱魃 米穀減収(ワブ)
- 1821 文政4年5月より7月まで旱魃 田植差支(ワ
ブ)
- 1825 文政8年8月 本年雨多く蝗^{いなご}発生凶作(ワブ)
- 1827 文政10年4~7月 洪水 橋、井流失多し(ワ
ブ)
- 1828 文政11年5~7月 天竜始め太田切川等度々流
失。
- 1829 文政12年6月 洪水 12月22日 昨年3月以来
の継荷1件の中馬騒動審議中の所済口和解 (ア
カ)
- 1830 文政13年2月14日 洪水太田切橋流失 瀬越人
夫288人。4月伊勢大神宮の御札降る(ワブ)
- 1831 天保2年5月 旱魃 本秋凶作(ワブ)
- 1832 天保3年5月以来霖雨時々洪水 五穀不作 米
価騰貴平年の10倍 凶作に付き破免を願出(ワ
ブ) 上穂本郷内山、竜沢尻無内山の杣小屋に放火
出入となり12月に至り内済せしも翌年再発再出入
(大沼日記)
- 1833 天保4年3月 下平河原流跡地出入となる

- 4月～6月まで長雨降続 稲田に害虫発生(大沼日記) 7月天候不順価高騰 世人騒然 米屋潰の噂出る。8月 大風雨 諸作吹き倒され米価暴騰 11月 北下平仁兵衛, 下平河原開発出願(アカ)
- 1834 天保5年8月 洪水 気候不順 凶作 11月～12月 疱瘡流行 酒造3分の1減石 3月 福沢憲治「饑年要録」を編む(ワブ)
- 1835 天保6年6月30日 大風 8月10日～13日 大風雨 大木倒れ稲吹き倒され凶作 世上騒然
- 1836 天保7年4月 大雨洪水 山崩 悪疫流行
- 1837 天保8年4月 米価騰貴 8月乞食非人行倒多し 上穂赤須両町役人酒造人に酒造減石強要(アカ)
- 1838 天保9年4月29日 大雨大洪水 3月17日 赤須町上穂町大火 中町, 北町全焼, 上穂町45軒, 赤須町44軒類焼 4月18日 上穂町宿免より出火 上穂町4軒, 赤須町6軒類焼 4月29日 大雨洪水 米価再高 閏4月24日～26日まで大雨(アカ)
- 1839 天保10年2月 上穂町より度々の出火により出入となったが条件付きにて解決(上穂町文書)
- 1841 天保12年3月2日 地震 3月17日 天竜出水
- 1842 天保13年5月17日 洪水 4月7日 大雹降(ワブ)
- 1843 天保14年11月 天然痘流行死者多し 9月10日 数年来争論の赤須町下平村天竜川原流跡開発の件和解仮規定取替わす 11月12日 藤三郎方より出火 上穂町9軒 赤須町10軒類焼 12月 飯島大火(アカ)
- 1847 弘化4年3月 大洪水 4月17日 雹降り作物被害甚大 3月7日8日 大雨洪水 3月24日 善光寺大地震同時火災起る。8月上旬俄に冷氣 8月28日 大霜降(ワブ)
- 1848 嘉永1年2月 旧冬より疱瘡流行悪性死者多し 10月11日 旋風 荒模様同夜赤須町叶源より出火 6月 天竜川大洪水 水死人あり(ワブ, キヨ)
- 1850 嘉永3年5月 下旬より霖雨 6月 洪水引続き雨天 冷氣 7月21日 洪水今年不作に付小作料1割引 9月より翌年2月まで天然痘流行(キヨ)
- 1851 嘉永4年 春天然痘流行 秋コレラ流行 8月1日 洪水 秋稲虫発生減収(ワブ)
- 1844 天保15年1月 赤須上穂両町共同火消道具につき談事, 中馬騒動起る 3月9日 大風 8月 大雨(ワブ)
- 1845 弘化2年2月 両町火消道具新調 両町にて1
- 2, 3駒5と5組の火消組組織 上穂村松崎文義 始めて植種疱瘡療法を行なう。4月17日 上穂赤須両宿大火 赤須南町より出火 上穂町21軒, 赤須町34軒類焼(石屋火事)(ワブ)
- 1846 弘化3年1月 疱瘡流行 2月 赤須町両下平天竜河原開発の件和解内済 4月16日 大霜降る 5月1日 大風雨洪水 諸橋流失50年来の大荒 6月4日 霜降 6月18日 光前寺本堂焼失 8月 安楽寺大門へ火の見櫓を建つ 4月16日 大霜桑葉黒変(アカ)
- 1852 嘉永5年6月 大旱魃 8月16日 大風雨諸橋流失被害甚大 12月11日 近年稀な大雪降(ワブ)
- 1853 嘉永6年2月 地震 6月3日 浦賀へ異国船来 7月 各地旱魃。宮田上穂太田切川井口にて水論(大沼日記)
- 1854 安政1年2月 天然痘流行 2月14日 地震 4月26日 大風雨 6月18日～19日 風雨洪水 11月4日 安政の大地震。伊那地方に被害有り 12月1日 地震 6日 地震 8日まで度々揺る 飯田被害家屋589軒(ワブ)(キヨ)
- 1855 安政2年10月2日 夜地震 3月 梵鐘微発(城東文書)
- 1856 安政3年2月 疱瘡流行 狂犬病現る 8月 大風 江戸大風雨被害甚大にて木材その他払底(ワブ)
- 1857 安政4年5月17～18日 大雨 天竜川, 太田切川大満水, 諸井頭, 境の木より切込み両下平被害甚大 流死人1人 7月29日 大雨夥敷洪水 山崩, 井筋跡形も無く押潰す(シモ)(大沼日記)
- 1858 安政5年2月15日 大地震 3月5日 地震 6月17日 雹降る 6月21日 洪水 7月21日 上穂村中割と北割本郷と南山々論 8月より9月まで雨天がち 全国にコレラ大流行 9月 当秋不作(ワブ)
- 1859 安政6年5月15日 大洪水(文化4年来の洪水) 3月24日 上穂中割北割南山々論和解 7月 洪水(ワブ)
- 1860 万延1年5月11日 数日来の大風雨 天竜川満水田畑流失多し 3月より7月まで雨つづき凶作 4月1日 上穂赤須両町穀留 5月15日 太田切川大洪水, 下平川除林上より下平へ切れ込み, 北下平田畑流失甚大, 文化4年の洪水以上 8月25～26日 両朝霜降る, 凶作 物価高騰(シモ)(大沼日記)
- 1861 文久1年2月13日 地震 本年凶作悪疫流行 1月28日 塩木と上穂中割中山原争論再発 2月

- 13日 地震 2月21日 流星西より東へ飛ぶ響雷の如し
- 1862 文久2年6月 旱天 7月 洪水 8月 天然痘麻疹流行
- 1863 文久3年5月 麻疹並疫病流行死者多し 6月20日 夜上穂町坂頭火事 13軒類焼 8月 東西獄に大雪降る その後一兩日里方に薄霜降る 9月4日5日 大霜降り蕎麦皆無 田畑共凶作(大沼日記)
- 1864 元治1年4月1日~2日 両朝大霜, 桑芽大痛 苗代に氷張る。4月14日 大霜蒞敷, 秣大痛 11月22日 水戸浪士武田耕雪齋以下884人, 馬108疋 68軒へ分宿 同月水戸浪士追討の御公役御目付人足600人通行 12月 水戸浪士追討賄方人足300人 馬30疋通行 11月 報国の為上金と称し水戸浪士に献金 羽場小町各氏, 福岡西福沢氏, 殿村北沢氏, 堰原氏にて750両, 木村屋茂市120両, 両町にて30両抛出(大沼日記)
- 1865 元治2年2月 疱瘡流行, 悪性にて小児死亡多し 3月 始めて種痘法を行なう 3月29日 上穂の若者300人余上穂赤須両町を襲ひ大荒乱暴
- 1865 慶応1年5月10日 米騒動 上穂村北割北原に100余人集り, 穀留並安米売を決議(吉五郎一件) 両町安米売出 5月17日 豪雨大洪水 往還川瀬となる。太田切川本瀬下平井筋へ切込, 徳本林の松100本切り, 往還上の処に川除を作る。田沢は森の上より堂の南へ押込み大荒 6月15日 再洪水 9月 今秋凶作各村検見申請, 赤須町小作料1割半, 上穂町1割引 12月21日 大雪降る(大沼日記)
- 1866 慶応2年2月 上穂, 赤須両町内だけにて, 穀留を決議, 奥筋, 下筋より中馬止, 中馬騒動 5月18日 普請役, 勘定方役人30人上穂, 赤須両宿へ数日滞留, 近郷の豪農を召寄せ上金を強要 5月7日 穀類その他諸物価暴騰, 穀屋潰しの風聞あり世上騒然酒造4分の1減 6月 信州各大小名京, 大阪へ進発に付御用金頻々課せられる 8月7日 大風雨 田畑山林共に大被害 8月15日 再び大風雨, 今秋凶作 8月 洗馬村に百姓一擧起る 8月 天然痘流行 10月 米価暴騰(大沼日記)
- 1867 慶応3年9月 神符降る所謂御蔭祭, 農民狂喜して動揺す 10月 大政奉還 12月9日 王政復古の大勅降る。(大沼日記)
- 1868 慶応4年1月7日 大風雨上穂, 赤須両町内屋根破損多し 2月4日 鎮撫御勅使高松皇太后宮小進実村郷通行 八ヶ村にて人足200人荷物継立
- 2月6日 赤報隊教導隊 相楽惣三の大賄方80人一行通過 5月5日 大風雨, 諸橋流失, 下平原原田地決失 5月18日 大満水 7月2日 天竜川大洪水(辰満水) 9月24日 田方検見 9月25日 年号を明治と改む 10月8日 米他所売渡並に酒造米買入見合せ御触出る(カミその他)
- 1869 明治2年3月 冷害大凶作, 天保の飢饉に次ぐ 3月, 4月 再度伊那県より御触が出る 7月13日大風雨 11月 民政局より御達が出る。
- 1870 明治3年9月8日 各所に大洪水 10月 凶作につき米穀売買につき御触あり(松尾小使)
- 1872 明治5年1月1日 銭の値高下甚しく, 商品買占行わる 1月13日 高遠辺より商人20余人入込み金札にて諸色買付騒々しく, 中田切川南原用水路起工(大沼日記)
- 1874 明治7年7月 近年稀な大早魃 7月 赤穂, 宮田両村々境示談確定 12月 中田切用水路竣工
- 1876 明治9年8月 早魃 9月15日 洪水
- 1877 明治10年5月, 7月 再度洪水 6月 中町, 北町, 南町道路普譜 8月8日 大地震 9月15日 大洪水 10月 近年稀な連日大風雨, 大出水橋流失 1月11日 大風倒木, 倒家(文化史年表)
- 1878 明治11年6月 諸井頭へ70間の官営石堤, 太田切橋上へ聖牛2組を入れる
- 1879 明治12年12月3日 地震 10月 コレラ発生(文化史年表)
- 1880 明治13年5月24日 地震 10月 暴風雨大満水 天竜川氾濫
- 1881 明治14年1月19日 大雪 7月 大風雨, 鼠川上流洪水(今棚山押出す) 9月 大雨出水, 往来筋諸橋不残流失(上穂琴ヶ沢, 中山原, 中割, 南割大荒, 鼠川, 上穂沢橋蓮台場, 石橋等)(文化史年表)
- 1882 明治15年4月 宿免より木村屋まで道路修繕, 5月8月9月 豪雨あり 10月1日 大洪水(文化史年表)
- 1883 明治16年1月25日 金原明善時又の天竜川の岩を破碎す 3月15日 宿免の大火21世帯, 41棟焼失 8月 日食, 天地朦朧として朧月夜の如し 11月 火消道具揃い町内若者100余人火消出初式(文化史年表その他)
- 1884 明治17年7月15日 天竜川氾濫流失面積下平原分4町8反余 洪水大不景気(シモ)
- 1885 明治18年4月 出水 6月 雪降 7月1日 暴雨, 下平諸井頭, 境の木, 夜魚川, 丸塚より切込み下平原原の分更に残らず流失, 面積110余町歩に及ぶ。急波堤防竣工(シモ)

- 1886 明治19～20年にかけて下平諸井頭へ全長80間堤防入る。献金堤防（小出文書）
- 1888 明治21年 官営石堤築造（20年5月起工21年11月竣工）高さ3間、長さ200余間 8月31日～9月10日 洪水
- 1889 明治22年7月15日 天竜川氾濫（明治19年～20年に構築した）80間堤防流失、水位1丈余、田畑流失面積27町2反10歩 7月26日 暴風雨 9月11日 強風雨、田畑流失夥し 5月 下平小屋前に堤防築造（北村文書）（シモ）
- 1890 明治23年4月19日 洪水流失面積田3町3反、聖牛14組流失（シモ） 3月28日 菅沼大火、焼失30世帯、40棟（消防本部資料）
- 1891 明治24年1月 下平山の鼻へ石堤延長140間を築く 9月30日 暴風雨、天竜洪水下平河原流失面積田52町2反7畝13歩 2月 下平夜魚川へ「ジャカゴ」を入れる（90円31銭） 10月28日 濃尾地震（シモ）
- 1892 明治25年 下平夜魚川へ聖牛18匹、小屋前へ13匹入れる（シモ）
- 1893 明治26年 洪水 下平河原流失面積50町8反7畝 下平夜魚川へ中聖牛5組、竹カゴ5本入れる（シモ）
- 1895 明治28年 下平夜魚川石堤20間聖牛4組、5間カゴ14本、小屋前へ石堤3間入れる（シモ） 1月18日 大地震 6月、8月 洪水（キヨ）
- 1896 明治29年 春急破堤防丸塚小牛11組、ジャカゴ14本入れる（シモ）
- 1897 明治30年9月29日 大洪水被害甚大 7月 下平夜魚川石堤築造延長470間 8月 ウンカ蔓延大凶作、避病院破壊事件生ず（シモその他）里道鹿塩街道改修、里道小鍛治線改修
- 1898 明治31年4月7日 米価騰貴、外米買入 9月 暴風雨、大鹿方面に死者あり。下平諸頭へ官営聖牛3組、私営大聖牛38組入れる。天竜川本流をせき止め伊那村地籍へ水を追った。その為伊那村と争論起き両村共惣人足を出して騒論（シモその他）
- 1899 明治32年11月 凶作米価騰貴、下平天竜大橋始めて架設 伝染病院移転新築（文化史年表）
- 1903 明治36年3月8日 菅沼大火、焼失、20世帯33棟130人 7月 天竜川及太田切川大洪水
- 1905 明治38年6月 天竜川大洪水 7月14日 暴風雨、太田切川大洪水、石堤破損、天竜川大洪水 8月4日 俄然冷氣加わり 8月17日、18日 洪水 10月 冷氣、凶作（キヨその他）
- 1907 明治40年2月17日 光前寺念仏堂全焼 8月24日より大雨小洪川、天竜川増水 2月 下平夜魚川へ150間 諸井頭へ100間堤防築造
- 1909 明治42年 下平河原堤防修繕工事請負金649円20銭、木工沈床5間×4尺のもの40間構築 5月 赤穂町辰見町道路開設（シモその他）
- 1910 明治43年8月13日～17日 南信一带集中豪雨各地被害甚大、下平向河原より古町尻へ切込み丸塚一带白河原と化す 9月9日 大山長野県知事水害視察。（シモその他）
- 1913 大正2年 下平夜魚河原堤防修繕工事50間竣工
- 1915 大正4年3月 小学校前教員住宅焼失 6月 赤穂月花町大火7戸焼失、諸井頭へ大聖牛11組、夜魚河原中聖牛10組、鉄線カゴ40本を入れる
- 1918 大正7年8月 米価暴騰 救済安米を売出す。下平夜魚河原空積石堤85間、木工鎮床幅4間、長さ85間竣工
- 1920 大正9年6月 太田切川駒ヶ根橋架設工事竣工
- 1922 大正11年1月13日 赤穂玉屋町の大火、焼失5世帯。
- 1923 大正12年6月9日及ど22日の両度の暴風雨は飯田測候所開設以来の最高雨量、下平田沢川氾濫、家屋流失、倒潰3戸、下平丸塚水田流失、冠水甚大、中沢四徳川氾濫 7月18日 鼠川大氾濫（シモその他）
- 1925 大正14年4月 上穂本町通 五十鈴町、中田切井堰、その他水害復旧工事竣工
- 1926 大正15年2月5日 中沢中割天竜社製糸工場焼失 5月 小鍛治線橋梁、中筋線山道、支線道路災害復旧工事竣工 2月～5月まで下平諸井頭に延長100間高さ3間半の玉石コンクリート付堤防築造、並に幅4間、延長150間の木工鎮床築造 11月 天竜大橋下既設石腹付堤防築造延長280間法高5尺、玉石コンクリート表腹付根継工事並に既設石腹付メチ塗り延長80間幅法高5尺修繕工事根固め木工鎮床、延長80間、幅3間半修繕工事竣工。下平夜魚河原へ長さ100間羽取コンクリート石腹付エン堤の上へ法高3尺の土砂堤を猶床固、木工鎮床幅4間長さ100間、この工事費12,200円竣工 8月 光前寺北線道路改修工事竣工 9月 古田切線道路開設橋梁架替工事竣工 11月 田沢簡易水道工事竣工 6月6日 天竜水電と赤穂村長、天竜川水力発電について契約締結をなす（第二条要旨、灌漑設備その他既得の利益を害せざるため、相当の設備をなす。若し損害を生じた場合は相当保償をなすものとす）天竜水電発電所について来赤した。農林省、副流水の権威者鈴木技師に依頼、太田切川の副流水5箇所ほど調査（シモその他）

- 1927 昭和2年5月8日～9日 大霜被害甚大 6月13日 降雹 5月 赤穂中筋宮前支線道路, 赤穂町線字原垣外赤須道路, 上穂大手線道路改修工事竣工 7月 上穂本線道路改修工事竣工 11月 下平部落伝染病患者18名発生(文化史年表)
- 1928 昭和3年2月11日 稀有の大雨 4月 下平丸塚継続修繕工事 延長62m, 工費4,200円竣工 8月23日 大暴風雨被害甚大 12月 下平天竜大橋下既設石腹付堤防, 延長620m 法高2m 70コンクリート表腹付根継工事並に根固木工鎮床長70m 修繕工事竣工
- 1929 昭和4年5月 赤穂腸チブス患者発生17名
- 1930 昭和5年1月11日 金解禁施行 6月 殺人的不況, 各地無尽講関係一切休止 4月 太田切川通りへ長4間, 経3尺鉄線カゴ40本をもって延長20間, 直高9尺, 鉄線カゴ腹付堤防復旧工事, 経費644円竣工 7月31日 大暴風雨被害甚大(シモ)
- 1931 昭和6年2月 流行性感冒伊那谷に侵入 町村政極度に窮乏, 教員, 役場史員の俸給支払にも支障を来す町村出来る 11月7日 大豪雨被害甚大(キヨ)
- 1932 昭和7年4月19日 中沢落合の大火, 焼失, 6世帯, 13棟 7月2日 豪雨各所の橋梁, 人家流失田畑浸水多し 11月14日 大風雨水害, 風速21米家屋, 電柱, 煙突の倒潰多数。(消防本部資料その他)
- 1933 昭和8年2月 下平諸井頭へ大聖牛修繕, 鉄線カゴ, 長4間, 経3尺のもの34本, 長18尺経3尺のもの18本の外, 大聖牛2組, この工費300余円築設 3月 太田切川通り延長200m 法高4m 50カゴ長8m 20, 経0.9m, 206本, 農救事業として鉄線カゴ堤防復旧工事竣工, 経費3,950円(シモその他)
- 1934 昭和9年9月22日 大暴風被害甚大 倒壊家屋あり(キヨ)
- 1935 昭和10年5月21日 降雹あり 下平丸塚へ100間玉石コンクリート堤防, コンクリート鎮床を築造, 工費20,000円 8月 下平諸井頭急破川除として聖牛4組, 工費400円(下村調査)
- 1936 昭和11年9月27日 豪雨, 所々橋流失, 2月まで有志会で研究して来た太田原開発問題を関係者調印, 正式に下平耕地総代に申請書提出 3月 耕地初集会において満場一致耕地にて取上げる事に可決 4月 赤穂栗沢線天竜大橋, コンクリート永久橋に架替
- 1937 昭和12年4月2日 赤穂町玉屋町カフェー, ユニオンより発火, 焼失66世帯, 72棟, 302人, 死者2人, 負傷者38人 7月15日～17日 降雨各地に被害続出 2月～5月 諸井頭石堤修繕工事, 玉石コンクリート堤防, 延長82m, 高8m, 石積, 木工鎮床幅5m 50, 長82m を築造工費4万3千余円
- 1937 昭和13年7月1日 連日豪雨各河川氾濫 5月 太田切橋現在の鉄筋コンクリートの永久橋となる 7月 下平諸井頭より切れ込み, 150間堤防決壊中沢新宮川大氾濫, 被害見積355町歩, 道路決壊4,000m, 用水路100m, 堤防3カ所, 家屋流失10戸, 埋没30余戸土砂浸入15戸, 大小山崩各所にあり。下平天竜大橋上境の木の堤防修繕工事施行
- 1940 昭和15年1月 矢作水力株式会社が宮田村大久保へ, 第二発電所設置の計画あるを聞き及び, 下平部落種々研究協議, 耕地総代中域数吉, 下村忠比古外関係者代表より, 赤穂村長へ陳情書を提出 それにより赤穂村から長野県知事へ陳情書を提出 部落民の主張通りこの件取りやめとなる(シモ) 2月2日 赤穂村長より太田原開発水利の件につき県知事に陳情書提出 6月19日 雷雨性豪雨, 天竜川増水, 飯田の雨量212耗, 飯田測候所開設以来
- 1941 昭和16年3月27日 昭和病院が狂人の放火により食堂を残し, 事務室, 病棟全焼 4月28日 降雨各地に被害あり 7月 食糧不足, 熊笹の実を食す(キヨほか)
- 1942 昭和17年 下平丸塚へ農道(防波堤防)構築。延長174m, 法高5尺, 馬踏6尺補助工事
- 1945 昭和20年8月15日 終戦放送全国感無量, 夏以来雨続き 10月5日 豪雨, 水田, 家屋流失, 水死人を出す。今秋不作, 食糧不足万民苦しむ
- 1946 昭和21年4月 食糧危機突破青年協議会活動。赤穂全町組織 開拓婦農組合設立 10月25日 竜水社赤穂工場食堂より出火, 製糸部乾燥場を消しとめ, その他焼失。
- 1947 昭和22年1月20日 開拓営団より下平太田原開発地高低調査に出張 2月11日 太田原開発を目的とし, 下平開拓婦農組合設立, 組合員30数名 3月4日 赤穂町開拓婦農組合役員会開催, 町内太田原, 下平及び切石原3カ所を開拓予定地として申請することを決定 3月12日 入植者審査を行なうにつき開田促進運動を起す(松崎文書)
- 1949 昭和24年3月20日 赤穂石川町協栄木材搾油機関室より出火, 焼失10世帯, 60人 4月15日 下平店通り焼失。19世帯, 55棟, 95人。
- 1950 昭和25年6月7日 赤穂町赤穂工業火災。焼失

7棟 2月 下平字丸塚 延長120m, 法高6m 幅8m, 官費173万円, 鉄筋コンクリート堤防築造。下平船渡島へ堤防を入れる 6月14日より6日間連続降雨, 下平地籍船戸島堤防100m決壊, 流失水田13町4反6畝, 丸塚10町歩浸水, その内一部流失。天竜橋東側一部陥没。北下平大橋上流の堤防乗越え, 6月13日より水田地帯に浸水, 大橋上の堤防決壊, 水田流失, その他河原地域は3月から7日間冠水。南下平丸塚約10町歩冠水, この地帯は赤須峡ダムによる河床上昇のため, 水稲茎葉黄化枯死多し

昭和25年6月の大水害の際下平より提出した懇請書

懇請書

赤穂町下平地籍は天竜川沿岸地で土地極めて肥沃の地でありましたが, 大正15年天竜川水電発電所ダム設置以来天竜川床に土砂沈滞し, 洪水時は冠水または氾濫し, 既に20数町歩の美田が流失し, 今日にいたるも復旧せず, また田面に湧水して年々耕作不能地となる水田が遂年に増加しつつある状態であります。なお地下水の上昇によって100数10町歩の全耕作地が湿地帯となり, 収穫が激減し, 吾等耕作者が年とともに窮状におこまれて居る実情であります。このままでは到底しのびないのでありますから, 過去における損害を補償せられ, なお将来適当なる施設をなし, 冷害及び洪水による災害を未然に非除し, 吾等が安心して農耕でき得よう関係者一同連署をもって懇請する次第であります。

昭和25年10月

第三発電所(吉瀬)取入口ダムによる被害調

上伊那郡 赤穂町下平地籍

1. 金53,816,887円也 被害額

内 訳

1. 平時の被害(昭和20年~24年の5カ年間)

(1) 地下水上昇による農作物被害

金34,283,600円水田被害面積125町歩

金1751,355円2毛作及畑地63町歩

(2) 洪水時における被害

金1450,000円

(3) 用水施設の被害

金5086,500円

2. 今次出水による被害(昭和25年6月)

金11245,432円

合計 53816,887円

被害理由及内訳

河床上昇の実情

ダム設置計画によれば平水時1,710m地点において河床一致し, 洪水時において2,647m地点に於て一致する仕様書なるも

現況は

ダム起点 1,710m 上昇 4.50m 小鍛冶沢地点

" 2,347m 3.00m 計水量地点

" 2,647m 4.00m 丸塚地点

1951 昭和26年7月3日~16日 雨天続き, 丸塚の堤防120m決壊, 本瀬が西方に向い水田1町2反流失その他冠水面積10町歩に及び順次枯死, 復旧の見込全くなく, 一面河原と化す。26年~27年天竜大橋復旧工事並に堤防築造工事継続中

1952 昭和27年1月 丸塚農道(防波堤防)修繕工事延長140m, 県費補助216万円, 地元負担24万円, 総工費240万円, 3月竣工。その後さらに南へ延長320m, 馬踏6m, 法高8mの堤防築造 12月27日 赤穂町石川町協栄木材工場火事, 焼失, 6世帯, 8棟, 44人 6月23日 台風, 橋梁, 道路など被害多し。

1953 昭和28年6月7日 台風2号襲来 7月17日~20日 大豪雨 9月25日 台風13号が長野県を縦断(7月21日降雨量491.1mm)連続的に災害が繰り返され, この年雨天180日に及び天竜川及びその水系の河川氾濫, 堤防を破壊田畑を流失, また異常低温のためイモチ病発生稲作は5~6割, その他農作物も不作減収, 10月には凶作協議会が発足11月 凶作突破青年大会が開催されるなど, 災害凶作深刻化, 外米配給 凶作対策, 生活改善が強くさげられた。

1954 昭和29年3月 名塩国道 中田切橋 現在の鉄筋コンクリートの永久橋に架替 3月7日 駒ヶ根駅前より出火 焼失, 23世帯 26棟 罹災者100人。

1956 昭和31年各地に凍霜害対策協議会発足 8月14日 福岡大力木材会社赤穂工場火災 焼失 工場など5棟

1958 昭和33年 中沢吉瀬橋現在のコンクリートの永久橋に架替

1959 昭和34年8月26日 5月の凍霜害に始まり, 連続的に台風が襲った。そのうち特に甚しかったのは, 8月14日の台風7号, (風速37m) 9月26日の台風15号の被害は死者98人, 壊滅した財産見積は352億円に及び本県としては, 有史以来のできごとであった。上伊那地方では三峰川上流 戸台川の鉄鉤水で戸台分校を押し流し, 下流三和ダムには一時2,000石~3,000石の流木が浮び, 三峰川に架った橋は全部流失, 地すべりもあり, 交通は

全く途絶した。

1960 昭和36年6月23日～27日 梅雨前線の被害は各地とも実に大きく、特に関係地域では、中沢地区新宮川、四徳川の流域殊に甚しく、東伊那地区では天王川氾濫一戸流失、中川村四徳、大鹿村大河原の大西山の崩落による死者39名を出した。

かんがい用水路施設調べ

| 河川名 | 井堰名 | 開設年代 | かんがい 面積 | 関係地域 |
|-------|-------|-------|------------|--------|
| 天 竜 川 | 大久保井 | 昭和8年 | 30町 | 宮田大久保 |
| " | 下り松井 | 明治以前 | 30 " | 東 伊 那 |
| " | 大 井 | " | 150 " | 下 平 |
| " | 相 田 井 | " | 12 " | " |
| " | 殿 村 井 | 大正5年 | 10 " | 東 伊 那 |
| " | 舟渡島井 | 慶応年間 | 10 " | 中沢, 下平 |
| " | 丸 塚 井 | 明治以前 | 20 " | 下 平 |
| 太田切川 | 下 平 井 | " | 30 " | " |
| " | 太田切井 | " | 60 " | 宮 田 村 |
| " | 丸 山 井 | 明治以前 | 155町 | 宮 田 村 |
| " | 開 田 井 | " | 50 " | 赤 穂 |
| " | 大 沢 井 | " | 40 " | 宮 田 村 |
| " | 上 の 井 | " | 360 " | 赤 穂 |
| " | 下 の 井 | " | 300 " | " |
| " | 大久保井 | " | 10 " | 宮 田 村 |
| ねずみ川 | 番 田 井 | " | 40 " | 赤 穂 |
| " | 大 北 井 | " | 15 " | " |
| 塩 田 川 | 崩 岩 井 | 明治6年 | 10 " | 東 伊 那 |
| " | 塩 田 井 | 明治8年 | 10 " | " |
| " | 中 井 | 明治2年 | 15 " | " |
| 天 王 川 | 天 王 井 | 明治2年 | 20 " | " |
| 下 間 川 | 小 山 井 | 大正2年 | 30町 | 中 沢 |
| 新 宮 川 | 原 井 | " | 10 " | 中沢東伊那 |
| " | 樋 泉 | 明治5年 | 50 " | 中 沢 |
| " | 上 の 井 | 明治以前 | 60 " | 東 伊 那 |
| " | 下 の 井 | " | 30 " | " |
| 大曾倉川 | 大曾倉井 | 明治7年 | 20 " | 中 沢 |
| 百々目木 | 樋ヶ下井 | 大正10年 | 70 " | " |
| " | 大 角 井 | 大正3年 | 20 " | " |
| " | 菅 沼 井 | " | 20 " | " |
| " | 横 吹 井 | 明治8年 | 40 " | " |
| " | 新 井 | 大正10年 | 80 " | " |

あ と が き

昭和36年6月、梅雨前線豪雨による悪夢のような災害が発生して以来満3年、土砂に埋没または流失した、新宮川岸、舟渡島などの田畑も緑に彩られ、河原と化した新宮川、百々目木川流域の護岸も成り、道路、橋梁も整備されて、濁流の跡もとどめずにまわりの緑と永久橋や堤防を映して川は静かに流れています。

しかし災害のため残された爪痕は、犠牲者の肉親や、住みなれた故郷をあとに移住した方々の胸の中に、また災害を体験したすべての人々の悩裏に、そこここの草むらの中に、そして夕日に映える伊那の山脈に鮮やかにのこされています。

これらの爪痕や、体験、教訓、また悲しみや苦しみも爪痕が緑に包まれ、橋梁や堤防が色あせる頃になると忘れ去られてしまいます。この忘却は辛苦をいやしてくれますが、災は忘れた頃にやってくる——といわれるように、祖先の時代からくり返し襲来しています。

このたびの市制10周年並びに復興記念式典にあたって、36年6月災害を中心として、昔から故郷をおそった各種災害の概要をまとめ、災害の教訓と筆舌につくせぬ災害の姿や、再現することのできない災害前の姿、多くの人々の善意と努力によって復興成った故郷の姿等を記録にとどめ広く頒布するため、駒ヶ根市誌資料集の一環として刊行しました。

内容は、写真、図表で災害前から災害、復興までを見ていただくとともに、なお詳しく資料を求められる方のために、第I編、第II編の記録を収録しました。

しかし、限られた誌面のため多くの収集資料を割愛して概要にとどめましたので、不十分な点、記述の無理、片手落の面などもあるかと存じますが、今後とも資料の

提供、叱正などいただいて、正確な資料の伝存につとめたいと存じますからご協力をお願いいたします。

このたび割愛したが資料はながく当館資料として収蔵し研究資料とするほか、市誌刊行のおり活用したいと思います。

なお本誌の執筆は当館学芸員全員が協力しておこなったがおもな分担は次のとおりである。

第I編と年表を下村忠比古、第I編のうち、昭13、25・34年8月・34年10月災害の各項と、第II編の日録を木下義男、第II編のうち、中川村四徳・大鹿村の災害を宮下一郎、概説および編集を小池金義。

次に参考文献および資料提供者の芳名を掲げ厚く御礼申しあげます。

参考文献、駒ヶ根市災害対策本部関係資料（駒ヶ根市役所）、濁流のあと（上伊那地方事務所）、濁流（中沢小学校）、伊那路（上伊那郷土研究会）、伊那（伊那史学会）、上伊那誌自然篇（上伊那誌編さん会）

資料提供者、中部地方建設局天竜川上流工事事務所、大鹿村役場、上伊那誌編さん会、駒ヶ根市役所、小松兼夫・小松正美（旧住所四徳）、下沢明広（旧住所大鹿村）渋谷保男（東伊那）

おわりに、執筆者・資料提供者はじめ引用させていただいた参考文献の執筆者、編者の諸氏、ご協力をいただいたみなさんに厚く御礼申しあげますとともに、終始刊行についてご配慮をいただいた前館長北沢照司氏、原稿・資料の整理に努力した当館書記松崎研定、佐藤侯子の両君に感謝いたします。

昭和39年7月

駒ヶ根市立駒ヶ根博物館長

小池金義

昭和39年7月10日 印刷

昭和39年7月13日 発行

駒ヶ根市誌資料第8集 駒ヶ根の災害誌

定価 250円

駒ヶ根市赤穂2423の6

編集発行所 駒ヶ根市立駒ヶ根博物館

岡谷市川岸108番地

印刷所 中央印刷株式会社